

587-345



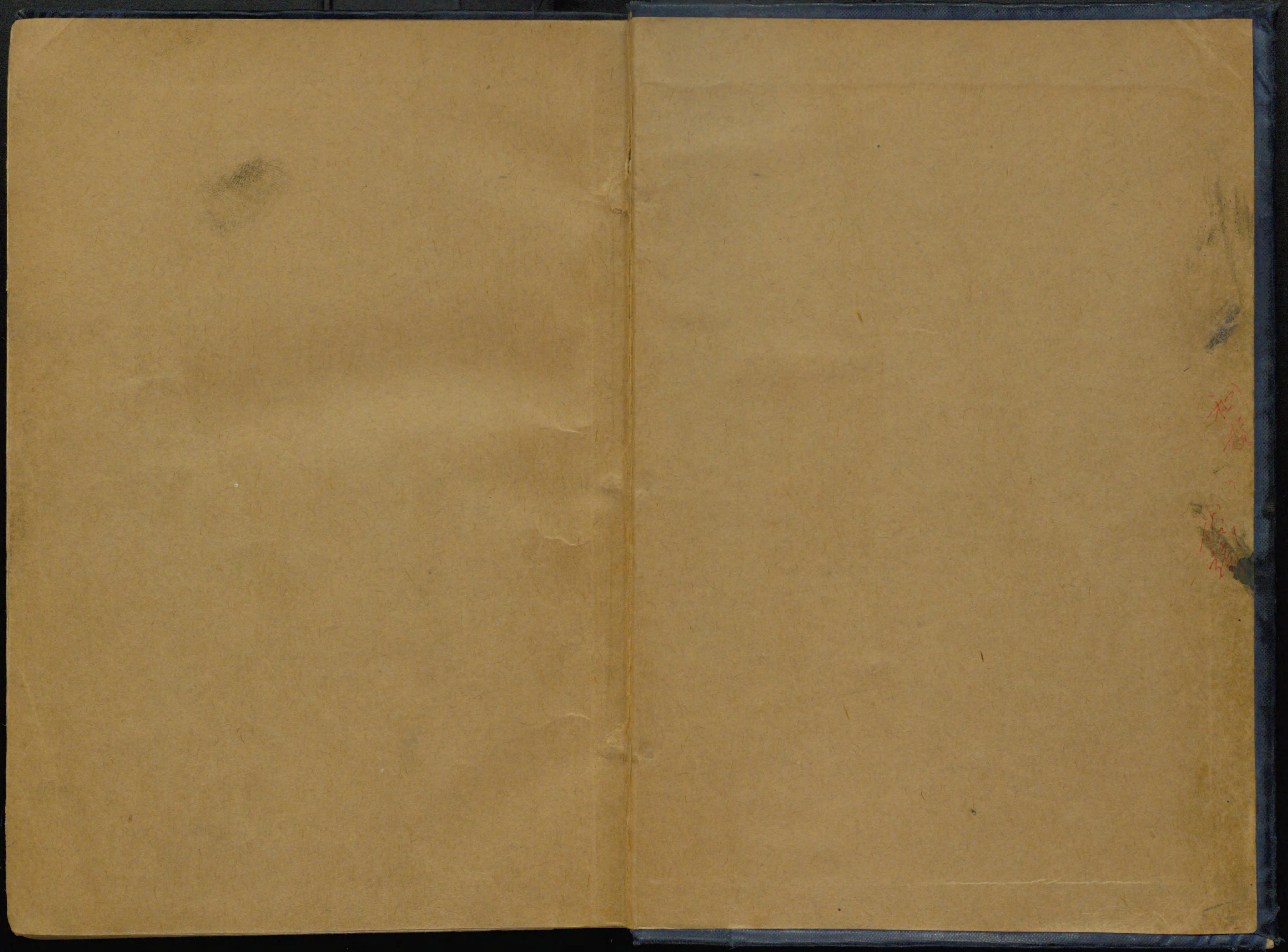
1200501524784



口  
複  
写





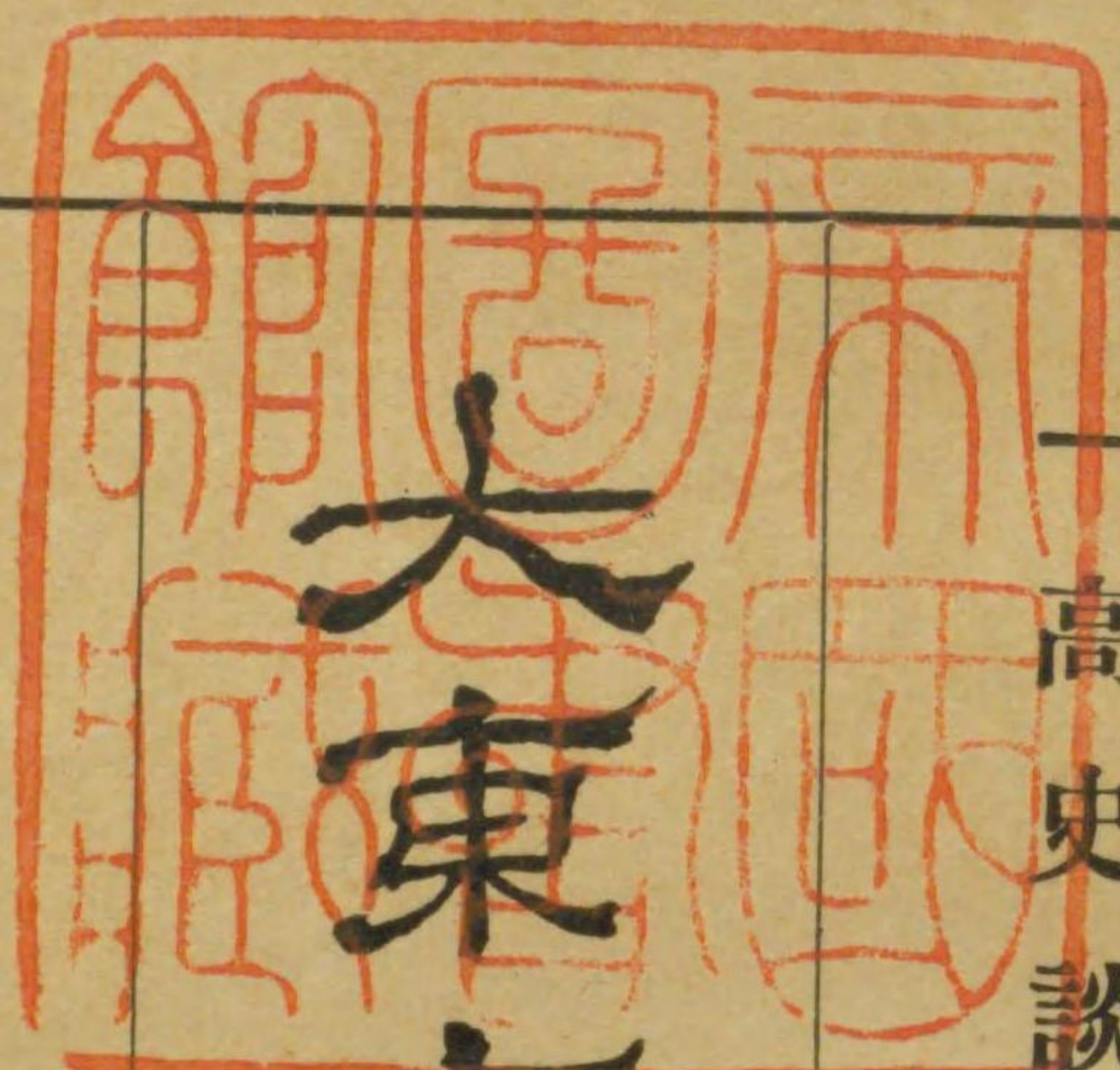




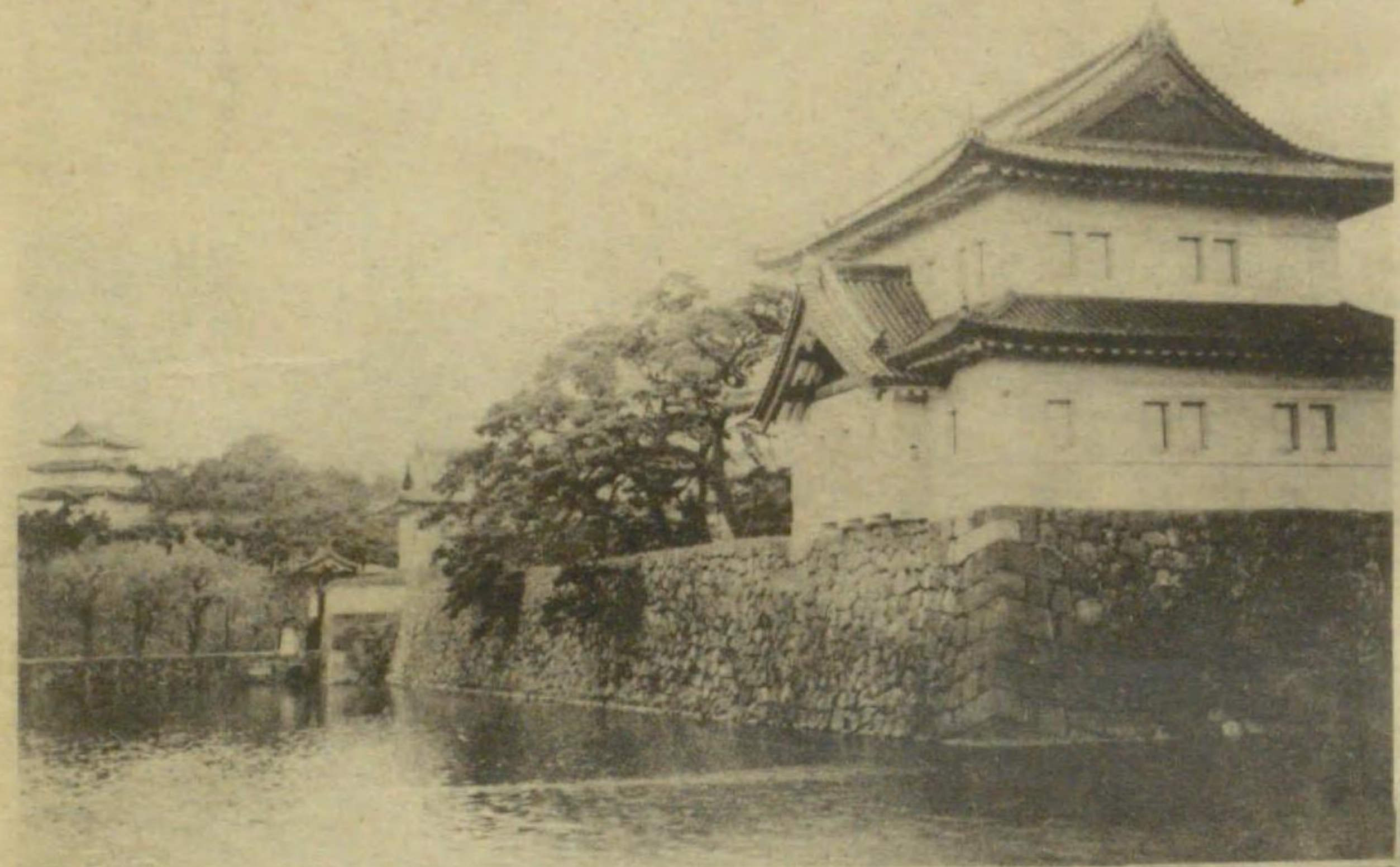
一高史談會編

大東京史蹟案内

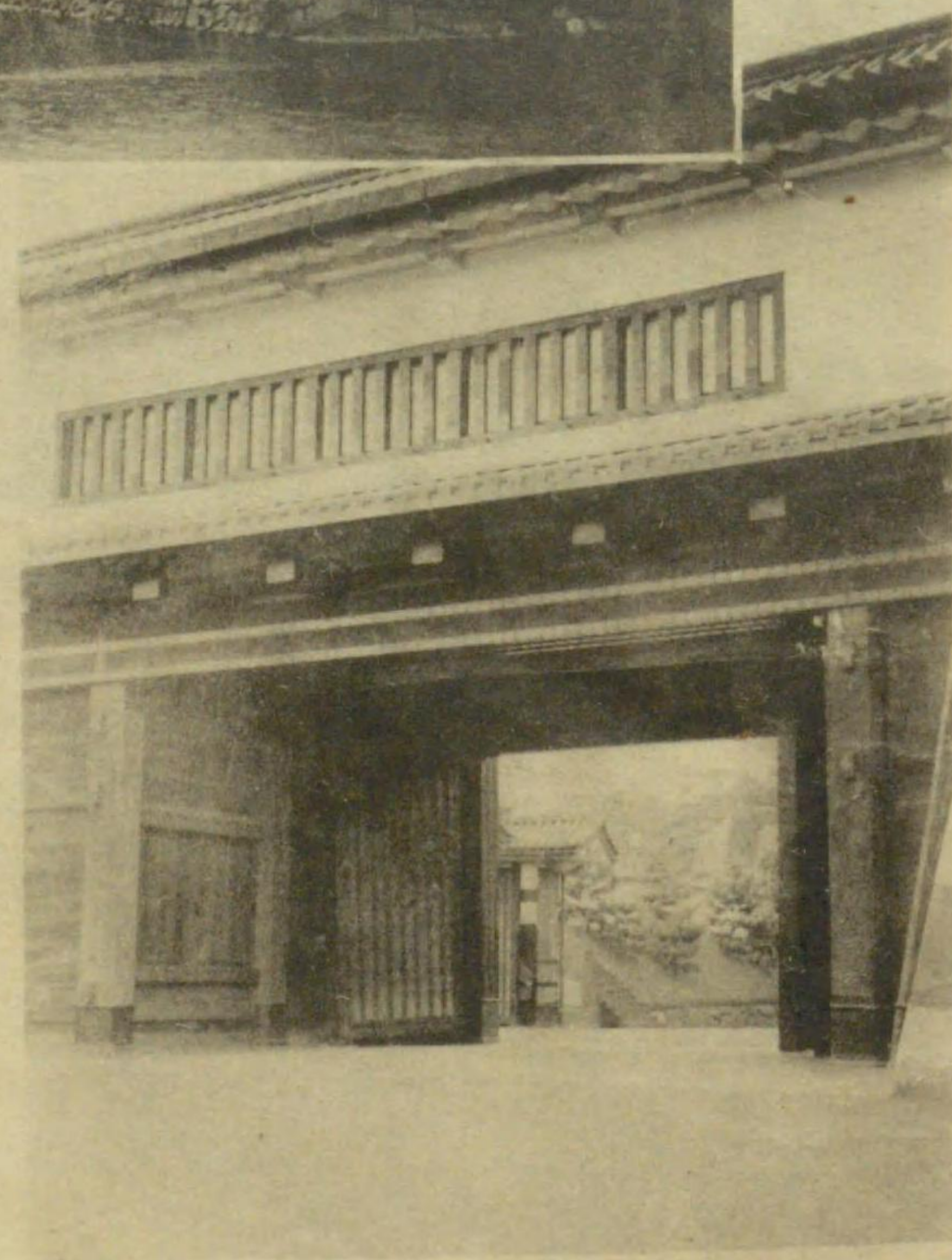
東京 育英書院發行



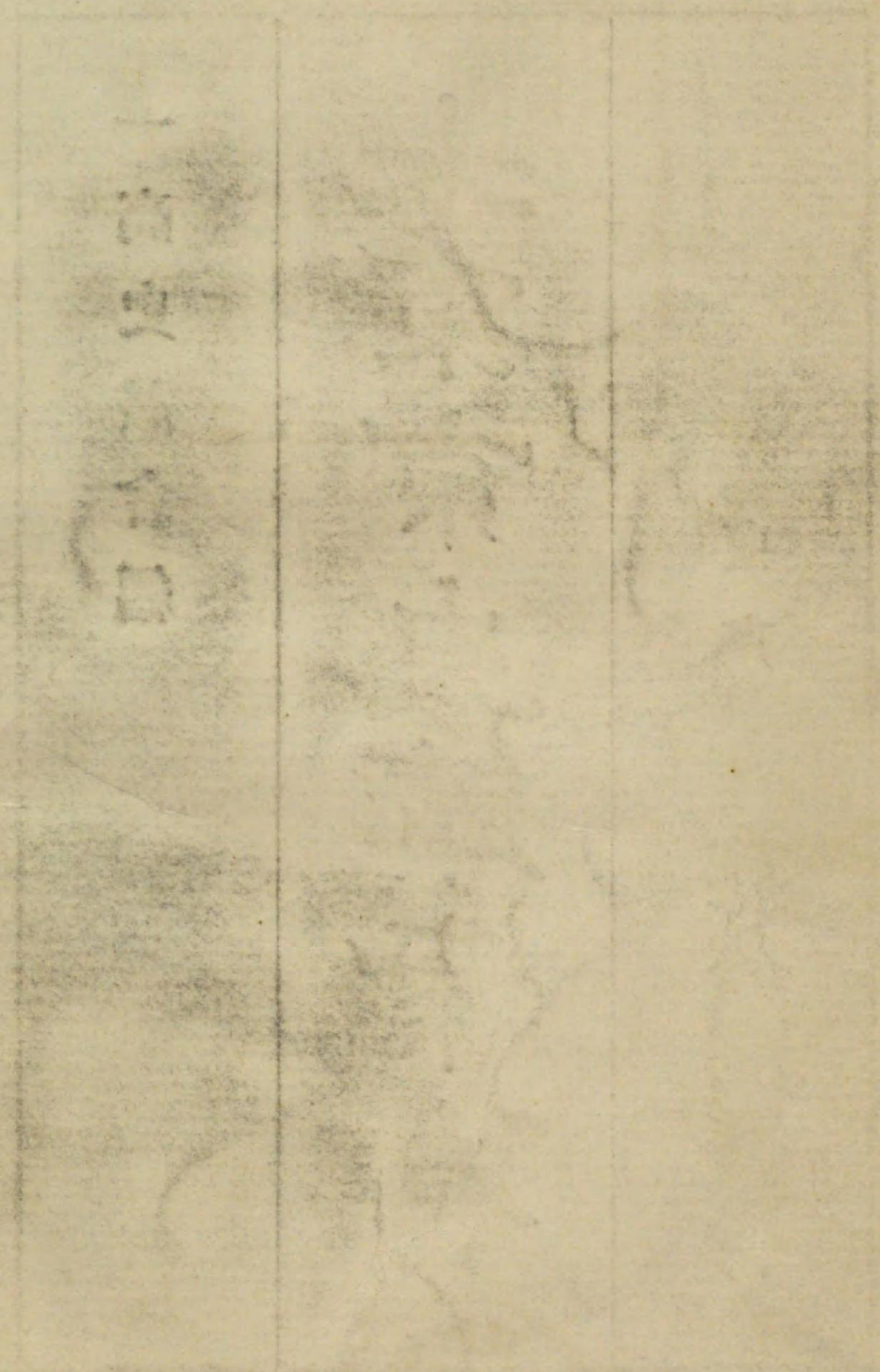




江戸城内濠の一部

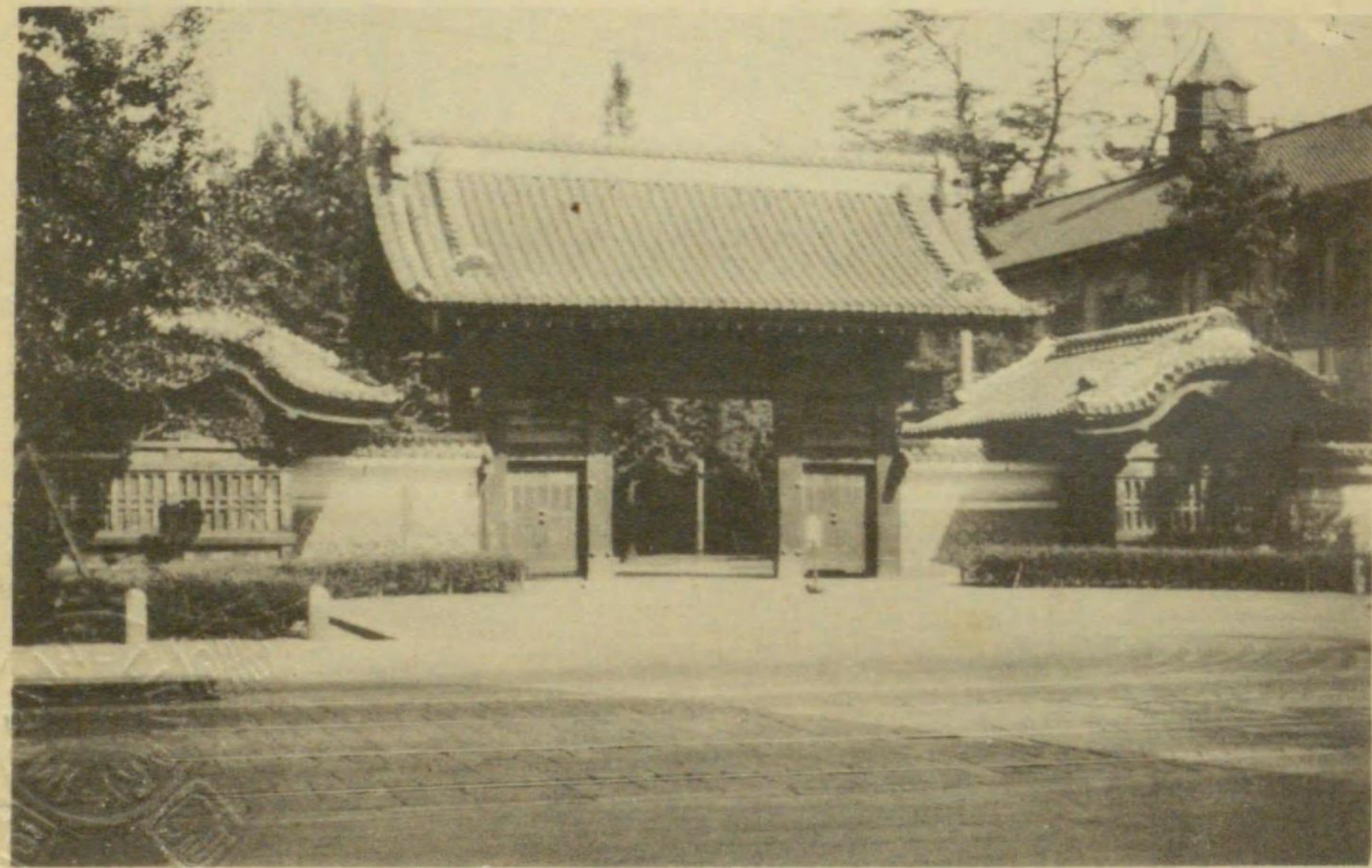


櫻田門



Handwritten red ink markings on the right edge of the page, including what appears to be a signature or date.





大學赤門

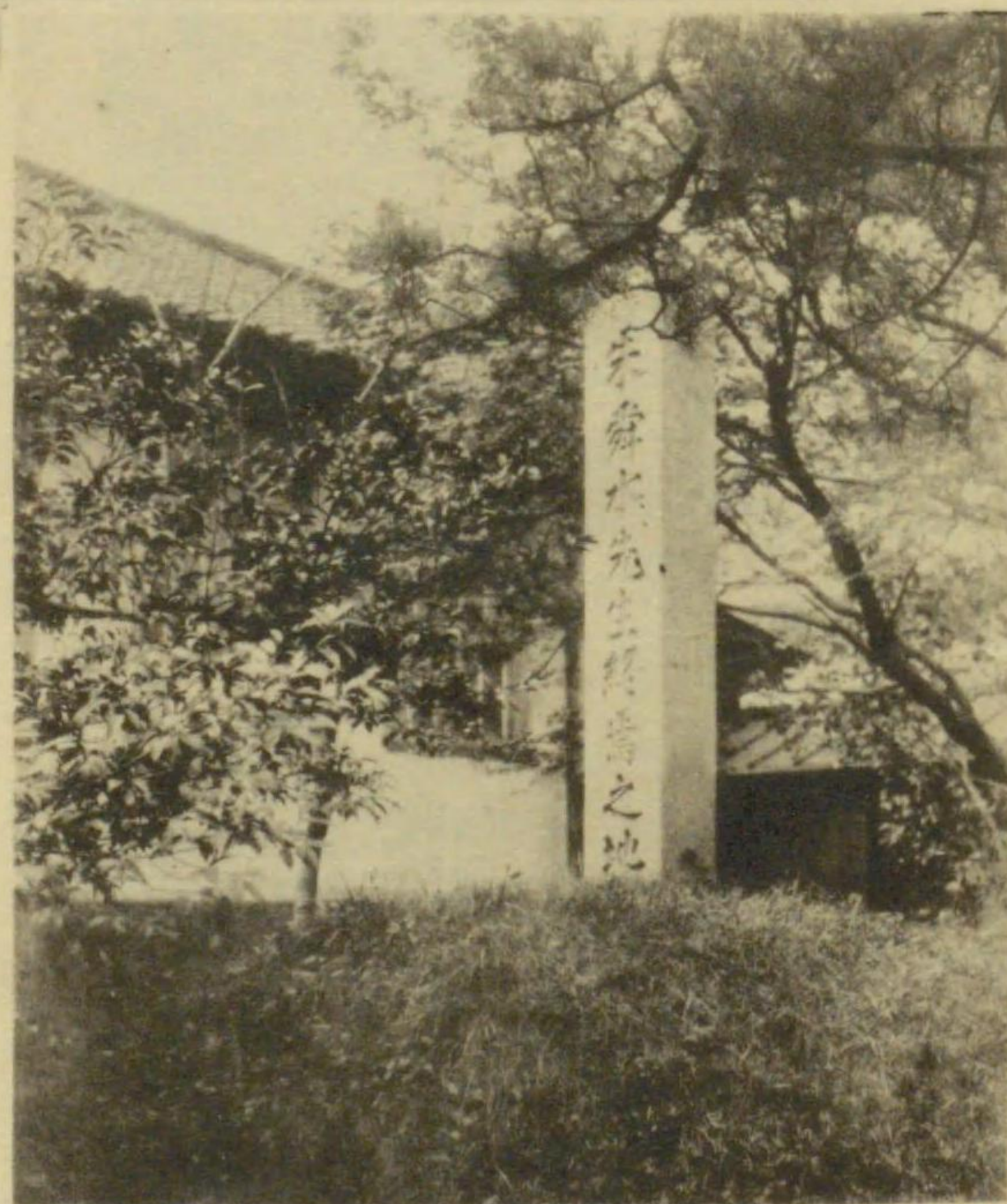


Handwritten red ink markings on the right edge of the notebook, possibly a signature or date, which are partially obscured and difficult to read.





麴町日枝神社

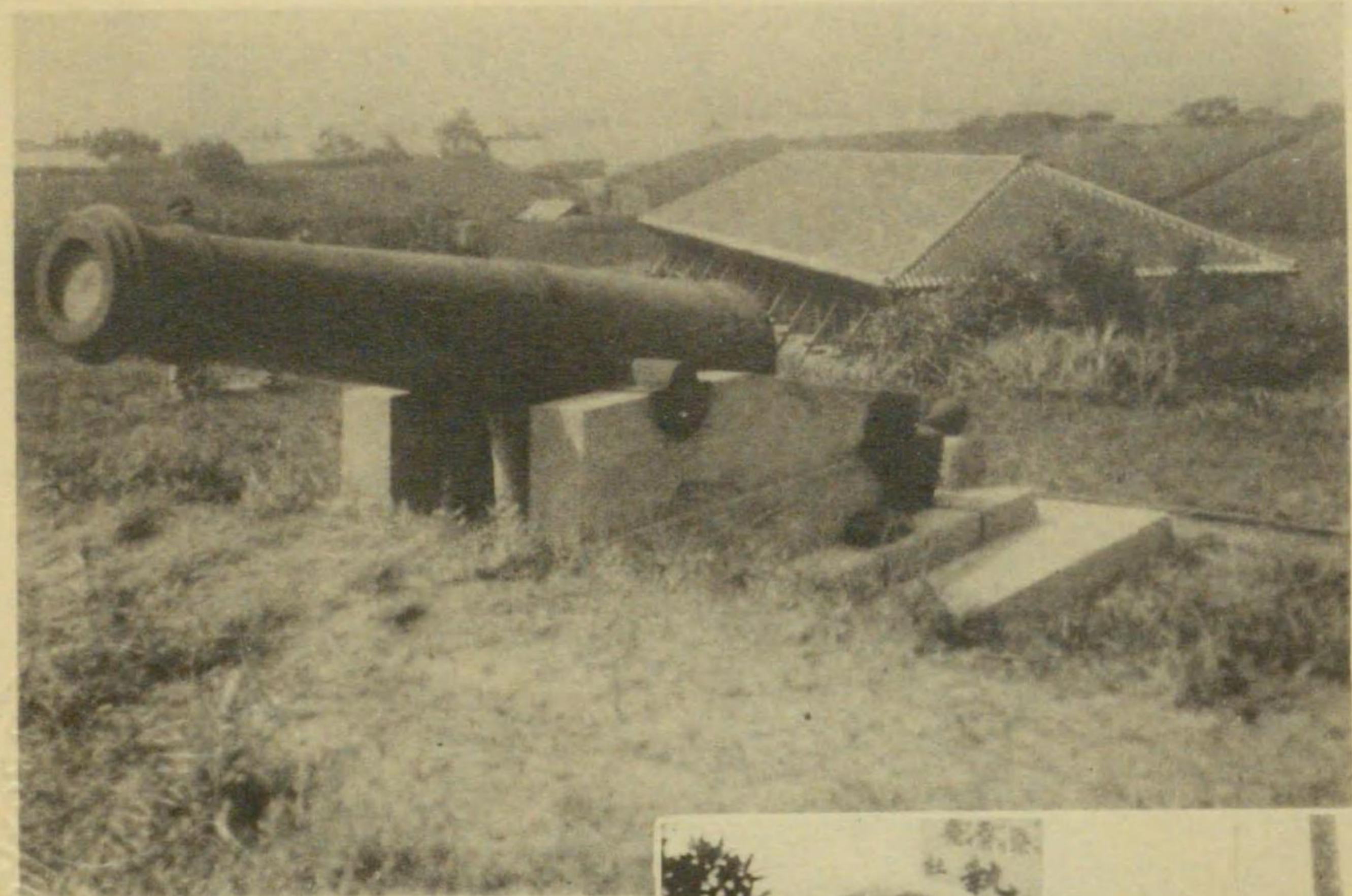


朱舜水紀念碑



Handwritten red characters on the right edge of the notebook page, possibly a signature or date.





品川臺場



津浪警告碑



Handwritten red ink markings on the right edge of the notebook, including the characters '津浪' (Tsunami) and '警告' (Warning).





中野寶仙寺三重塔

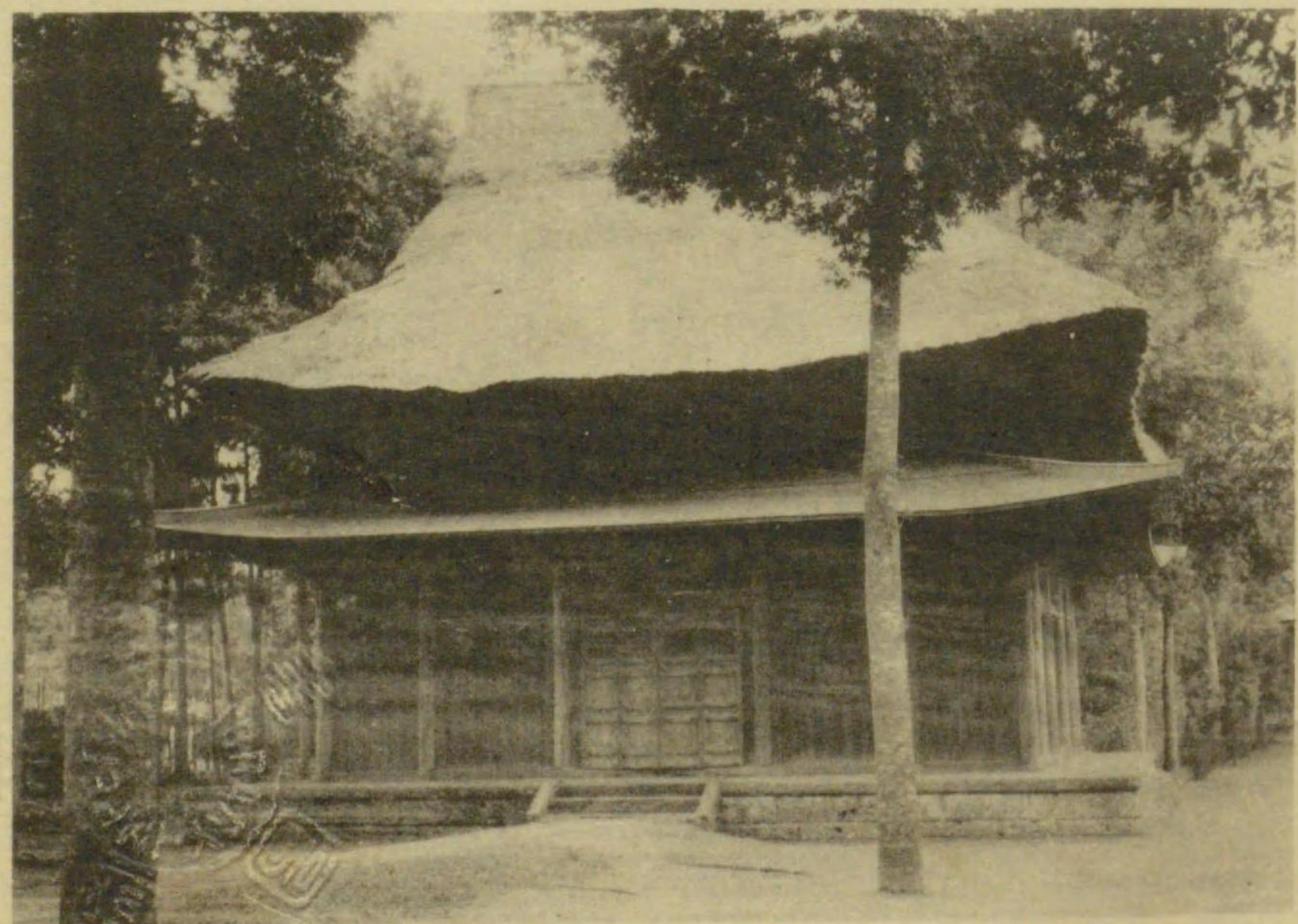


Handwritten red ink markings on the right edge of the notebook, including the characters '水' (water) and '蔵' (warehouse), and some illegible characters.





小机城址

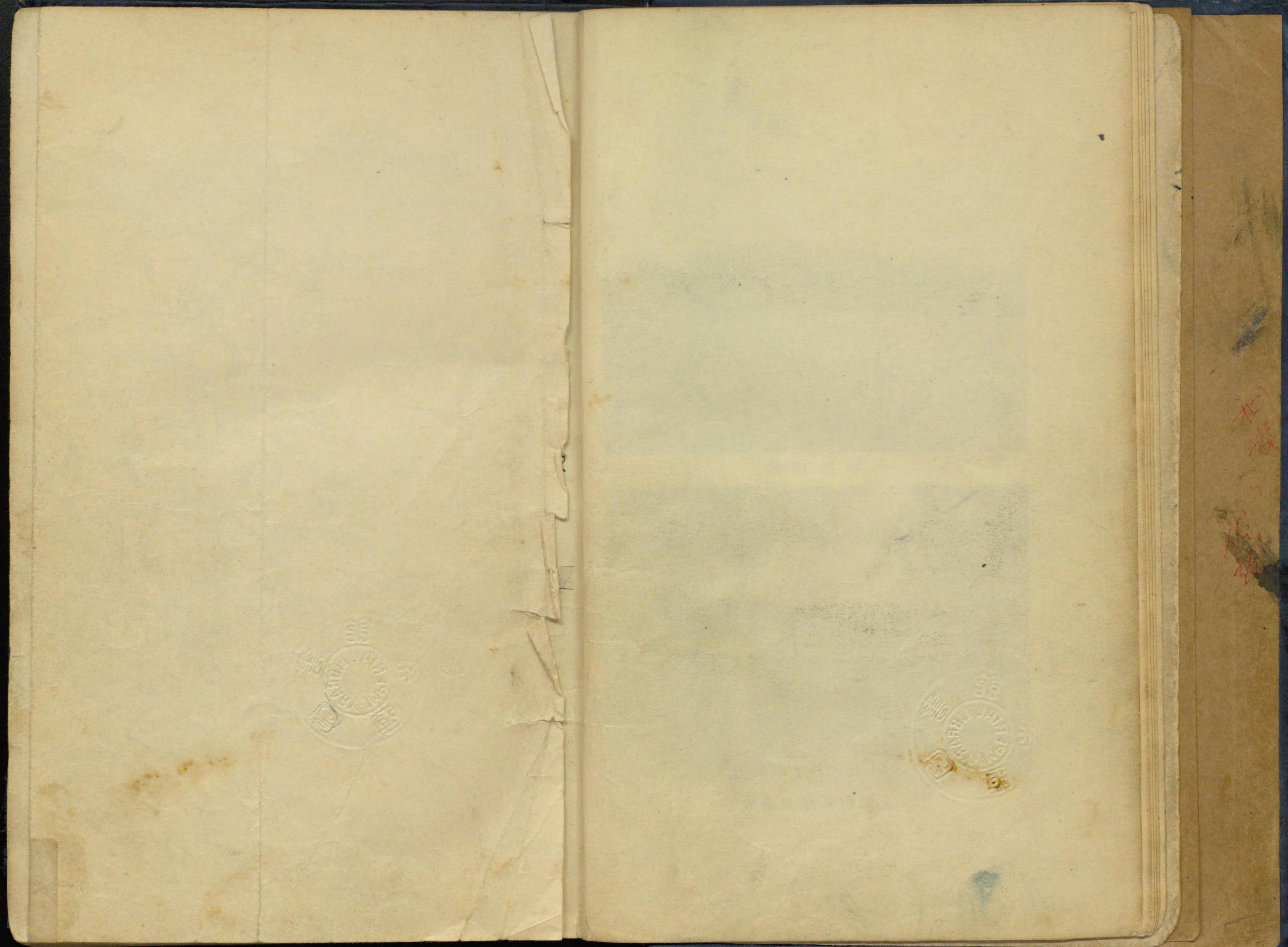


東村山正福寺佛殿



Handwritten red ink markings on the right edge of the notebook, including the characters '和' and '巻'.





LIBRARY  
UNIVERSITY OF  
TORONTO

LIBRARY  
UNIVERSITY OF  
TORONTO

水  
後







587-345

## 序

予素と山水の癖あつて、暇ある毎に勝地を訪ね、古跡を探るは、予の至樂とする處であるが、たゞ職務其他の事情で遊意の動くまゝになし得ぬのを憾とする。されば未だ遊觀しない土地については、地圖を案じ、先人の紀行を閲し、竊に其の境地を假想して、纔に心を慰める外はない。しかし後日偶々機會を得て其地を踏めば、いかに豫め充分考察しても、實地と懸隔あるに驚かされ、古人が「百聞一見に如かず」と言はれたのは、洵に萬古不動の眞理であることを深く感ずるのを常とする。

我校にては同好の諸子夙に、一高史談會を創立し、或は史實を講究し、或は史蹟を踏査し、或は史眼を以て現代を論評し、堅實な思想を涵養するに努めてゐる。同會は又曩に東京附近の史蹟調査の事業を企て、會員手を分けて親しく各地の實狀を踏檢し、其の結果大正十二年に「史蹟を探る人々に（東京郊外篇）」を著作し、昭和二年更に之を改訂して「東京近郊史蹟案内」を刊行した。是は會員が博く史料を覈へ、又時と勞とを惜まず、熱心に史蹟の現狀を實見して作つたものであるから、その正確なことは、決して他の追隨を許さない。

さて同會も本年は創立後二十年を閲したので、何か記念事業を起さうとの議が出たが、恰も今年は



東京市が擴張されて、大東京が實現することゝなつたので、此機を以て新に市内篇を作り、又前の郊外篇をも改訂し、二篇を一部の書にまとめて出版し、之を其の記念事業とすることゝなつた。よつて元と此會の會員であつた長澤教授が監修者となり、同會に關係ある大學生及一高生等は、各々地區を分擔し、梅雨の泥路も、三伏の炎暑も、敢て意とせず、一々史蹟を探訪して其の現状を討査し、最新の方法を蒐集した。かくて鳥羽・藤木の兩學士は更に之を整修して、こゝに此書を完成するに至つた。

此書一度世に出たなら、世人の之によつて益を得ることは甚大であらう。蓋し尋常の變遷の外、大震災の時の焼夷と、之に次いで行はれた街衢の改造とのため、幾多の由緒ある地物は湮滅し、名士の墓は移され、今や舊幕時代の名所圖會や、明治時代の案内記は、殆ど用をなさぬやうになつた。此時に當つて此書出で、東京市内外の史蹟は其の現状も沿革も、宛も明鏡を懸けた如く、都人の前に顯現されたのである。而して其の資料は一々古書の考覈と實地の踏査とに基づいたもので、坊間流布の案内記の類でないから、世に之よりも信據し得るものはない。我が一高史談會が此書を作つたことは、啻に史學にたづさはる者の記念事業として最も適してゐるのみでなく、實に時機を得た有益な事業と言はざるを得ぬ。予は之に關與した諸子の勞を多とし、且つ此の良著に對して讚美の辭を惜まな者である。

謂ふに、今より後都人の坊を曳いて帝都内外の古蹟を訪ぬる者、此書を懐にして實地を踏まば、今尙舊觀を留むるものと、滄桑の變に遭つたものとを問はず、現状と此書の解説とは、全く一致すること符節を合せた如くなるべく、隨つて最も正確な歴史地理の智識を得、且つ之によつて自然に史的感興を養ひ得るであらう。又凡て机上の想像は徒に危険のみ多く、之に反して實地の検討は最も確實性に富むことを會得し、自ら穩健著實の思想を堅むるに至るであらうと信ずる。稿成るに及んで、予に序文を需めらるゝが故に、聊所感を陳べて、卷頭に冕することゝしたのである。

昭和七年九月

齋藤阿具



## 序

物心ついてからの三十年あまりを芝浦の近くで過した自分は、芝つ子がつ傳統的な江戸氣分が資本主義的な都市文化に取つて代られる今日までの、めまぐるしい移り行きを一通りは見て來て居る。何が東京をさうさせたかは今更のべるまでもなく周知の事柄である。唯一高と自分とのつながりからいふと、入學試験を受けに行つた明治三十六年の七月——ほゞ三十年前——には、市内の幹線的な交通機關は新橋の南の汐留を發して上野淺草を列ねる馬車鐵道（或はやつと電車になつた計りだつたかもしれない）が一本きりで、それを辛うじて利用しうるだけだつた。日比谷の北角から神田橋まで電車が通じたのは入學後の事だと記憶する。これだけでも交通機關の今昔——それが齎す東京の今昔の要は察知されよう。

つい昔語りをするやうになるが、目前の功利的な立場を出ない市理事者の企が如何に東京を毒した事であらう。今も尙記憶に鮮かなのは、石牆の上から水を慕つて生ひかぶさつた翠したる老松が、外濠埋没の犠牲となつて情け容赦もなく伐採された事である。しかも埋立てられた跡にはバラック式の醜い洋館の羅列以外に何が残つたか（放水路を失つたその附近は以後數年といふものは連年出水の憂目を見、大震災には地盤の脆弱を見せたのである）。また武藏野風景の尤とすべき蟲々として天にのびた大樺の並木が所謂東京の膨張に壓せられて如何に急速にその姿を沒したか。これ無慘なミュテイレーションに對して我々は屢々感傷的な激憤を覺えるのを如何ともし難いのである。此點ではむしろ大震災火災が一舉に下町の全部を焼きつくし破壊しつくして、全然新な商工業的都市の東京を築き上げたその徹底さに痛快を感じさせられる。

史蹟名勝天然物保存會が設置されてからは、心なき破壊はよほど免れうるに至つた。しかし辨慶橋が四圍との調和にお構ひなく近代的のものに代へられようとしたり、日比谷から和田倉へかけての濠を埋立て、サラリーマンの遊歩道にしようとする議が起つたりする東京の事である。これらのあまりな愚案は實現を見ずに葬りさられたやうなもの、尙一方において東京驛正面の石牆は切り去られて薄つぺらな現代裝飾を以てする道路に代へられ、坂下門に至る丸の内一帯の風物と驛前のビルディングとは何ら有機的な統一をもたぬ醜さを暴露してゐる。

さりながら翻つて思ふに、一面此の猪突と破壊とがあつたればこそ大なる膨脹と進展とを見たのであつて、こゝに若き東京の姿を見ることが出來、大東京も生れ出たわけでもある。眞の建設事業はこれから以後である。冀くは大東京市の誕生を一轉機として、前非に陥る事なく、日本的にしてしかも世界に誇るべき日本の代表的首府を造り上げたいものである。そして恰も我等が自國の成立及びその沿



革に稽へて國民的自覺を高めるのと同じく、市民は大東京市の歴史や文化の迹を辿り、先哲古賢の苦心を體驗してその使命を果すべきである。

我が一高史談會は大東京市制の布かれんとする本年を以て、設立滿二十年を迎へるので、その記念事業として大東京の史蹟を逐次に實地踏査してあます所なく、且つ舊記に照し、故老に訪ねて日一日と珉んでゆく遺蹟をば最も精確なる記録となし、こゝに史蹟案内一卷を編むに至つた。一は以て同好の士に示して温古的知識をひろめんがため、一は以て市の有する古蹟名所を顯新して、之を愛惜し保存する風を養はしめんがためであつて、これこそ最も利害を超越した純粹無垢の青年愛市運動の發露に外ならない。實に此の書は史談會の先輩及び委員たる學士、學生の諸君が酷暑二ヶ月を凌いで討査研究した眞の汗の結晶である。イデオロギー一點張りの現代に當つてかゝる堅實にして生命の長い愛市的の所産を世に送り出す事はひとり我らの喜びのみに止まらない。

昭和七年九月末日

龜井高孝

## 自序

本會が大正二年の秋創立されて以來、その事業の一として親しく史的趣味を涵養する爲、折々郊外の史蹟の踏査研究が續けられて來ました。その際携へて實地の指針とし又同好の士の參考ともする目的の下に、大正十二年に我々の先輩數氏により「史蹟を探る人々に（東京郊外篇）」が刊行されました。その後更に是を底本として調査を重ね、内容にも大いに補訂を加へて殆ど面目を一新し、昭和二年の春「東京近郊史蹟案内」が刊行されたのであります。

一方その姉妹篇たる市内の史蹟案内は、前記先輩諸氏も郊外篇に續いて編纂されることを希望して居られましたので、その後一二期稍々具體的計畫のたてられたこともありましたが、その都度色々の故障の爲實行に至りませんでした。然し乍ら大震災後の市内は區劃整理その他の復興事業の爲非常な變化を來し、特に焼失區域に於ては殆ど新に東京を造つたかの觀があり、史蹟等も全く文字通り滄桑の變を爲して居ります。然るに今年は恰も本會の創立二十周年に當りますので、その意義ある記念事業の一として、是非先輩の衣鉢を襲ぎ市内の史蹟案内を編纂しようとの議が會員の間に纏りました。これは丁度昨年夏休みのことでありましたが、爾來、郊外編々纂當時の諸先輩特に鳥羽正雄・長澤規



矩也・藤木邦彦三氏の御援助を仰いで、色々編纂の準備を進めて來ました。所が偶々今年十月からは懸案の大東京が愈々實現されることに決定し、東京附近の地圖は全くその色どりが變ることになりました。この際大東京の史蹟案内を編纂する事は、上記の色々の理由から最も意義深きものと考へましたので、今年に入つてから計畫を急に具體化し、遂に郊外篇の改訂と市内篇の編纂を同時に實行することに決定しました。

即ち従來の「東京近郊史蹟案内」の中、新に東京市となる部分は之を市内篇に繰入れて、交道路等にも大いに改訂を加へ、更に舊市内十五區の主な史蹟を實地について調査し、「大東京史蹟案内」として一冊の本に纏めることとなり、直に分擔を定めて夫々踏査を進めました。斯くて曲りなりにも纏め上げて、更に理想に近づける爲の底本ともし又同好の士の叱正を仰ぐ資にも供する爲、茲に本書を刊行するに至つた次第であります。勿論我々は學生の分際で、斯る仕事には経験のない者ばかりの上、時の制限もありましたので、我々自身にすら不満な程不十分な點が多く、又大東京制の實施に伴ふ發展變化も今後年と共に激しくなるものと思ひます。之等に關しては我々は常に注意を怠らず、機會ある毎に改訂を加へて出来る丈完全に近いものとする積りでありますが、同時に又讀者諸氏の御示教を惜まれざらんことを切望する次第であります。

本書の編纂を計畫して以來、遂に克く之を成し得たのは偏に本校の諸先生諸先輩並に一高同窓會當局の方々の御懇篤なる御指導と御援助の賜に外なりません。厚く感謝の意を表します。又鳥羽・長澤・藤木三先輩には、終始非常な御盡力を煩せました。この書の編纂がよく未熟な我々により爲し得たのは、全く三氏の御陰であると言つても過言ではありません。殊に藤木先輩には市内篇の整理その他について最後まで非常に御迷惑をお掛けしました。三氏の御盡力に對しては心から御禮を申し上げます。

尙御多忙中にも關らず第一高等學校教授文學博士齋藤阿具先生並に第一高等學校教授文學士龜井高孝先生からは序文を、又第一高等學校教授文學士菅虎雄先生からは題字の御揮毫を賜り卷頭を飾ることを得ました。茲に三先生に深甚の謝意を捧げます。又實地踏査に際し、史料の提供・質疑の應答等に便宜をおはかり下さつた方々の賜も多大であります。厚く感謝の意を表します。

最後に是非一言したいのは本會委員故澤木壽夫君のことです。澤木君は昨年三月本會委員に就任されて以來、委員の中心となつて日夜本會の爲に盡瘁され、本書編纂の計畫も同君の盡力による所多大でありました。澤木君は級中群を抜く秀才であると共に、實に稀に見る強い責任感の所有者でありました。五月の初旬、君は風邪を推して卒先鴻ノ臺方面の調査に赴れて然も殆ど終日雨に會ひ、歸宅後遂に急性腦膜炎の侵す所となつて、六月二日朝青雲の望を胸にして急逝されたのであります。我々は思ひも懸けなかつた同志の急逝により、非常な悲痛と落膽の底に突落されたと共に、君の日頃の遺志を繼ぐべくどの位陰から鞭撻されたか分らないのであります。我々は兎も角今茲に本書の完成



を見之を澤木君の靈前に報告し得ることに限り無い喜びを感じます。澤木君よ。さらば安らかに眠り給はんことを。

昭和七年八月

一 高史談會

凡例

**目的** 本書は携へて史蹟踏査の際の指針となることを主眼とします。

**範圍** 東京を中心とし、大體川越との距離を半径とした圏内の地域であります。便宜上二三の例外はあります。

**組織** 本文は總説・市内篇・郊外篇の三部より成り、之に挿圖・寫眞・附録が加はります。

一、總説

本書の範圍内に於る地理的状況・歴史的沿革の概要を述べ、市内篇及び郊外篇に記述された各史蹟の、全體に對する關係とその意義を知るに資するものであります。

二、市内篇

東京市三十五區を含みます。

(一)章別——各區を一章として麴町區を首部に置き、東京市役所々定の順序により排列しました。

(二)記述の様式——各區内に於て主な交通機關一乃至數個を選んで、大體各停留場又は驛を中心



とする史蹟を順に排列し、主な史蹟は一項をたて、その所在地・交通機關よりの経路・現  
状・沿革・關係事項を記述説明し、併せて附近の稍々注意すべきものを適宜附記しまし  
た。尙今回新に東京市となつた品川区以下二十區に於ては、特に實際の便宜と舊町村名保  
存の意味で、先に新町名を擧げ括弧内に舊地名を示しました。

(三)組方——一項をたてた史蹟はゴチック活字で示し、その現状及び重要事項には九ポイント活  
字を用ひ、所在地・経路・寺社の縁起・關係氏族その他由緒沿革・口碑傳説・考證論說等  
は概ね六號活字を用ひました。尙各章首にはその章の主要な史蹟を記述の順に列記して見  
出しに便しました。

(四)参考——部分的参考書や参考論文は適宜文中又は項末に註し、一般的のものは別に附録とし  
て卷末に纏めてあります。

### 三、郊外篇

既刊「東京近郊史蹟案内」所載のもので、東京市に編入されない各章を集め増訂を施したもの  
であります。

(一)章別——凡そ一日の行程を一章とし、全十六章を南から右廻りに排列してあります。

(二)記述の様式——主な史蹟は一項をたて、その現状・沿革・關係事項を記述説明し、是等を連  
結する便利な道順を示し且つその途上稍々注意すべきものを適宜附記しました。

(三)組方——市内篇に同じ。

(四)参考——市内篇に同じ。

### 四、挿 圖

本書は陸地測量部の地圖と併用する様にしてありますが、踏査上或は説明上それのみでは不充  
分な爲、特に調査した要地の細圖と参考圖とを挿入しました。

### 五、寫 眞

本書の性質上多數は必要ないと老へましたので、意義ありと思はれるもの若干を選んで口繪に  
掲げました。

### 六、附 録

(一)参照地圖表——前述の如く本書は陸地測量部の地圖と併用する様に道順等を説明してありま  
すから、郊外篇各章に要する地圖名を表にしたものであります。市内は特に陸地測量部の  
地圖でなくても市電及び省私線等の記入がありさへすれば間に合ひます。

(二)地誌關係書目——部分的の参考書は各章中に掲げましたが、一般的のもの、特に江戸時代の  
作品の已に刊行せられたものを主とし、之に明治以後の重要な参考書を加へて、簡単な解



凡例

説を加へました。

(三)國寶目録——本書の範圍内で成可く最近に指定されたものまで、表にして一覽に便しました。但し個人所藏のものは總て割愛しました。

(四)索引——本書に記載された全部の史蹟を五十音順に排列して檢出に便しました。

(五)年號表——踏査に際して見聞する事物に關し、年號の西曆年數と干支とを知る爲の爲の、使用上の便宜の爲特に別刷にしてあります。

本書の底本とした「東京近郊史蹟案内」の起稿及び改訂に當られたのは次の十四氏で分擔された各章に夫々署名してあります。

石山乾二・鳥羽正雄・古谷善亮・小笠原光壽・長澤規矩也・中村榮孝・建部元春・迫水久常・太田秀一・藤木邦彦・川崎庸之・小澤文雄・堀江實・高橋誠二

今回本書各章並びに附録の起稿及び増訂に携つたのは次の十九名で、分擔した各章に夫々署名して置きました。

鳥羽正雄・長澤規矩也・藤木邦彦・佐治芳雄・久野昇一・林一郎・幾志直方・(以上先輩)秋山武夫・中村元・岩見鑛一・土方秀俊・新井正明・故澤木壽夫・柄内一彦・大石安則・崎谷武男・坂谷素男・福島藤太・今井秀喜

目次

序  
凡例  
總説  
市内篇

一 麴町區……………一

二 日本橋區……………二〇

日本橋 越後屋 金座址 一石橋 白木屋 魚市場址 其角宅址 鏡橋 思案橋  
水天宮 古衣店址 小傳馬町牢屋址 清正公堂

三 京橋區……………三二

目次



西本願寺別院 築地居留地址 佃島 石川島 人足寄場址 月島 采女ヶ原  
濱離宮 芝口門址 銀座址 八丁堀 河村瑞軒宅址

四 芝 區

三九

舊新橋停車場址 烏森神社 新錢座址 芝大神宮 舊芝離宮 江戸開城談判地址  
御田八幡神社 高輪大木戸址 泉岳寺 東禪寺 琴平神社 愛宕神社 青松寺  
天徳寺 西久保八幡神社 金地院 増上寺 徳川家靈廟 東照宮 丸山貝塚  
丸山五重塔 丸山古墳 大久保忠教墓 瑞聖寺 長壽寺 榎本基角墓 承教寺  
(二蝶寺) 池田邸正門 濟海寺 龜塚稻荷板碑 荻生徂徠墓 品川臺場

五 麻布 區

七一

長谷寺 深廣寺 善福寺 氷川神社

六 赤坂 區

七六

紀州藩邸址 豊川稻荷 溜池址 氷川神社 乃木神社 青山墓地 善光寺

七 四谷 區

八三

鮫ヶ橋 愛染院 増保己一墓 須賀神社 山縣大貳墓 笹寺 四谷大木戸  
玉川上水碑 新宿御苑 新宿 太宗寺 正受院 天龍寺 華園神社

八 牛込 區

九五

若宮八幡神社 龜岡八幡神社(市ヶ谷八幡) 尾張徳川邸址 築土八幡神社  
筑土神社 赤城神社 林氏墓地 關孝和墓 宗參寺 月桂寺 穴八幡神社

九 小石川 區

一〇九

後樂園 傳通院 牛天神 大洗堰 護國寺 豊島ヶ岡御陵 大塚先儒墓所  
切支丹屋敷址 白山御殿址 小石川御藥園址 簸川神社 白山神社

一〇 本郷 區

一二四

聖堂 お茶の水址 靈雲寺 湯島天神 麟祥院 櫻木神社 赤門(前田家門)  
育徳園 朱舜水遺跡 彌生町貝塚址 根津櫓現 大觀音 吉祥寺 神明社(天祖  
神社) 富士神社 動坂石器遺跡

一一 神田 區

一三九

神田明神 ニコライ堂 神田川 柳原堤 大學東校址 お玉ヶ池址 蕃書調所址  
護持院址 講武所址

一二 下谷 區

一四七

上野 徳川氏靈屋 寛永寺 東照宮 五條天神 不忍池 天王寺 廣徳寺



目次

鷺神社

四

一三 淺草區.....一六

淺草寺 傳法院 淺草神社 待乳山 總泉寺址 東本願寺別院 醫學館址

一四 本所區.....一八〇

向島 牛島神社 三圍神社 弘福寺 長命寺 秋葉神社 柳島妙見堂 法恩寺

竹藏米藏址 吉良邸址 回向院 江島神社 兩國橋 彌勒寺

一五 深川區.....二〇〇

新大橋 御船藏址 芭蕉句塚 材木藏址 芭蕉庵址 本誓寺 宜雲寺 靈岸寺

淨心寺 富岡八幡神社 深川不動尊 木場 洲崎神社 越中島 永代橋

一六 品川區.....二二七

品川寺 海晏寺 品川神社 荏原神社 東海寺

一七 目黒區.....二三一

岩窟辨天 海福寺 羅漢寺 目黒不動 圓融寺 祐天寺

一八 荏原區.....二二七

法蓮寺 中延八幡

一九 大森區.....二二九

大森貝塚址 鈴ヶ森八幡 本門寺

二〇 蒲田區.....二三三

蒲田八幡 古川藥師 新田神社

二一 世田ヶ谷區.....二二六

九品佛 滿願寺 敎學院 駒留八幡 松陰神社 勝國寺 豪德寺 世田ヶ谷城址

二二 澁谷區.....二四三

明治神宮 金玉八幡 氷川神社

二三 淀橋區.....二四七

十二社 圓照寺 西向天神社 氷川神社 高田馬場跡

二四 中野區.....二五二

寶仙寺 三重の塔 氷川神社 新井藥師 山莊の碑

二五 杉並區.....二五六

妙法寺 大宮八幡 八幡神社

二六 豊島區.....二五九

目次

五



〇二七 瀧野川區……………二六五

雜司ヶ谷墓地 鬼子母神堂 法明寺 金藏院 南藏院  
平塚明神 平塚城址 西ヶ原貝塚 金剛寺 八幡神社 東覺寺 興樂寺

二八 荒川區……………二七二

道灌山 青雲寺 諏訪神社 淨光寺 養福寺 本行寺 觀音寺 在銘寶篋印塔  
誓願寺 素戔雄神社 回向院 小塚原刑場址 圓通寺 石濱神社

〇二九 王子區……………二八七

飛鳥山 王子權現 王子稻荷 靜勝寺 稻付城址

〇三〇 板橋區……………二九二

練馬城址 長命寺 道場寺 三寶寺 氷川神社 石神井城址 千川上水 志村城址  
松月院 大堂 赤塚城址

三一 足立區……………三〇六

鷲神社 西新井大師

三二 向島區……………三〇九

百花園 白鬚神社 水神 木母寺

三三 城東區……………三二三

香取神社 龜戸天神

三四 葛飾區……………三二六

木下川薬師 青砥藤綱館址 柴又帝釋天

三五 江戸川區……………三二九

最勝寺 善照寺

郊外篇

一 川崎・鶴見と生麥・小机……………一

川崎大師 總持寺 生麥事件故地 雲松院 小机城址

二 榊形・高津方面……………一一

廣福寺 榊形城址

三 相模國分寺と鶴ヶ峯古戰場方面……………一六

清水寺 湧河寺址 國分尼寺址 國分僧寺址 國分寺 條里址 有賀神社  
鶴ヶ峯古戰場 白瀧山不動尊



四 百草・立川方面……………二五

小野宮 關戸古戰場 一の宮 百草園 高幡不動 立川原古戰場 普濟寺

五 井ノ頭と深大寺……………三五

井ノ頭 神田上水 井ノ頭辨財天 玉川上水 青渭神社 深大寺 深大寺城址  
虎柏神社 布多天神社

六 國分寺と府中……………四〇

國分寺 大國魂神社 坪宮 宮乃寶神社 國府八幡宮 東照宮 天神山 國府址  
善明寺 高安寺 分階河原古戰場

七 二宮瀧山方面……………六九

二宮明神 二宮館址 高月城址 瀧山城址

八 八王子附近……………八〇

多摩陵 十里ヶ原古戰場 八幡神社 宗關寺 八王子城址 淨福寺 新城址  
西蓮寺 相即寺 子安神社 大義寺 八幡八雲神社 妙藥寺 極樂寺 大善寺  
宗徳寺 信松院 廣園寺

九 東村山・山口方面……………一〇一

正福寺 徳藏寺 山口觀音 中氷川神社 山口城址 勝樂寺 北野神社  
小手指ヶ原古戰場

一〇、野火止附近……………一一

柳瀬城址 平林寺

一一、川越方面……………一二四

東照宮 喜多院 三芳野神社 川越城址 氷川神社 養壽院 蓮馨寺

一二、大宮と岩槻……………一二三

氷川神社 潮田城址 彌勒寺 岩槻城址

一三、松山附近……………一三〇

箭弓稻荷神社 吉見百穴 松山城址 吉見觀音

一四、國府臺附近……………一三八

總寧寺 國府臺城址(下總國府址) 國分寺 弘法寺

一五、中山・船橋方面……………一四六

葛飾八幡宮 法華經寺 葛飾宮 船橋大神宮

一六、千葉・生實附近……………一五一



目次

一〇

千葉神社 大日寺 來迎寺 千葉城址 千葉寺 大巖寺 北生實城址 南生實城址 (小弓御所址)

一、附 録

參照地圖表

地誌關係書目

國寶目録

索引

年 號 表

挿 圖 目 次

〔總 說〕

上古中古の東京附近……………三頁

中世末期の東京附近……………一七頁

〔市内篇〕

江戸城圖……………三頁

台徳院靈廟平面圖……………五六頁

品川臺場圖……………六八頁

同參番御臺場圖……………六九頁

切支丹山屋舖圖……………一七頁

上野圖……………一四八頁

淺草古圖……………一六七頁

深川埋立圖……………二一五頁

世田ヶ谷城址圖……………二四一頁

練馬城址圖……………二九三頁

石神井城址圖……………三〇一頁

志村城址圖……………三〇四頁

向島圖……………三〇九頁

挿圖目次

〔郊外篇〕

生麥事件説明圖……………六頁

小机城址圖……………八頁

相模國分僧寺及び尼寺復舊圖……………一九頁

相模國分僧寺礎石圖……………二〇頁

深大寺城址附近の圖……………四四頁

武藏國分寺境内の圖……………四九頁

武藏國分寺礎石圖……………五〇頁

二宮館址の圖……………七一頁

高月城址の水……………七二頁

八王子城址附近圖……………八四頁

八王子城主要部古圖……………八五頁

川越城舊狀圖……………一六頁

岩槻城主要部舊狀圖……………一七頁

松山城址古圖……………一三四頁

瀧山城址古圖……………折 込

一一



寫眞説明

○江戸城内濠の一部 和田倉門内幸道路の角から江戸城の内濠を見た所。近い二重櫓は巽櫓、遠い三重櫓は富士見櫓、間の門は桔梗門である。(五頁参照)

○櫻田門 江戸城に於る代表的柵形門の一つで、二重橋前廣場の方から櫓門を通して柵形の内部を見た所である。(七頁参照)

○大學赤門(國寶) 昔の前田家の正門で麴町の元島津邸の門(舊華族會館の門)と共に現存する大名屋敷の門の典型的なものである。(一三〇頁参照)

○麴町日枝神社 俗に山王様と呼ぶ官幣大社。社殿は権現造で絢爛目を奪ふ様な色彩を施してある。(一六頁参照)

○朱舜水紀念碑 元水戸の邸であつた一高の構内に建てられてゐる。(一三二頁参照)

○品川臺場 東京市の公園となつてゐる第三臺場の突端に近い所から、内部の方を見た所。(六七頁参照)

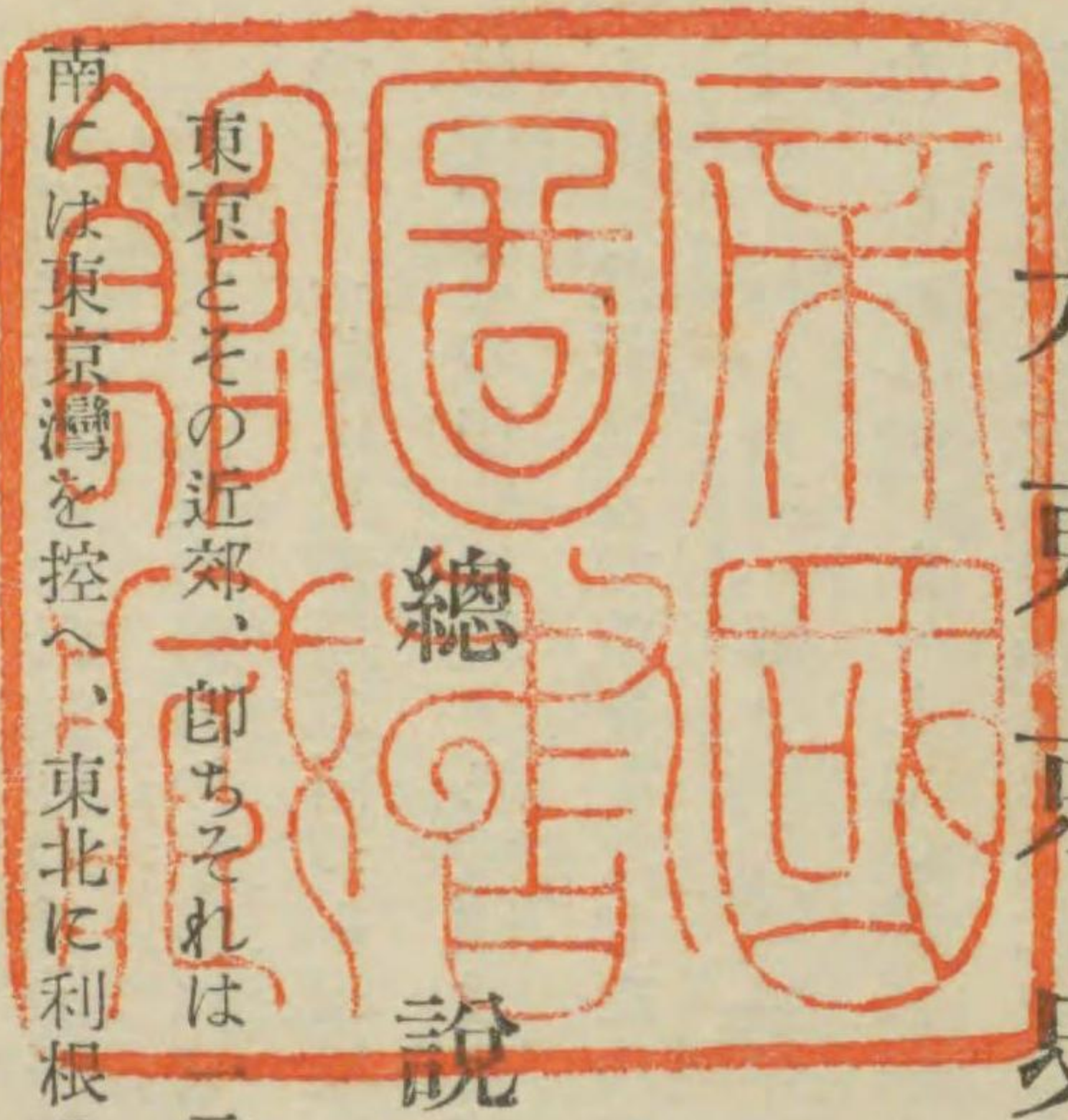
○津浪警告碑 深川區洲崎神社の境内にある。昔からこの邊が如何に水害に憚んだかを知ることが出来る。(二一三頁参照)

○中野寶仙寺三重塔 東京附近で最古の塔で而も唯一の三重塔である。(二五二頁参照)

○小机城址 城址をその東方小机驛裏の田圃の中から見た所、中央右寄で松の木の四五本生えてゐる邊が本丸址、左へや、低くなつた邊が二の丸址である。(郊外篇八頁参照)

○東村山正福寺佛殿(國寶) 府下で最も古い鎌倉時代の建築物の一つで弘安頃の建築と云はれ、その構造様式は鎌倉圓覺寺舍利殿と殆ど同一である。(郊外篇一〇一頁参照)

大東京史蹟案内



總説

東京とその近郊、即ちそれは言にして云へば武蔵野である。西には秩父・小佛の山々を遶らし、東南には東京灣を控へ、東北に利根の水脈あり、荒川は中央を貫流し、多摩川はその西南を流れてゐる。多摩川の南岸地方を除いては、殆ど平坦な洪積層の臺地が中央に展開し、その單調を破つて所々に窪地がある。それ等は多く地下水を湧出して池をなし、附近の小川の水源になつてゐる。井ノ頭・三寶寺・善福寺・妙正寺・泉龍寺の池や神田上水・石神井川等は即ちそれである。西、秩父の山麓に起つて東、東京灣に没するまで極めてゆるい傾斜をなし、上部は俗にいふ赤土即ちロームで、最上部は眞黒な腐植土で掩はれてゐる。太古は森林であつたとも、草原であつたとも云はれるが、今では雜木林がその名物になつてゐる。東郊は之に反して沖積層の低地で今猶蘆荻沮洳の地もあり、大分趣が異つ







器・土器と近い分布を示してゐる（圖参照）。これも自然の地理的状況から當然のことである。此等遺蹟・遺物の上からみれば、この地方の文化は上野・下野の邊に比べれば稍々劣つてゐた様に思はれるが、それでも可なり發達してゐたらしい。市内の駒込の富士や芝公園内の瓢墳の如き稍々みるべきものもあり、此等によつて又この方面に可なりの勢力者が散在してゐたことが窺へる。

孝徳天皇の大化二年（646）に至り、その改新によつて諸國ともに從來の國造・縣主等を廢し、國郡の制を布かれて國司・郡司を置かるゝこととなつた。そこで先づ國司を任じて國家所有の公民大小所領の人衆の戸籍を作り田畝を校せしめんとせられたのである。しかし改革の當初各地方には國造その他舊來土着の地方豪族の勢力も根強く、直ちに完全な中央集權的政治が行はれ難い様な事情の所もあつたであらう。多くの地方では從來の國造は郡司として依然舊勢力を維持し、中央から任命されて下る國司は、これ以前にも各地にあつた朝廷の直領地を治め、兼ねて國造等地方豪族を監察する様な任務を持つてゐた國クニノミコトモチ宰サヘ或は國クニノミコトモチ司シといつたものに、實際に於て近い状況にあつたのではあるまいか。かくして五十餘年を経、文武天皇の大寶元年（701）所謂大寶令の制定せらるゝ頃に及んで漸く比較的完全に中央政府と連絡した地方政治が確立せられたのではなからうか。當時武藏にあつては荒川入間川の流域たる後の足立郡の大宮を中心として、舊國造の勢力が依然として存し、これに對して遠來の國司は、從來朝廷の直領地たる屯倉のあつた多摩川の流域を以て、在來の勢力を延長して新政を行ふべき本據と定めたのではあるまいか。それで殊更に舊來の歴史的勢力のあつた地方を避け、秩父國造の居た秩父にも、足立郡の大宮にも置かず、多摩郡なる今の府中町の地に國府を置いたのでなからうか。さもなければ、舊來の關係上依然東山道に屬してゐた武藏の國府は、當然早くから開け且交通上便宜な武藏の北部か中部に置かれたであらう。この國造家がなほ後にも足立郡に國造として存したこと——たとへば地方の政治から離れて、單に古い「まつりごと」の形式の一部分たる神祇の祭祀を行ふ宗教的・儀式的の存在乃至は一種の名譽的表象となつたといへ——は、これと全く無關係のことであらうか。

國府は奈良朝時代に至り、何事も唐制を模倣して大規模に形式を整へる時代にあつて、大中央集權の威勢を誇示すべく、最も整へられたことと思はれる。中央にあつては平城京の經營あり、諸の大寺院を始め大佛の造立もあり、莊大華麗なる天平時代の偉觀を呈したが、地方に於いても亦これに伴つて、國司の廳も厳しく構へられ、國分寺の大伽藍は建立せられ、金堂・講堂・七層の大塔まで燦として冲天にかゞやいたことであつたらう。

しかしこれは決して地方一般の文化や經濟状態が發達した結果として自然に出來たわけではなかつたのである。従つてなほ東國地方一般の状況は極めて荒涼たるもので、概して人口稀薄で到る處に茫漠たる原野が多く、たゞ泉の邊、河川湖沼の沿岸等の平野丘陵等農業と住居とに適する様な所には、



稍々聚落が散在して居た位なものであつたらう。これは和名抄等に見える郷名の分布などからも想像出来る所である。此等の中でも、もとより國府とか古來山緒ある神社或は佛寺の附近等には、國衙の官人や、舊來の地方豪族・神人僧侶等で可なり人家の集つた場所もあつたであらうが、勿論都市などと稱し得る程のものではなく、市場をさへ備へる程に發達したものは殆ど稀であつたらう。

かくて茫漠と續いてゐた原野にも、人口の増加に伴つて、灌漑の便がある所には次第に開墾が行はれ、農業の經營によつて發展しようとしたものは之に従事し、又水利の悪い荒野丘陵等にあつては牧畜を行ふものも増加したであらう。譜第を以て郡司に任せられる様な地方古來の豪族や、土地の開墾・莊園牧場の興廢に關して權能を有した國守として來任したものなどで、未開不毛の地を開き、莊園を起し、子孫をして之を經營せしむる等のものも生じ、又自ら牧を營み或は官牧の監となつて土着するものも少くなかつた様である。中央から下つた貴族の子孫などには舊來土着の地方豪族の勢力と合體し、之を繼承したのもあつたであらう。此等は土着し土地を領して住人となり、やがて兵仗を帯びて武門武士となつたのである。稍々時代が下つて武相の野に蔓延した所謂武藏七黨などはその著しいものである。彼等は皆廣大なる土地を領有し、次第に中央の權門勢家と結び、この中央との關係によつて、社會的にはその地位を高め、政治的・經濟的にはその郷國に權威を伸長し領有を確實にしようとする様になつた。こゝに莊園といふ特殊な制度が發達して來たのである。

桓武天皇の延暦十一年軍團兵士の制が廢せられ、地方の武備もやゝ弛んだが、後これに代つて地方の警戒に任すべく檢非違使・押領使・追捕使等が置かれる様になつた。彼等地方の有力者にして、之に任せられるものもあり、或は又、京に上つて衛府に仕へるものもあつた。蝦夷と境を接し、常に我が北進勢力の先鋒として活動した東國人は又廣濶なる山野に自然の恵をも享けて、馬に騎り弓箭を帯び常に武を練る者も少くなかつた。彼等は此境涯にあつて、京洛の貴族が平安の小天地に躊躇して文弱に流れ、優柔怯懦なるに似ず、未開の廣野に新天地を開拓せんとする勇健濶達なる氣象を有してゐた。こゝに所謂武門武士を生じたのである。彼等住人は元來田地・牧場の開發管理經營即ち直接間接に農業生産にたづさはり、こゝにその經濟上の根底を有してゐた故に、勢ひ土地の景況に従つて家毎に各々村落に分散居住し、社會的・經濟的に小單位を以て生活しなければならなかつた。従つて一地點に多數のものが集住する都市的生活は出来なかつたのである。此等土着豪族の分散居住した狀況は武藏七黨の苗字などによつて窺ひ知られる。もとより彼等の間にも惣領分家其他の血縁關係等によつて團結を作り、何々黨と稱し、一朝事ある時には、旗頭をいたゞいて出動する様なことはないでもなかつたが、概してその依存する經濟狀態に基いた社會組織から分裂を重ね、割據的狀況にあつたといつてよからう。今其等の地方豪族の生活狀態を文献や遺跡によつて想像するに、彼等は普通自己の領有管理經營する地域のうち、土地高燥要害堅固で、曠濶なる田地牧野を瞰下し得る様な丘陵の上或は山



岳の中腹に居館を構へ、或は又平坦の地方にあつては堀を周らし、土居を築き、城戸<sup>キド</sup>を構へ、矢倉を設け、以て警防に備へた様である。此等の領主に従屬する數十百の家ノ子郎黨は館の内外に居住し、農牧に使役さるべき家人奴婢農民等は其附近に聚落をなして住んでゐたのであらう。猶又武器其他日用品を製作する工匠の輩をも住せしめたものもあつたであらう。即ち後世桃山時代以降に於いて見らるゝ如き大規模な城下町の萌芽は實に武門武士の發生とともに生じたといつてもよからう。而して此等の聚落にあつては、殆どその範圍に於いて自給自足し、直接に物々交換して用を便するものが多く、未だ市場を備へるには至らなかつたのを普通とする様に思はれる。鎌倉に幕府が開かれる頃まで、一般にこの地方は此の如き小村落散在の状況を以てこの時代を經過した様である。

此の如き状況にあつては、彼等の各家々が如何に富裕であらうとも、個々の武人が如何に剛強であつたとしても、社會上・政治上の大勢力とはなり得ず、京に出でては僅かに東國の邊民として權門勢家の願使に甘んじなければならなかつた。然るに此等のばらばらな小單位を打つて一丸となし、一大勢力として天下を左右するに至らしめたその核心となつたものは源平二氏の本宗、殊に前者であつた。

上古以來奥羽に於ける蝦夷の鎮定は重大な問題であつたが、平安朝時代の初に一先づ鎮定に赴くとともに、特殊の地方を除いては軍團の制も廢せられ、その後地方政治頽廢の積弊をうけて、天喜・康平の頃(1035—)に至つては、俘囚頼時・貞任等の亂起るに及んでも、官征するに良將を缺き、諸國派

するに兵なく、送るに糧なき有様となつた。幸に鎮守府將軍源頼義を陸奥守に任じ、その私恩を施して地方の豪族を集むるなど、臨時の方策を以て亂を鎮定することが出来たが、こゝに武人執權の端緒は開かれたのである。當初は猶頼義・義家等も中央に於ける大勢力とはなり得なかつたが、次第に此等の武將と地方武士との間に特殊な固い主従關係を生じ、それが遂に嵩じて、この團結した勢力はやがて東國の邊陲相模鎌倉に幕府を開き、武將頼朝をして天下に號令せしめ、武家政治七百年の基をたてるに至らしめたのである。

鎌倉に幕府が開かれてから、頼朝を輔けてこゝに至らしめた關東の武士(それは多く武相の武士)にして、或は守護として、或は地頭として全國の各地に散在したのもあり、或は又幕府の要路に立ち、鎌倉に邸宅を構へて住むものもあつたが、猶多くは平常舊によつて地方散在の館に住し、時々京・鎌倉に番上勤仕した状況であつた。此の如き状況を以て前代と大差なく、鎌倉時代百五十年間をも經過したのである。

然るに元弘年中に至り、後醍醐天皇の幕府御討伐によつて關東の状況に動搖を生ずることになつた。關東の動搖は先づ新田義貞の擧兵に始まる。始め事の起るや、關東の武士は何れも幕府の軍に従つたが、彼の擧兵によつてこれに従ふものを生じ、遂にその南して鎌倉を攻むるにあつて、久米川・小手指原・分倍河原・關戸の戦となり、沿道の諸地に少からず影響を與へた。かくして元弘三年(1333)五



月鎌倉は陥り、北條氏亡び、建武中興の大業は成し遂げられたのである。

しかし間もなく、武家政治の昔を希ふ一部のものが、足利尊氏を中心として公家中興の政治に叛旗を翻し、その持明院統を擁立し奉るに及んで南北對立の姿となり、日本全國津々浦々まで、兩軍の何れかに屬して攻争が絶えないことになった。關東は新田・足利兩氏を始として主なる武家の本據地であつたから、屢々攻争の巷となつた。本書の範圍では、正平二十三年川越に平一揆の蜂起した如き、矢口ノ渡に新田義興の誘殺されたるが如き即ちこの間の出來事である。

かゝるうちにも足利氏の代表する武家方の勢力が旺盛となり、實際上再び武家政治の世となつた。しかし足利氏は持明院統を擁立して吉野の朝廷に對抗する關係から武家政治由緒の地たる鎌倉に本據を据ゑ兼ね、幕府を京都に置いた。而して歴史的中心地鎌倉には關東管領を置いて武家の本源地たる關東を支配せしめることとし、尊氏の子基氏を以てこれに充てた。

然るに各地の動亂に寧日なき幕府にとつて、その股肱としてこの要地にある鎌倉管領は、次第に權威を増長して管領を公方、執事を管領と稱し、二代氏満・三代満兼に至り將軍に抗するの氣勢を示す様になつた。

幕府は亦之を牽制すべく執事(管領と稱す)上杉氏を始め關東の諸豪族を後援する所もあつたので關東北部の諸豪族と鎌倉公方との間には争亂が引續いた。その都度武藏は鎌倉勢の通過地となり、殊に府中はその策源地たるの觀があつた(府中高安寺の條等参照)。こゝに一寸注意すべきは府中・所澤・入間川附近が屢々戰場となつたことである。これは當時關東の中心が鎌倉にあり、これに對抗する勢力が關東の北部にあつて、此等の地點がこの兩者の交通線上に位し、この線と丘陵河川とが縦横に交はる所であつたからである。

鎌倉府は四代持氏の時に至つて先づ上杉禪秀の亂(應永二十三年 1416)あり、相模・武藏附近の諸豪族は何れかに屬して關東の諸地彌々亂れ、次いで上杉憲實等のことによつて永享の亂(永享十年 1438)となり、京軍は鎌倉に侵入し、公方持氏は敗れて翌年二月自殺し、四代八十年にして鎌倉管領は亡び、關東は中心を失つてしまつた。然るに上杉氏は下、關東の諸氏に對しては管領(執事)として威重く、上、幕府の覺えもよかつたので、憲實が幕府の命を奉じて關東の政務を行ひ、鎌倉府の實權を掌握する様になつた。憲實は間もなく引退して弟清方が管領の職に就いたが、久しからずして結城氏朝等反上杉氏の一派が持氏の遺孤安王・春王を奉じて下野・常陸の地方に起つた。これが所謂結城合戦である。關東の諸豪族は二分して各地に攻争し一時大亂となつたが、遂に上杉氏の勝利に歸し、その勢力は關東に確立するに至つた。安王・春王等は捕へられ京都に送られる途上美濃に斬られた。其後末弟永壽王は將軍義教の死とともに、幕府の方針が變つた結果、結城落城の後九年、寶徳元年(1449)關東に下向して鎌倉に入り關東管領(即ち所謂鎌倉公方)を繼ぐことを許された。しかしこの間に既



に關東の大勢は上杉氏に歸してゐた。永壽王は後元服して成氏と稱し、憲實の子憲忠がその執事（即ち所謂管領）となつた。ところが暫くにしてこの兩者は不和となり、遂に成氏は不意に憲忠を攻め殺してしまつた（享徳三年 1454）。こゝに於て上杉氏は成氏を討つ軍を起し、上杉持朝・長尾昌賢・太田資清等は鎌倉に攻め入らうとしたが、途上島ヶ原に撃退された。よつて持朝・昌賢等は幕府に請うて成氏を討つことを許された。成氏は康正元年（1455）正月上杉氏を討つため鎌倉から武藏府中高安寺に出陣し、分陪河原の附近に戦つてこれを破つた。上杉方はその將憲顯創を蒙つて高幡で自殺し、持朝の子顯房も戦死して散々の敗北となつた。かくて持朝・昌賢等は常陸に走り小栗城に據つたので、成氏は小田・築田・小山等常總の諸氏をして之を破らせた。昌賢等上杉方は其後越後の守護上杉定昌等の援を得て下野只木山に籠つたが、こゝも攻め落され、走つて武藏埼玉郡騎西城に據つた。成氏は下總古河城に陣して上總・下總・武藏・相模等の兵を募り、これを討たうとしたが、幕府の軍が鎌倉に攻寄せると聞き、鎌倉に歸つた。然るに幕軍來り攻むるに及んで鎌倉を保つことが出來ず、走つてまた古河城に據つた。其後は遂に鎌倉を恢復することを得ず、鎌倉府は全く分散してしまつたのである。

こゝに於て常總地方の豪族を後援とする成氏と越後・上野・武藏・相模・伊豆を根據とする上杉氏とは大利根の水脈を挟んで東西相對峙する形勢となつた。幕府は主を失つた關東に門地高き一族を置き、上杉氏を助けて古河公方に對峙せしめようとし、澁川義鏡を下して足立郡蕨城に居らしめた。しかし

その聲望は遠く成氏に及ばなかつた。そこで義鏡等は更に幕府に請ひ、將軍義政の弟政知を下して關東の主と仰ぐことゝなつた。政知は駿河の今川氏等を後援とたのむ關係などから鎌倉に入らず、伊豆の堀越に住した。堀越御所・堀越公方などゝ稱せられるのが即ちそれである。従つて鎌倉府の再興を見ることが出來ず、關東はいよゝゝ割據對立の狀況となつた。當時山内上杉房顯の臣上野白井の長尾昌賢と併んで、川越の扇谷持朝の臣に太田資清・持資父子の傑物があつた。持朝が入間郡仙波の館から三芳野郷へ城を移すのと前後して、持資は康正二年兩總の敵に對して江戸に築き、長祿元年四月に落成して品川の館からこれに移つた。江戸城の成るとともに父資清の築いた岩槻城も同年三月に落成し、成氏方の古河・關宿・菖蒲・野田その他下總方面の諸城に相對してこゝに全く對立の形勢が定まつたのである。

かゝるうちにも房顯（山内）・持朝（扇谷）等相次いで歿し、山内家は顯定がつぎ、扇谷家は政實がついだが、政實は間もなく死して弟定正の代となつた。然るにその後上杉氏の間内訌が起り、昌賢の歿後には鉢形城を中心として武相にわたるその子景春の亂あり（文明九年十月）、山扇兩家の争によつて太田道灌の遭難あり（文明十八年）、その子資康のかへつて顯定によるあり、關東の混亂は彌々複雑になつた。かくして山扇の兩家は、長享二年二月には相模實蔭原に、同十一月には高見原に戦つた。其後明應三年定正は伊豆の北條長氏の援を得て顯定と荒川に對陣中落馬して死し、其嗣子朝良が兵を



收めて川越城に歸る等のこともあつたが、兩家の争は繼續され、古河公方と鼎立の姿であつた。しかも後には、古河公方對上杉氏の争よりも兩上杉の争の方が主となり、一方は古河に通じて他方を討つなどといふ様に變化して行つた。かく兩家の南北に分れての對峙中、北、山内家の背後越後には長尾爲景が起り、顯定の死後は長尾景春も之に應じ、南、扇谷家の背後駿河には伊勢長氏起つて伊豆・相模を略することゝなつた。しかも猶兩上杉氏は父祖以來の内争を續け、次第に自ら滅亡へと進むのも氣づかなかつたのである。永正元年(1504)扇谷朝良は駿河の今川氏親・伊豆の北條長氏の援を得て、山内顯定と立川原に戰つて敗れ、遂に川越城も圍まれて翌春和して江戸に退くに至つた。

次で關東に起つた重大な事件は北條氏(鎌倉時代の北條氏に對して後世「後北條氏」といふ)の勃興である。その初代長氏(初め伊勢氏を稱す、入道して早雲といふ)はもと駿河今川氏の部將であつたが、延徳三年(1491)堀越公方政知の死するや、その内訌に乗じて、その子茶々丸を討つて伊豆を略定した。かくて明應四年(1495)には大森氏を逐つて相模小田原城を奪つた。これを手初として五代約百年の間に、歴代の英主相ついでその奇抜なる戦略と、當時にあつては比較的整つた軍隊とを以て舊勢力上杉氏を侵し、巧妙なる外交と婚姻政略とによつて、よく武相土着の舊豪族を懐柔し、周到なる民政を行つて民心を收攬し、兼て經濟的根柢を確實にしつゝ、關東の大部分を領有するに至つた。今その經過の大要を記せば凡そ次の如くである。永正九年(1510)には三浦氏を逐つて相模岡崎・住吉

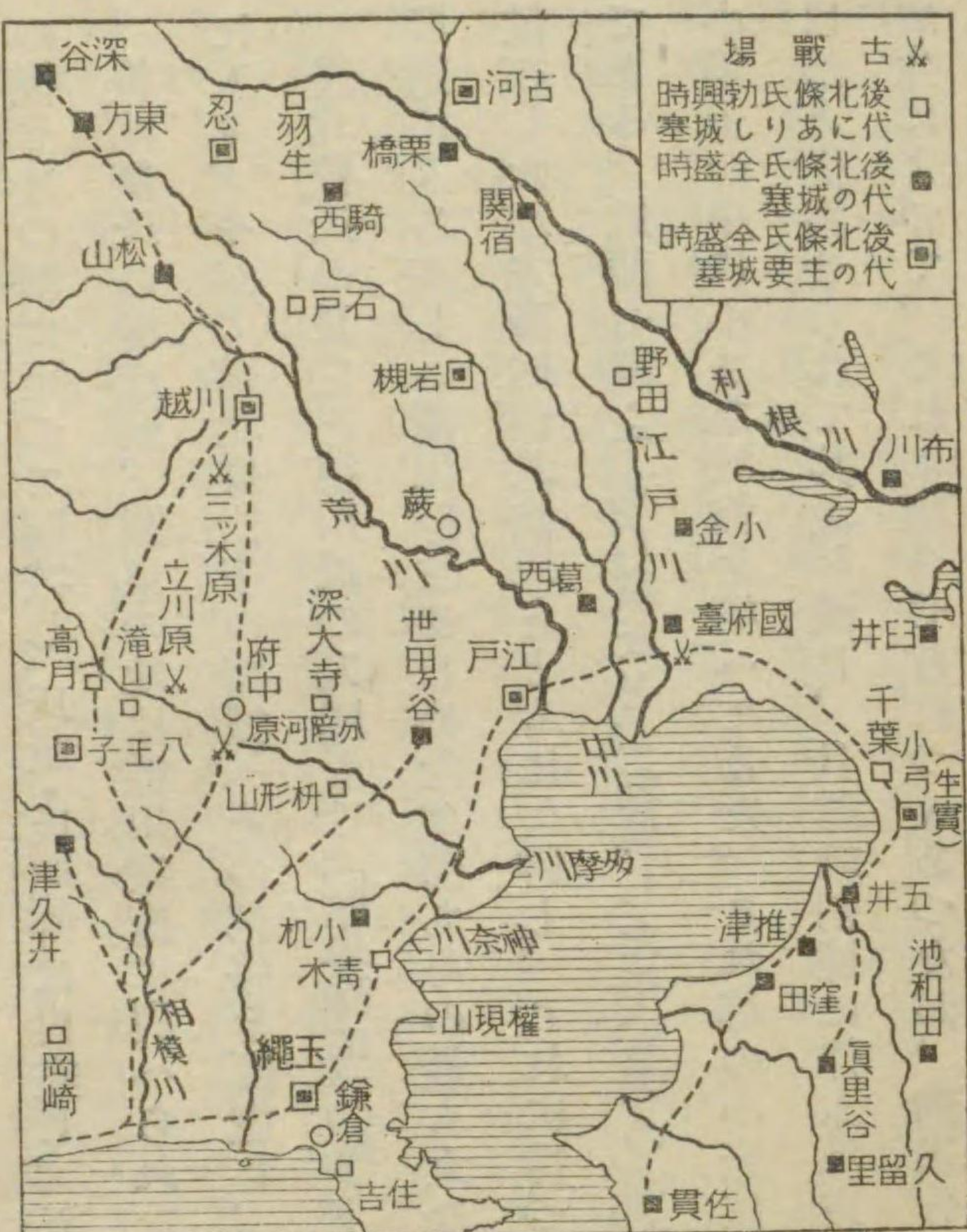
の二城を取り、同十五年には新井城を落して同氏を亡し、全く相模を領有した。翌十六年(1519)早雲は伊豆韮山に卒したが、其子氏綱よくこれをついで、大永四年(1524)には、上杉朝興を破つて江戸城を取つた。北條氏は安房の里見氏・下總の千葉氏・古河公方・上野武藏の上杉氏等が何れもその内訌によつて他を顧みる暇のない間に、よく一致共同して根柢を養ふこと十餘年、天文六年(1537)上杉朝興の死後その嗣子朝定と戰つて川越城を奪つた。兩上杉氏・古河公方等は漸くにして北條氏の恐るべきものなるを悟つて力を併せて川越の恢復を圖つたが、時既に遅く、屢々そのやぶる所となり、天文十五年の戰に於て遂に憲政・晴氏は敗走し、朝定は討たれ、かへつてその本據松山城をも奪取せらるゝことになつた。かゝる勢を恐れて、瀧山の太石氏・天神山の藤田氏を始として、舊上杉氏勢力下の諸豪の降り投ずるもの多く、武藏の大部分はその勢力範圍となつた。川越の役後松山城には堀和氏を川越城には大道寺氏を置いて之を守らせた。これよりさき氏綱は天文七年(1538)里見氏と小弓御所とを下總國府臺にやぶつて義明を敗死せしめ、總州へもその勢力を振つた。天文二十三年(1554)には氏康は古河を陥れて晴氏を相模波多野に移し、氏康の女の所生なる義氏を立て、公方とし、古河公方の勢力もその包含する所となつた。上杉氏は次第に北條氏のために壓迫せられ、天文の末山内憲政は越後に走つて長尾景虎により、遂に永祿元年その家を讓つた。こゝに景虎は上杉氏を冒し、晴氏の嫡子藤氏を助けて關東を一統しようとし、永祿の初め屢々關東に侵入し、常陸の佐竹・安房の里見等と通じ



て北條氏と戦つた。この頃甲斐の武田氏も漸く盛になり、南に駿河方面に北條氏と境を争ひ、北は信濃・上野方面に上杉氏と對峙し、この三氏を中心として、各地大小の豪族は或は結び或は離れ、背叛常なく、關東の混亂はその極に達し止む所を知らぬ有様となつた。従つて北條氏は里見・上杉・武田を始め殆んどすべての四圍の諸豪と交々戦を交へた。夫等の中で著しいものは、永祿四年の上杉謙信の侵入、同十二年の武田信玄の侵入、永祿七年の里見氏との戦等である。松山城・瀧山城・國府臺等の戦はこの間に起つたのである。かゝるうちにも、天正元年(1573)には武田信玄卒し、同六年には上杉謙信も卒して北條氏はその全盛時代を現出した。

こゝに後北條氏盛時に於ける領内の状況を一瞥するに、その最大中心は相模小田原にあり、本書の範圍では、地方的中心として西に八王子城、南に小机城、東に江戸城、北に川越城・岩槻城・松山城等があつた。八王子城には西南武藏の豪族大石氏(上杉氏の被官)を繼承して當時の北條氏では屈指の人物であつた氏照(氏政の弟)があり、西の方武田氏に備へるとともに西南武藏の鎮であつた。小机城は、氏政の子氏堯に屬して笠原氏が之を守り、相模東部の中心玉繩城と江戸城との連絡をなし、江戸城には遠山・富永等があつて房總に備へ、川越城には大道寺氏があつて武藏の中央を鎮し、松山城には堀和氏等があつて上野方面を押へ、且鉢形方面との連絡を保つて居たのである。此等の諸城を連ねて主要な交通路があり、その途上には適宜數里をへだて、宿驛を設け、傳馬を備へ、市場をたて、そ

の繁榮を圖るとともに、物資をこゝに集めて戦時の徵發に便したのである。この頃から地方の小豪族は兼併されて、此等の要地に集められ、その背離を防ぐとともに事變に備へたから、城郭が次第に大



中世末期の東京附近

規模となり、従つて地方散在の小さな城館は減少して行つた。城郭に武人が多數集住するとともに、城下には、工匠も集め置かれ、市場も必ず設けられ、かくして次第に都市が成生發達し、又地方一般の經濟状態も進歩發達して行つた。八王子の如き川越・岩槻の如き世田ヶ谷・松山の如き何れも好個の事例を示してゐる。かくて天正十年の春、織田信長が武田氏を亡してその舊領を收むるに及び、北

條氏はその部將瀧川氏等と領土を接する様になつたが、その死後更にこの勢力が豊臣秀吉に繼承せられて、その麾下と領域に事を構ふるに至つた。こゝに秀吉の大規模な北條氏征討の軍が起されることになつたのである。天正十八年(1590)の春、東海道から進んだ本軍は四月の初小田原城を圍み、北



陸道方面から進んだ前田・上杉等の諸軍や又淺野・木村等の諸軍は關東各地に散在する諸城を攻めた。此等は大抵その主が小田原城に籠つて留守なので、戦はずして降り散ずるものも少なくなかつた。そのうちで比較的抵抗したのは、上野の松井田、武藏の忍・八王子、岩槻等であつた。小田原は籠城三ヶ月の後七月の初に至つて開城し、氏政・氏照等は自盡し、五代九十餘年にして北條氏は亡びてしまつた。

後北條氏の滅亡後、關東の地は徳川家康に與へられた。家康は八月一日（天正十八年1590）江戸城に入り、やがて舊北條治下の諸城へその部將を配置し、着々新領土の經營を進めた。

後北條氏の滅亡と徳川氏の入國とは、關東殊に武藏・下總方面に於てすべてが中世的状態から近世的状態に入る甚しい變化を生ぜしめた。即ちその最も大なるものは、中古武家勃興以來この方面に土着散在した地方豪族が北條氏とともに失脚し、これに伴つて地方的中心たる小城塞が廢止せられたことである。武藏七黨・千葉六黨などが勃興した平安朝の頃からこの地方に散在した地方的小豪族はその小領土の中に小さな城館を構へてゐた。これ等の小豪族は南北朝以來上杉・後北條兩氏の争亂の間に、自然と併吞せられて其數を減じ、且群雄割據に伴ふ地方的中心地（岩槻・江戸・川越・八王子の如き）の成生によつて、これに集合せられつゝあつたが、猶幾分散住居の形を残して居つた。

然るに北條氏の滅亡によつて、これに屬して居た土着の豪族は一掃せられ、徳川氏が入國し、その臣下を封置するに及んで、全く新なる支配者が一團に纏つて、他國から比較的大きな中心地へ移つて來た。而して此等は種々の事情の下に、もはや地方へ分散住居することになつたのである。かくて、地方の政治・軍事・社會・經濟の中心に異動を生じ、ひいて地方一般の狀況を變化せしめることになつた。その一つはこれ等の要地を連絡する交通路が變つたことである。この理由の一つとして兩者の勢力範圍の相違による要地の變化を擧げてよからう。即ち彼にあつては伊豆より起つて關東（狹義）に入り、箱根の嶮要を背にして小田原を本據とし、一面甲斐・駿河方面と對抗しつゝ東北に向つて領土を擴め、その最後に至るまで、常に四隣と交戦状態にあつた。従つてその領域の形は關東の西部に細長く、この形勢に従ひ必要に迫られてその要塞は配置せられ、これ等を連ねるべく交通線が次第にきまつて行つたのであつて、始めから理想的に計畫したものでなかつたのであつた。

然るに徳川氏にあつては、豊臣氏といふ大勢力を背景とし、殆ど全關東にその勢力を行ひ得たとともに、新にこの大領土に封ぜられたのであつたから、比較的自由に計畫施設することが出來た。それでその本據を全關東の中心江戸に置くとともに、それに從屬する諸城の配置はこれを中心として計畫されたのである（もとより殆ど全部前代の上杉・北條若くはそれ以前のものを用整理したものではあつたが、其等は何れも城郭としての地理的條件に適つたものが多かつた）。しかも當時は一般に割據分裂的であつた前の時代とは稍、趣を異にし、比較的大規模な統一といふ機運が各方面に動いてゐた頃ではあり、且他日大いに爲すあらんとした徳川氏のことであつたから、交通の如きも既に全國的な立



場から江戸を中心として計畫されたのである。後の所謂五街道の如きも、大體この頃に自然と定まる様になつた。そして又一方此等の交通路を顧慮して城塞も廢止縮少或は修築せられたのである。本書の範圍では小机・八王子・松山・小金等の諸城が相次で廢されたのも、一因はこゝにあつた（但し此等の諸城は城そのものも新時代には稍々不適當なものであつたことも、もとより一因ではある）。

かくして、關ヶ原の役（慶長五年1600）の後は、曾て豊臣氏幕下の一大名に過ぎなかつた徳川氏は天下の實權を掌握し、次いで家康が征夷大將軍（慶長八年）となるに及び、江戸は幕府の所在地となり、政治・軍事・財政・經濟上、事實上の全國的中心となつて、こゝに所謂「江戸時代」は始まり、一種獨特の「江戸文化」が起ることになつた。

江戸は元來政治的都市である。これを形の上からみれば、城下町である。中世の末期から近世初期にかけて、所謂中央集權的な封建制度が成立し、これが社會・經濟その他あらゆる我が近世文化の基礎をなしたのであつて、城下町そのものが既にその表現であるが、江戸はその最も代表的な全國的最上級の城下町として發達した。かくて近世初期に於いては實に世界最大の都市であつた。

近世の社會は武士を中心として、農・工・商・賤民等に分れた一種獨特な身分階級による組織をなし、政治は武士によつてなされ、神職・僧侶並に農・工・商等の庶民はこれを圍遶して生活して居つたのである。この近世的政治・社會・財政・經濟等の狀態を具體的表現したものが即ち城下町であり、その最も

代表的なものが江戸であつた。

従つて「江戸」を觀察し研究するならば、そこに近世文化の諸相は、文字に表現し得ない程の深奥微妙な點までも直觀することが出来るであらう。江戸史蹟の踏査考究はその點に於いて史學研究の上

に重要な意義を有するものといはなければならない。

城下町として發達した江戸は、先づ築城を以てその基礎を置かれたのである。社會の樞軸をなした武家領主の據點たる城郭が築かれると、當然城主に從屬する武士の邸宅が城の内外に構へられ、次いでこれに附隨して社寺が建立され、城下町が營まれる。その全體の規模は、城主の勢力が具體的に表現されてゐる城郭の規模に並行して消長する。而してその都市としての面目は、かくの如き政治・社會狀態が變化しない限り著しい變化はないが、その代り時々自然力による災害によつて、劃期的な變化を與へられるのである。かくて江戸は屢々姿をかへつゝ東京となつた。

東京となつてからの變化は、最近世に於ける日本建設の姿を如實に表現してゐる。しかしこれは勿論「江戸」の側からみれば、その破壊である。即ち鎖國的封建社會の崩壞とこれに代つて擡頭したところの姿を表現してゐるのである。

江戸は地形上山ノ手・下町・江東の三區に分たれる。山手は即ち所謂武藏野の高さ數十米の洪積層臺地で、數多の支脈に分れ、この間に數多くの谷を作つてゐる。山ノ手に「谷」とか「窪」「久保」など



といふ地名が多いのは即ちそれを示してゐる。芝の一部から麻布・赤坂・四谷・牛込・麴町・小石川・本郷等はこれに屬する。

下町は洪積層臺地と海との間にある沖積層平野で、極めて新しい時代に人工的に埋築されたところが少くない。日本橋・京橋・芝の一部、神田・下谷・淺草等はこれに屬する。

江東は即ち隅田川以東の地で、沖積層で、人工の埋立も少くない。本所・深川等がこれに屬する。

江戸といふ地名はアイヌ語の出鼻の意であるとも、江の門即ち湊の意だともいはれる。若し前者だとすれば、山手の臺地が、平地へ突出した形をさしたのであらうし、後者ならば、沖積層の成生する際に出來た入江の意であらう。

江戸の核心をなす江戸城は、最初その入江に臨んだ臺地の出鼻に築かれたのであつた。即ち江戸は海邊の平地に突出た丘陵と平野との相交る所から發達し、一方は山野を開拓して山ノ手へ、一方は海を埋めて下町へと發展して行つたものである。

徳川氏の關東へ入國するや太田・北條時代の城の殆ど全部を本丸とし、更に東方へ區域を擴張した。これに伴つて今の大手町の邊が、城下町の中心をなし、湊は今日の日本橋から吳服橋附近にあり、城の西北の高臺に武家の邸宅が置かれてあつた。これが大體今の麴町區である。牛込・小石川・市谷・四谷・赤坂の方面などは林野も多く、まだ全くの村落の状態であつた。日本橋・京橋・神田の邊すらも、大

部分は入江や洲をなし、蘆荻が生茂り、その間に點々漁村のあるに過ぎぬ有様で、本所・深川の如きは大部分殆ど無人の荒地であつた。しかし當時と雖も、關東の首都として、徳川氏の城下であるから、神田上水の如き上水道の設備も出來てゐた。社寺等も神田・麴町等に多く存在してゐたのである。

慶長八年家康が將軍となつて以後、全國の霸都となるに及び、城郭が著しく擴張され、城下町は更に東方に移され、現今の日本橋・京橋附近に中心が移り、湊もその東南方に移つた。吳服橋附近に集住してゐた木材商等が、木材木町や神田佐久間町へ移轉する様になつたのもこの間の事情を示してゐる。

大坂役後、多くの大名を使役して江戸城外郭の大工事が起され、全國の大名が完全に徳川氏に服屬し、參觀交代の制が確立すると共に、本郷・小石川・牛込・市谷・四谷・赤坂等の所謂「山ノ手」が武家邸宅の所在地として市街の狀をなすに至つた。全國の領主・地頭が短きも一年の半近く、長きは永久にこの地に生活することとなり、江戸は全國の生産品の集合的大消費地となり、四十餘ヶ國に散在する幕府御料地の年貢米を始め、諸領主・地頭の年貢竝に江戸邸用品が、完全に全國から集る様になつた。これに伴つてそれ等消費者に對する供給者たる商工業者の數が著しく増加し、全國から各種の商品を集中することゝなつた。かくの如き人口の増加につれて、各種の教育機關・社會事業的機關・娛樂機關等も次第に發達した。

尾花の末に白雲のかゝつた關東平野の眞中に建設された新興都市は、千數百年の歴史を有する「上



方」に比べると、文化的方面の發達が後れてゐたが、やがて全國の中心的都市となり、戰亂が終息して人間の一世代程も過ぎる間に、そこに「上方」を凌駕する一種獨特の「江戸文化」を形成した。それ等に貢献した人々の遺跡や墓碑も少からず現存してゐる。

幕府の基礎が全く固まつた事を具體的に表明するものは江戸城外郭の完成と、それに伴ふ市街の改正で、市街の擴大整備と共に、神田上水のみでは不足を告げて、水源豊富な玉川上水の疏通となつた。

江戸は全國的な一大綜合的城下町である。従つてその構成も諸國城下町と同じである。即ち領主の城郭を中心として、武士の邸を置かれ、これに介在し、主として郊外に接近した樞要の高地に社寺が配置され、町家は城門から諸地方に達する街道竝にこれに準ずる道路の兩側に及び社寺の門前に置かれてあつた。武家邸は大目付等の監督の下にそれ／＼自治をなし、社寺及びその門前は、寺社奉行、町家は町奉行の管轄に屬してゐた。町の數は明暦大火の後六百七十餘町となり、享保の頃には九百五十餘町あつた。市街中の丘陵その他の要地におかれた社寺は、城下町防備の軍事的意義を多分に含めて配置されたのである。此の如き地域による政治上・社會上・經濟上の差異は時代に伴つてそれ／＼形は變へつゝも延長されて現代にまで及び、自づから山ノ手文化と下町文化とを形成してゐる。

江戸を中心として海陸の交通路が發達した。陸路では東海道を第一とし、中山道・日光道中（先是奥羽道中に連る）甲州街道・水戸道中などが主なるもので、道々には處々に宿驛が設けられ、人馬繼立の制が整へられ、路上の距離を知るために一里塚が築かれた。又道路の安全と風致のために並木が植ゑられた。これ等の宿驛は地方經濟の中心をなし、大抵月六齋等の市が立てられ、經濟發達の上に少からざる役目を演じた。初めその市は、數日を隔て、商品の取引乃至物々交換をなす交易場であつたがその取引が頻繁となるにつれて、常設の商店街即ち町となつてしまつた。東海道の品川・大森・川崎・神奈川の如き、中山道の板橋・蕨・浦和・大宮の如き、甲州街道の新宿・高井戸・府中・八王子の如きは好例で、江戸に近い品川・新宿・淺草・千住等は江戸の大きくなると共に終に接續してしまつたのである。

港には江戸城主の勢力増大とともに次第に廣い範圍から船が集る様になつた。太田氏の時代にも、既に關東諸國の船が集まつたが、徳川氏が將軍となるに及び、全日本の船が集まる事となつた。船着も、始は日比谷・大手町附近であつたものが、後の江戸橋附近となり、更に築地・深川方面となつた。市域が擴大し、人家が稠密となり、木造家屋の櫛比するとともに、冬春の候に多い大風と屢々の強震に遭ひ、大小の火災が頻發し、火事は江戸の花となり、「火消」は江戸ツ子の粹と稱せらるゝに至つた。そのため市街の變革をみ、かへつて一面には市街の改正を促進せしめる結果ともなつた。徳川氏開府以來、徑半里に及ぶ大火のみでも八十餘回に及んだといはれてゐる。

その江戸に於ける火災の中で、最も重大な火災は明暦三年（1657）の大火である。規模の大きな火災は、明和九年（1772）（目黒行人坂發火）の大火災を以て、大正十二年震災の際に於ける大火の次位



喰違門址

紀尾井町

市電 紀國坂下下車。

こゝは單に土居が建つてゐるのみで完全な枳形門ではない。堀の水を支へる爲の土橋守備を目的としたものである。江戸時代にも冠木門のみであつた。

四谷門址

麴町十丁目

市電 四谷見附下車。

外郭の西端にある門である。江戸城の臺地が扇の骨の如くひろがつてゐる要の部分にある。江戸城としては最も大切な場所であるから、左右の堀は人工で深く掘下げ、幅も廣く出來て居つた。こゝから牛込に至る開鑿は寛永十三年關東奥羽の大名に申付けてなされたものである。枳形門は同年長門萩城主毛利秀就の建立にかゝる。半藏門から眞直に西し、麴町を経て内藤新宿に至る甲州街道は、この門を通るのである。門外の地名によつて四谷門と稱するも、古くは門内の地名によつて外麴町口と稱せられた。内麴町口とは半藏門のことである。この門は江戸城としては背後の重要な地點であるから門の左右に尾州・紀州兩徳川家の邸が置いてあつた。震災後四谷驛の改修其他で全く面目を改めてしまつた。なほ枳形右方の石垣のみを存してゐる。

江戸城では外郭の門を普通「見附」と稱してゐる。見附とは、こゝに番所があつて、出入を監視するといふ意

から起つた名稱である。

市ヶ谷門址

土手三番町

市電 市ヶ谷見附下車。

麴町から市ヶ谷へ出る門である。土橋の東側に舊石垣を存するばかりである。寛永十三年森長繼の築く所の枳形門であつた。この門附近から牛込見附に至る外堀の自然の低地を利用したもので、堀幅一町餘に及び、極めて大規模なものである。堀幅は約三分一狭められてゐる。

牛込門址

富士見町

市電 牛込見附下車。

麴町田安臺から牛込方面へ出る門、枳形式で、左右の石垣が残つてゐる。寛永十三年阿波徳島城主蜂須賀忠英の築く所である。

小石川門址

飯田町四丁目

市電 小石川橋下車。

飯田町方面から小石川へ出る門である。今の小石川橋が舊位置である。寛永十三年備前岡山城主池田光政の擔當になる。寛政四年(1792)焼失し、その後渡櫓はなかつた。

鹿兒島藩島津邸址

内山下町一丁目一番地



市電 内幸町下車。

正門が残つてゐる。黒塗の門で、兩袖に番所があり、海鼠壁である。

この邸は薩摩鹿兒島藩主島津氏の邸で、俗に「装束屋敷」と稱せられ、琉球の使節がこゝで正装して幕府へ登城したのでかくいふといふ。明治の末から大正年中華族會館がこゝにあつた。

福岡藩黒田邸址 霞ヶ關一丁目

市電 霞ヶ關下車。

外務省の敷地が筑前福岡藩主黒田氏の上屋敷址である。その東北隅の長屋が現存し、江戸時代の大名邸建築の貴重な標本となつてゐる。

日枝神社

官幣大社 永田町二丁目五七番地

市電 山王下車。

祭神 大山咋神 相殿 國常立尊 帶中津彦尊 伊弉册尊

社は溜池から十米餘も高い、略々獨立の丘上にあり、境内は老樹が繁茂し、市内稀にみる神嚴な所である。山を山王山・星野山・星ヶ岡などといふ。境内の正面山下に鳥居あり、石段を上げれば樓門あり、次いで中門あり、本殿・拜殿（權現造）竝に神饌所は玉籬を以てめぐらされてゐる。その他境内には舞殿・秋所・神輿庫・攝末社等がある。

太田道灌が江戸城の鎮守として城内に祀つた社で（文明十年「1478」といふ）ある。太田氏が江戸城と殆ど同時に築いた川越城にはその鎮守として山王權現があつた。この山王權現は川越星野山の鎮守として近江比叡山延曆寺の二世座主慈覺大師が、近江日吉神社を遷祀したものであつた。天正十八年（1590）徳川氏が江戸に入城するや、家康は、城の鎮守として山王權現を祀らうと思つてゐたところ、既にその神が祀られてゐたので非常に感激し、深くこれを尊崇して産土神と崇め、紅葉山に遷座し、翌十九年社領五石を寄附し、次いで慶長年中城西の地に移した。大阪落城後元和三年（1617）には社領を増して百石とし、寛永七年（1630）には社殿を造營した。三代將軍家光は産土神として尊崇殊に厚く、寛永十一年社領を五百石とした。承應元年（1652）再び社殿を造營したが、明暦四年（1657）の大火に焼け、後萬治二年（1659）現地へ遷つた。その後も寛政六年（1794）と文政二年（1819）とに火災にかゝつたが、幸にも大正の震災には免れた。山王權現といつてゐたのを明治二年日枝神社と改稱し、同十五年官幣中社となり、大正四年官幣大社となつた。江戸城（後の宮城）の鎮守が、京都鎮護の比叡山の山王であるのも因縁が淺くない。祭禮は六月十五日で、江戸時代には、神田明神とともに江戸の二大鎮守の祭禮として最も盛大に行はれ、天和以後隔年に行はれた。（正徳三年から享保三年までは根津權現を加へて三年一回）

平河神社

村社 元平河町一〇番地

市電 麴町三丁目下車。南へ約百米入る。右側。



祭神 菅原道眞 配祀 應神天皇 徳川家康

震災後本殿のみ本建築となり、拜殿は假建築のまゝである。もと境内にあつた末社平河稻荷社・鹽神社(維新前鹽地藏)・大鳥神社・淺間神社も假りに本殿に合祀してある。屢々火災にかゝり、社寶にも著しいものが無い。

太田道灌が江戸城に川越城の三吉野天神に倣つて山王とともに祀つたもので、後現在の所に遷座したのである。祭禮は四月二十五日。

和學講談所址

上六番町一―五番地

市電 富士見町下車。南へ約百米入る。右側。

塙保己一の邸址で、文化二年和學講談所を置いた所である。今は土藏に使つてあつたといふ踏石を存するのみである。

靖國神社

別格官幣社 富士見町三丁目一番地

市電 九段上下車。

祭神 明治維新前後より今日に至るまでの殉國者

九段坂上外苑入口に大鳥居あり、次いで内苑入口にもこれに次ぐ鑄青銅の大鳥居がある。本殿・拜殿ともに宏莊な建築である。境内には櫻樹多く、舞殿・額堂・遊就館・庭園・能樂堂・相撲場等がある。

明治二年六月の創建で、招魂社と稱し、明治十二年六月靖國神社と改稱し、別格官幣社となつた。

遊就館は先史時代から最近に至るまでの武器・兵器類數萬點を時代別系統的に分類して陳列してある所である。

明治十四年(1881)五月靖國神社謁額所として設けられたのに起り、陸海軍省の所管である。館名「遊就」は

荀子勸學篇に「君子居必擇郷、遊必就士」の語にとつたものである。

外苑は、江戸時代には騎射馬場であつたが、招魂社が創立されて後も屢々競馬などが行はれた。中央に大村益

二郎の銅像がある。像の下には品川臺場にあつた大砲が列べてある。

九段下から飯田橋へゆく電車道を五十米程歩いて左折、登る坂の途中に、府の假指定史蹟になつてゐる瀧澤馬琴

邸址の井戸があるが、大正の大震災火災でひどく破損した。(鳥羽)



## 二 日本橋區

日本橋 越後屋 金座址 一石橋 白木屋 魚市場址 其角宅址  
 鋸橋 思案橋 水天宮 古衣店址 小傳馬町牢屋址 清正公堂

### 日本橋 室町一丁目―通二丁目

市電 室町又は日本橋下車。

日本橋川に架する橋で、現在のものは明治二十一年起工、爾後二十八ヶ月を費して成つた近代石橋である。

江戸砂子には「江戸の中央と云、諸方への道法此はしを元とす。」とあるが、現在でも橋の中央に道路元標の鐵塔がある。北詰にメートル法普及のためキロで各地への距離を記した立札がある。

名稱の由來、創建の時期に就ては諸説區々であるが、江戸名所圖會には次の如くある。「此橋を日本橋と云ふは旭日東海を出づるを親見る故にしか號るといへり。事跡合考に云日本橋のかゝりしは慶長十七年の後かとなりて其の考へを記せり。されど北條五代記、永樂錢制禁のことを記せし條下に慶長十一年のとし極月八日武州江戸日本橋を建るとある時は慶長十七年より以前なりと知るべし云々」。他に慶長八年(1603)説もある。南詰には高札場があつた。慶長十八年十二月八日、これを設け、諸法律令、全國里程表、駕籠、馬の賃銀、荷

物の運賃を始め常に人民の心得べき事柄を揭示した。明治七年四月十四日太政官布告を以て廢された。

同じく南詰、四日市河岸(通一丁目・元四日市町)に晒場があつた。間口五間、奥行三尺の菰葺の小屋で三方は葦を以て折り廻した。これは勸善懲惡、犯罪防止のために行はれたので、科人は早朝小傳馬町の牢を出され、この小屋にて、夕五時迄晒された。正面の埒内に捨札を立て、これに罪狀を記して公衆に示した。主殺しや主人を傷つけた者は、附加刑として行はれ、本刑としては破戒僧、情死未遂者に科したのである。

### 越後屋 室町二丁目(舊駿河町)

市電 室町下車。

現在の三越である。

開祖は三井八郎右衛門高利で、貞享年間(1684)江戸駿河町に店舗を開き、越後屋と號した。金襴、吳服より木綿に至る迄商ひ、當時既に間口九間奥行四十間の大店舗で、手代數十人を置き、日々の賣上高百五十兩を越えたと云ふ。

三井家では一方豊富の資金を以て幕府御用金爲替方を務め、名字帶刀を許された。これは三井組爲替方となり現在の三井銀行となつた。

越後屋も漸次擴がつて殆んど駿河町全町を獨占した。明治五年以來越後屋吳服店と稱し、同廿九年三月三井吳服店と改め、同三十七年、百貨店組織となり三越吳服店と呼び、最近單に三越と稱して現在に及んでゐる。今



の店舗は大正四年一旦完成したが、震災の結果更に大改造を加へたものである。

金座址 本石町二丁目

市電 日本銀行前下車。

いま日本銀行の敷地となつてゐる。

幕士後藤庄三郎光次は、文祿二年(1623)家康に仕へ、後、金銀改役を命ぜられて、前記地域に屋敷を拜領して、金貨鑄造をなした。元祿八年(1695)貨幣改鑄に當り、別に本郷靈雲寺附近に改鑄所を設けたが、世人は金座と稱したので、こゝに金座の名が生れた。後元祿十一年、之も後藤屋敷に合併された。後年、金座は用地となつて、代地を永富町に支給され、御金改役所となつたが、明治二年三月造幣局の新設と共に之を廢した。

一石橋 本石町二丁目―吳服橋一丁目

市電 吳服橋、又は日本銀行前下車。

日本橋川に架かる。市電、吳服橋と日本銀行前との中間にある。

この橋の名稱の出所は面白い。江戸名所圖會に次の如くある。「この橋の南北に後藤氏兩家(金座後藤庄三郎・吳服所後藤縫殿助)の宅ある故に其昔五斗くと云ふ秀句にて俗に一石橋と號けしとなり云々。」又一説には、兩後藤が金を出して架けた故にとも言ふ。

一石橋の南畔に、迷子報知石標がある。安政四年(1855)の建設で、通行頻繁な場所を擇んで立てたのである。

正面に「まよひ子のしるべ」と刻み、左右兩側に「たづぬる方」、「知らずる方」と刻んである。いま假指定史蹟になつてゐる。

一石橋は異名を八見橋と云つた。この橋から近隣の橋が七つ見へるので、一石橋をも數へて、かく呼んだので七つの橋とは、日本橋、江戸橋、吳服橋、鍛冶橋、常磐橋、道三橋、錢瓶橋であり、之等と一石橋を總稱して八つ橋と唱へた。現在では道三、錢瓶の二橋はなく、一石橋と日本橋との中程に西河岸橋が出来てゐる。

白木屋 通一丁目九番地

市電 日本橋下車。

日本橋市電交叉點東北角に立つ上層七階、地下二階の近代的建築が白木屋である。

寛文二年開創の老舗であつて、元は吳服屋であつたが、明治四十四年百貨店となつた。店舗は震災で一旦は跡方もなくなつたが、全く復興した。

白木屋の地下二階、西北部にある白木名水は、今では近代建築の中にあつて、通常の水呑場の如き觀を呈してゐるが、由緒のある有名な井戸である。二百七十餘年前、飲料水に供する目的で掘られたが、極めて良質の水で諸大名の御膳水に用ひられた。西部出口の前に、この井戸に就て東京市の石碑が立つてゐる。大正八年のもので、震災のため可成傷んでゐる。

屋上の東北隅にある觀音堂は、この井戸の掘鑿中、土塊と共に掘り出したと云ふ金の觀音像が祀つてある。良



とするも、江戸市に又近世の經濟上に最大の影響を與へたものは實に明曆三年の大火であつた。この火災は、本郷丸山本妙寺に發した所謂振袖火事といふものである。二日に亙つて延焼し、本丸・二ノ丸・三ノ丸・諸大名その他大邸宅五百餘、社寺三百餘、倉九千、橋六十、市街八百町、それを延長すれば二十二里八町に及び、死者實に十萬七千四十六人といはれてゐる。

この火災の結果、初期の豪華華麗な所謂桃山時代風の武家建築はなくなつたが、これを機會に武家邸及び社寺の大移轉が行はれ、山ノ手、江東地方へ著しく市域を擴張した。この點は大正震災の復興と甚だ似た所がある。

江戸の大火は諸國の領主邸を焼失するがため、全國の主要都市が一時に火災を起したのに近い程の影響を全國の財政・經濟に及ぼした。即ち津々浦々の領民に至るまでその負擔をこうむるとともに、地方の産業を刺激したことが少くなかつたのである。

かくて江戸は屢々地震と火事とに陶冶されながらも、次第に發達し元祿(1700)頃に至つては、一通り成年に達したかたちである。當時に於ける人口は、武家を除いて約五十萬で、この數はその後、明治維新の際に至るまであまり變化がなかつた。

江戸の近郊は大抵幕府の直領(當時御料といひ、俗に天領といふ)で、その間に僅かの旗本の知行所や大名の領地や社寺領が介在してゐた。幕府は北條氏のあとをついで、足立・埼玉・葛飾方面の低濕地と多摩・豊島方面の高臺との開墾に努力した。利根川方面の治水と武藏野臺地の水道とは一面江戸の都市計畫事業の一部でもあつたが、又開墾との關係も見逃すことは出来ない。甲州街道方面の平地に丸太(主として建築の足場に使ふ)の人工林が多く出來て、四谷丸太の名を以つて江戸市中へ賣捌かれた。それなども江戸といふ大都市發達の結果、新に出來た現象であつたが、今では市街の發展と交通機關の發達とにより次第に姿を消しつゝある。また水利のわるい近郊の高臺を利用して觀賞用樹木の栽培が發達した。既に慶長年間に於いて、江戸人が植木を好んだと記されてゐる程で、武家邸にも、社寺にも、町人の宅にも、それ相應の植木を要したため、かゝる特殊な發達をみたもので、京都の北野方面、大阪の池田方面とともに近世文化史上注意すべき現象である。その地域は四谷・大久保・巢鴨・染井・駒込・日暮里・入谷方面で、それも今では市街地の擴張とともに次第に郊外へ移る傾向はあるが、なほ殘存するものも數多認められる。

江戸の發達に伴つて、近郊の社寺も立派になつた。大師・地藏・阿彌陀・觀音等の何ヶ所第何番といふ様な組合せ、或は七福神・五色不動などといふ風な取合せもこの時代の中期に出來たものが多い。交通機關の不完全な當時にあつては、大體大東京市の範圍位が日歸り旅行の最大限で、この範圍の社寺の巡拜といふことは、四季折々雪花の名所を織りなして江戸人の信仰と娛樂とを兼ねて甚だ流行したものであつた。各種の名所圖會の流行などもそれと密接な關係をもつてゐる。今日も社寺の境内や路



傍などに、それを物語る幾多の金石文が残存してゐる。これ等の社寺も明治維新の際の神佛混淆分離や一般世態の變化とともに衰滅したものが少くない。

武家政治の覇府となつて以來二百六十餘年を経て明治維新となるに及び、徳川氏は大政を奉還し王政復古となり、その封を駿河に移され、諸大名は分散し、この地は全く元の荒野にかへるかと思はれた。しかしやがて都をこゝに奠めて東京と稱せられ、新興日本の首府となり世界的大都市として一大發展をする事となつたのである。従つて東京には明治以後の新しい日本を語る新史蹟が多い。

最近世に於ける世界共通の社會經濟狀態は、彌が上にも都市を膨脹せしめ、殊に我が國の諸都市は歐洲大戰の頃から著しい發達をみた。東京も亦大いにその内容が充實したが、交通機關の不備その他の關係から、地域の擴大はあまり著しくなかつた。然るに大正十二年九月の震災によつて、市中樞部の改造を餘儀なくされ、それを機會に住宅地域が著しく郊外へ擴張し、この住宅に伴ふ小賣商店等を主とする市街が發達し、道路の改正と各種交通機關の發達とはそれ等の地域の面目を一新した。又市内は焦土の上に理想的に復興された。その結果史蹟としてみるべきものが少からず廢滅に歸し、若くは改變を加へられた。それ等の史蹟を幾分なりとも指示し、回顧せしむることが出来るならば、本書出現の意義も亦空しくないのであらう。(鳥羽)

市 内 篇

一 麴 町 區

- 江戸城 (西丸大手門 伏見櫓 坂下門 内櫻田門 富士見櫓 櫻田巽櫓 大手門 平河門 竹橋門址 和田倉門 馬場先門址 日比谷門址 櫻田門 半藏門 田安門 清水門 雉子橋門址 一橋門址 神田橋門址 常盤橋門址 吳服橋門址 鍛冶橋門址 數寄屋橋門址 山下門址 幸橋門址 虎ノ門址 赤坂門址 喰違門址 四谷門址 市ヶ谷門址 牛込門址 小石川門址) 鹿兒島藩島津邸址 福岡藩黒田邸址 日枝神社
- 平河天神社 和學講談所址 靖國神社

江戸城 麴町區・神田區・日本橋區・京橋區

交通は各項參照。

江戸城は荒川・多摩川の間に展開する武藏野臺地の東端に築かれたものである。東南に河海あり、西北高く、所謂「四神相應の靈地」ともいふべき地勢である。東京市に於ける武藏野臺地の東端は、東方



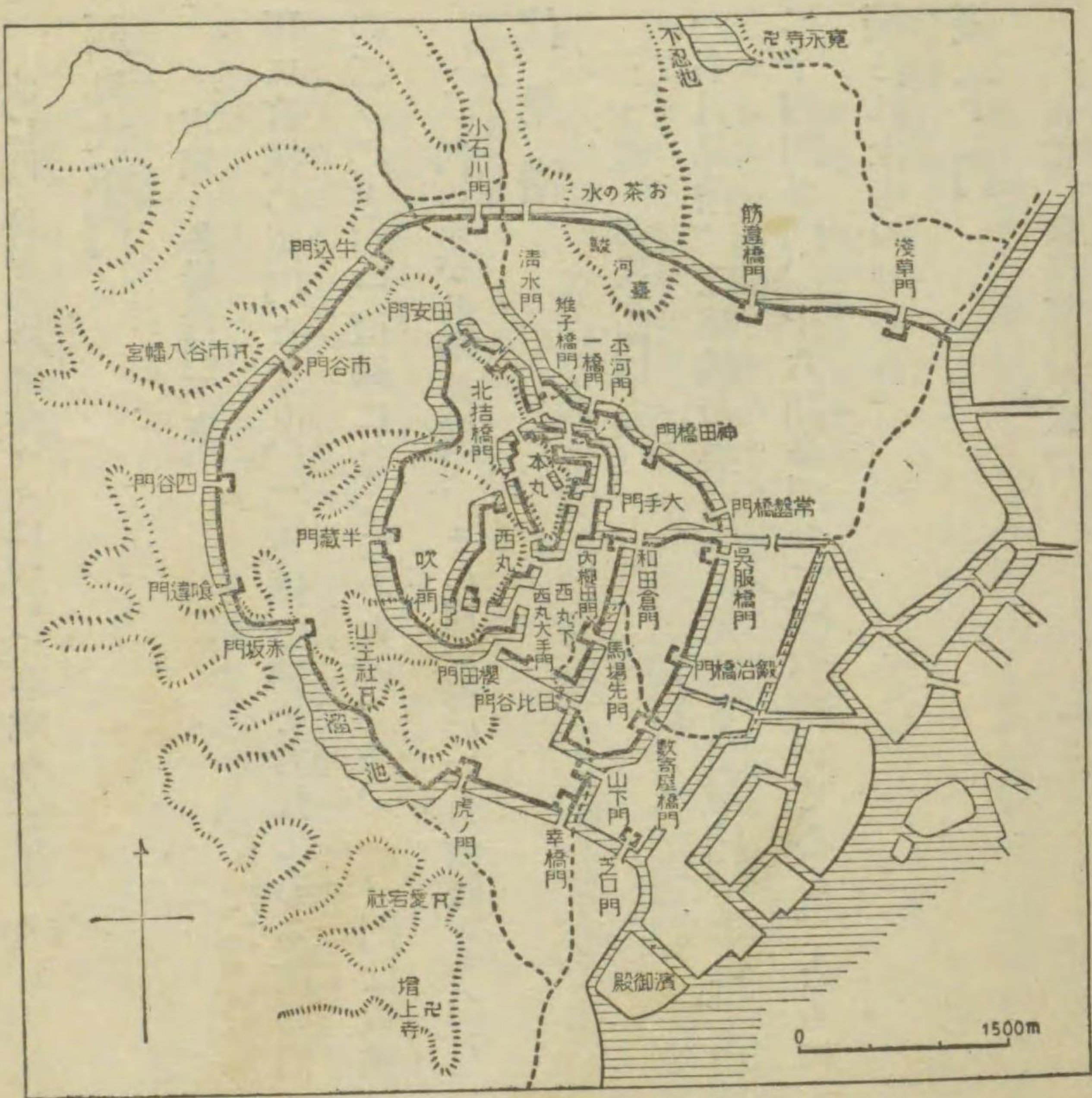
へ向つて掌を開いた如く幾多の小脈を分岐してゐるが、そのほぼ中央に最初江戸城が築かれ、後にこれを中心として二ノ丸・三ノ丸・西ノ丸・西丸下・紅葉山・北ノ丸・外郭等が擴張されたのである。

長祿元年(1457)太田持資(道灌)の築く所で、その後主家上杉氏の有となり、大永四年(1524)から小田原北條氏の屬城となり、天正十八年(1590)に至つた。

同年豊臣秀吉北條氏を亡し、關東の地を収めてこれを徳川家康に封與した。慶長八年(1603)家康征夷大將軍となり、江戸城は幕府の所在地となり、明治元年(1868)四月朝廷の有に歸するまで二百七十餘年間に及んだ。この間城主の勢力の大小によつて、規模が次第に大きくなつたものである。太田氏築城當時は後の本丸のみでこの中が數郭に仕切つてあつた。平野へ突出した高さ二十數米の臺地の一端を利用し平野に面した方の丘腹をも取りこめたもので、關東各地にみられるもの(小田原・高月・千葉等)と略々同様な形式のものであつた。

築城當時の目的は、下總古河を中心とする古河公方成氏の勢力に對抗し、岩槻・川越の兩城と連絡して南部武藏の鎮たらしめるためであつた。當時の構は、下に平川の流があるのみで、他は悉く空堀と土居との城であつた。城中には子城・中城・外城の三郭があつた。

北條氏の時代には江戸城は八王子・川越・岩槻などの諸城よりも地方的中心たる地位が低かつたので、増築されることなく、徳川氏の有となるに及んで一躍關東の中心となり、翌天正十四年四月から第一回の修築が行はれ、次いでその翌文祿元年の春にも擴張工事が行はれ、後の「西ノ丸」の工事があり、同年秋及び、その翌々年文祿三年にも正月から第三回の修築工事が起された。その後度々修築が加へられて慶長八年に至つた。同年



江戸城圖

込・小石川・本郷を経て淺草橋・隅田川に達する山手方面の大工事をを行った。これ等の工事は皆部下の諸大名に命



じて分擔させたもので、徳川氏の勢力の發展と平行して増大して行つたのである。  
次に門・櫓等の各部分々々について各説を試みよう。

### 西丸大手門

市電 馬場先門下車。

現に宮城の正門となり、二重橋と稱せられてゐる所の門である。枳形式の城門で、一ノ小門と渡櫓下の二ノ門とが一直線になつてゐたが、今、一ノ門は取拂はれた。

この門の中が的場曲輪で、その西南部に三角渡櫓があつた。

### 伏見櫓

市電 馬場先門下車。

一名月見櫓。二重橋の奥右手に見える二重櫓である。山城の伏見城から移したものと云ふ。その左右に十四間多門、十六間多門の二棟が続いてゐる。ともに大正震災後鐵筋コンクリートで舊形通りに再築されたものである。

### 坂下門

市電 和田倉門下車。

西丸から西丸下へ出る門である。渡櫓はもと正面の一ノ小門を入つて左に曲るとあつたが、明治の中頃小門の位置に移したのである。これも震災後コンクリート造となつた。

この門外で文久二年(1862)正月安藤對馬守が浪士に襲撃された。

坂下門から堀に沿つて東すれば、次の角が巽三重櫓の址である。

### 内櫻田門

市電 和田倉門下車。

三ノ丸の南西隅にあつて南面する門である。枳形式であるが右側が二ノ丸に面してゐるので土居がない。一に櫻田大手門と稱し、俗に桔梗門、吉祥門、吉慶門ともいつた。太田氏が城の頃の大手に當るといふので、その家紋によつて桔梗門と唱へるといふ。

### 富士見櫓

市電 和田倉門下車。

本丸の南隅にある三重櫓で、俗に八方正面の櫓といふ。震災後鐵筋コンクリート造となつたが、江戸城としては残存する唯一の三重櫓であつた。

### 櫻田巽櫓

市電 和田倉門下車。

三ノ丸東南隅にある隅櫓である。震災後鐵筋コンクリート造となつた。



大手門

市電 大手町下車。

三ノ丸の中央にあつて東面する門で、江戸城の正門であつた。震災後鐵筋コンクリート造となつた。古くは大橋口、大橋門、外大手などともいはれた。

平河門

市電 一ツ橋下車。

三ノ丸北方の門である。この門は枳形門で、小門が二つあるのが特色である。一つは一橋方面の城外からと、一つは北ノ丸方面から帶曲輪を通つて來る道とに對して出來てゐる。震災後鐵筋コンクリート造となつた。

竹橋門址

市電 一ツ橋下車。

北ノ丸東南隅の門である。今は枳形の小門の右側の石垣と、外岸の橋臺とが残つてゐるのみである。

和田倉門

元千代田町

市電 和田倉門下車。

西ノ丸下の東北隅にある門である。枳形式で、大正震災に潰れて渡櫓と屏とは取除かれた。この門の外が龍ノ口で、西ノ丸下の堀の水が道三堀へ落る口になつてゐた。  
龍ノ口附近に評定所と傳奏屋敷（永樂町三丁目）とがあつた。

馬場先門址

祝田町

市電 馬場先門下車。

西ノ丸下の東面の中央にある門である。鍛冶橋から西丸大手（現宮城正門）に至る中間にある。

日比谷門址

有樂町三丁目

市電 日比谷下車。

櫻田門外方面から丸ノ内へ入る所にあつた門、今の電車交叉點の西方にあつた。その南へのつゞきの堀と石垣は、日比谷公園内の池と築山とになつて残つてゐる。

櫻田門

祝田町

市電 櫻田門下車。

西ノ丸下西南隅にある南面の門である。寛永の頃は小川原門ともいつた。震災後鐵筋コンクリート造となつた。この門は枳形式であるが、その三方が堀となつてゐる爲に、西丸的場曲輪に面した方に土居がないのが特色である。

萬延元年（1860）三月三日大老井伊直弼が水戸浪士等に襲撃されたのはこの門外である。



半藏門

市電 半藏門下車。

吹上郭西の中央にある西面の門、この門は甲斐方面への幹線道路「甲州街道」の發端で、これから麴町を経て眞直四谷門に至り、内藤新宿に至るのである。門名は服部半藏といふ旗本がこの附近にゐたので起つたもの、麴町山王の祭禮の作り物の大象が半分しか入らなかつたのでかく稱せられるやうになつたといふのは、「はんぞう」といふ名に因んだ説話である。

こゝから田安門に至る間に郭内局澤から西へ麴町區善國寺谷へ續く谷筋にあたつて千鳥ヶ淵といふ堀幅の廣い所がある。

明曆大火以前には紀伊・尾張・水戸三家邸は半藏門内吹上郭内にあつた。

田安門

市電 九段上下車。

北郭の北端にある北面の枳形式城門、大正の震災に渡櫓が破壊して今は一ノ小門のみである。郭内は近衛歩兵第一聯隊・同第二聯隊がある。古くは代官町門といつた。

この門の土橋は、水面の高い千鳥ヶ淵方面の臺地上の堀と清水門方面の低地の堀との仕切になつてゐる。門の東方の堀を牛ヶ淵といふ。徳川三卿の一である田安家はこの門内にあつた。

清水門

市電 九段下車。

北郭東北面の中央にある枳形式城門、渡櫓はない。寛永元年(1624)淺野長晟の建造である。徳川三卿の一である清水家はこの門内にあつた。

雉子橋門址

竹平町

市電 一ツ橋又は今川小路下車。

内堀と外堀との接觸點にある門である。門名は慶長中唐人(朝鮮使節ともいふ)に饗應すべき雉子を飼つた所が近くにあつたのに起るといふ。今は門址は全部取拂はれ、橋の位置も變つて全く舊態を止めない。

こゝから東が一橋・神田方面への外堀となる。この外堀は井ノ頭を水源とする江戸川と大塚・白山の兩臺地の間を流れる小石川とが合流して平河となり、東南へ流れて海に注ぐ流を利用したものである。

この川は寛永十三年駿河臺を掘割つて、その南端を郭内とした時、その方へ導かれ、お茶の水・神田を通り、所謂神田川として淺草橋で隅田川に注ぐこととなり、小石川門と九段下組橋門を埋めてしまつた。組橋・雉子橋間のみ堀の一部として残つてゐた。その堀も單に敵の行動を妨害する程度の所謂「捨堀」の類で、内側岸に土



壘はなかつた。小石川橋・組橋間は明治になつて再び運河として掘られ現在に及んでゐる。雉子橋・一橋間のみ外堀の石垣が舊状を存してゐる。

一橋門址 竹平町・元衛町

市電 一ッ橋下車。

平河門外にある外堀の一門で、枳形式城門であつたが、今は渡櫓の一方の石垣のみが存するばかりである。

徳川三卿の一である一橋家は、この門内にあつた。

一橋・神田橋間の石垣は昭和六年の改築で、石は舊材であるが、もと屈曲した直線のプランを若干堀幅を狭めて曲線のプランに改築したものである。

神田橋門址 大手町一丁目・二丁目

市電 神田橋下車。

和田倉門方面から神田方面へ出る門である。枳形の東側の石垣のみが残つてゐる。

神田橋・常盤橋間の石垣は、地面以上が削取られ地面以下の下面のみが残つてゐる。神田橋・一橋間と違つて基部が破壊されてゐないから、舊プランは大體わかる。この邊は堀幅は半分位に外側から埋められたものである。

常盤橋門址 錢瓶町

市電 常盤橋下車。

外堀としては比較的よく枳形の石垣を存してゐる。大正八年多數識者の反對をも顧みず枳形の一部を破壊した。その理由は道路が甚しく屈曲してゐては交通に不便であるといふのであつたが、その後間もなく北に新常盤橋が出来、南に別に常盤橋が出来て、廢道となり、史蹟破壊と都市計畫の不完全と工費濫用とを暴露するが如く、石材置場として残つてゐる。

吳服橋門址 永樂町

市電 吳服橋下車。

大名小路郭の東北にある門で、大手門の正面にあたつてゐる。門の名稱は、この門外に幕府御用の吳服所後藤縫之助の邸があつたので起つた。慶長初年外郭築造の時成り、寛永六年(1629)枳形を改築し、明暦大火に焼失し、萬治二年(1658)再建された。

この門内に北町奉行所があつた。初め常盤橋門内にあつたが、後文化三年(1806)、ここに移つたものである。この附近一帯を八重洲河岸といふ。

鍛冶橋門址 八重洲町一丁目

市電 鍛冶橋下車。



吳服橋とやらんで、その南にある門で、馬場先門の正面にあたり、吳服橋と同じく寛永六年枿形が改築されて規模が整つた。

數寄屋橋門址 有樂町二丁目

市電 數寄屋橋下車。

日比谷方面から京橋方面へ出る門で、慶長年中になり、門は寛永六年の創建で、仙臺伊達氏が擔當した。初め芝口門といつたが、寛永十三年芝口門（今の新橋）が設けられるに及んで門外の地名數寄屋町に因んで數寄屋橋門と稱したといふ。

この門内に南町奉行所があつた。

山下門址 山下町

市電 加賀町下車。

今の山下橋附近である。この門は寛永十三年の外郭修造の時には設けられず、後に至つて開かれた。枿形は肥後熊本城主細川忠利の擔當である。

幸橋門址 内幸町

市電 櫻田本郷町下車。

外郭の南端に位し、江戸城から芝増上寺方面に至る口である。一に御成門と稱せられた。始めは山下門と同じく細川氏の建築である。こゝから虎ノ門に至る間は全く堀が埋められ、道路及び市街地となつてゐる。

虎ノ門址 内幸町二丁目

市電 虎ノ門下車。

櫻田門から芝西久保方面へ出る南面の門、今電車通になつてゐる邊にあつた。寛永十三年外郭完成の時に設けられたもので、肥前佐賀藩主鍋島勝茂の建造である。享保年中再び焼けて後、渡櫓を設けなかつた。

明治初年工部大學校はこの門内、文部省新廳舎の西部にあつた。虎ノ門から赤坂見附に至る間を溜池といふ。

明治初年までこの邊の低地は一面池であつた。池の岸は城の側が崖になつてゐたので特に壘はなかつた。

赤坂門址 平河町六丁目

市電 赤坂見附下車。

江戸城から相模の中央部に至る矢倉澤往還或は大山街道と稱せられる道に設けられた門、寛永十三年筑前福岡城主黒田忠之の築く所である。枿形右側の石垣を存する。赤坂門から四谷牛込を経て淺草橋に至る間は壘は單に土居で、石垣は門の部分のみに使つてある。土居は喰違門と四谷門との間が最も完全に残つてゐる。



水を得たのはその御利益だとして参詣人が多かつた。白木観音と稱して毎年、七月、四萬六千日に開帳し、淺草に詣づる人は此處に必らず立ち寄つたと云ふ。

魚市場址

室町一丁目 本町一丁目・二丁目附近一帯

市電 室町又は日本橋下車。

日本橋北畔から江戸橋北畔に至る間の地域で、今では附近の大商店が魚河岸の名を冠して僅かに名残を止めてゐるだけだが、流石に食物屋が多いのが目につく。

天正十八年(1590)攝津佃村名主森孫右衛門が江戸に移住し、官許を得て佃島を拓き、江戸(東京)灣内で漁業を營み、之を幕府の膳所に供して、其の残部は市中へ販賣したが、販路次第に増大して、慶長の頃賣場を小田原町に開拓したのが起源である。之が年々盛んになつて、明治・大正に至り、其の範圍は本船・安針・長濱・室の各町に及んだ。(現在は町名が變つて、室町、本町の二つとなつた。)即ち日本一の大魚市場であつた。

大正十二年九月震災で全滅した後、同十二月築地中央市場に移轉した。

舊魚河岸の一部、安針町は今では、室町一丁目になつてゐるが、慶長年中、歸化した蘭人三浦安針が此地を賜ふて居住したので町名も之に依つて生れたのである。

其角宅址

南茅場町三八番地

市電 茅場町下車、深川方面(東)に向へば、道路の左側に「喜可久」と云ふ料理屋がある。

恐らくこの「喜可久」が宅址だらうと云はれてゐて、其角の用ひたと云はれる「寶井」がその支關先にある。

よく、其角又は寶井と結びつけられる藥師堂は、「喜可久」について左折して、百米ばかり先の右側にある。藥師堂は天台宗延曆寺末で、本尊の藥師は惠心僧都の作と傳へ、寛永年間相州相場から此地に移つたと云はれてゐる。

荻生徂徠宅も南茅場町にあつた。其角の句に、「梅が香や、隣は荻生惣右衛門」とあるから、矢張りこの附近であらう。

鎧橋

兜町・茅場町—小網町

市電 茅場町又は蠣殻町下車。

日本橋川に架かる。現にある橋は明治廿一年竣工したものである。

明治初年迄は渡であつて、鎧の渡と呼んでゐた。昔、源義家(江戸砂子には頼義朝臣とある。)が奥州攻めのとき風波の高からぬように鎧を沈め龍神に祈つたと云ひつたへてゐる。因みに、往古は此處も海で入江であつたらしい。

鎧橋南詰から西へ折れると兜橋があり、其の東畔に兜神社がある。兜塚は此處にあると云ふが、はつきりしてゐない。もつとも、それらしい石も見える。文字もなく、豎に細長いと江戸砂子にあるから、多分、社殿に向



つて左にあるのがそれであらう。源義家（砂子には矢張頼義とある）が、日本武尊にならひ、東夷鎮護のため兜を埋めたとも藤原秀郷が平將門の首級を埋めたとも云ふ。兜橋の南に並行してゐるのが海運橋であつて、海賊橋、將監橋、石橋などの舊稱がある。兜町一丁目と江戸橋一丁目をつなぐ。昔、東橋詰めに海賊御奉行、向井將監の屋敷のあつたところから名付け、一方石の橋であつたので石橋と呼んだ。

### 思案橋 小網町—小舟町

市電 蠣殻町下車。西に入る。

思案橋は、小網橋の舊名で、こゝから兜橋、鎧橋、江戸橋、親父橋が一目に見られる。

昔は人形町停留場附近の新和泉町・住吉町・高砂町・浪花町に吉原遊廓があり、それに隣接して芝居町たる堺町・葦屋町があつたので、この橋の上で、吉原へ行かうか、芝居へ行かうかと思案したので斯く名がついたと江戸砂子に見える。

思案橋を渡り、大通へ出で親父橋に至る間の街を照降町と呼んでゐた。今の小舟町、堀江町の邊で、雪駄屋と下駄屋（或は傘と云ふ）と軒をならべてゐた所から俗に斯く云つたのである。

親父橋を渡つて、直ちに左折して一寸行くと葦屋町があり、葦屋町に沿ふて右へ折れると、葦屋町に隣り合つて堺町がある。市村羽左衛門の市村座は葦屋町にあつて、寛永以來開場し、中村勘三郎の中村座は慶長以來開

場してゐた。芝居のことは江戸砂子に詳しく出てゐる。之等劇場は天保年間に淺草猿若町に移された。

### 水天宮 無格社 蠣殻町三丁目

市電 水天宮下車。門前には燈籠形の街燈が並んでゐるから容易に分る。

祭神 天御中主命 安徳天皇 配祀 建禮門院（高倉中宮） 二位尼（平時子）

本社は久留米水天宮で、文政元年（1818）戊寅、當時の久留米藩主有馬頼徳が創めて芝三田の藩邸に分靈を奉祀した。始めは庶民の參詣を許さなかつたが、後には毎月五日に開門して參詣を許された。明治の初年、社殿を赤坂に移し、明治五年、現在の地に移された。參拜者が次第に増すので、遂に毎月一日、五日、十五日の三ケ日に祭を行ひ、四月十日に例祭を行ふことゝなつた。

大正十二年の震災に類焼して一旦淺草の有馬邸に假殿を設けた。現在の社殿は昭和五年三月二十七日竣工した。

末社には火風神社、秋葉神社、高尾神社の三社があり、境内にある紫灘神社は勤王家和泉守眞木正臣を祀る。水天宮前から人形町停留場に至る街路を總稱して人形町と云ふ。此の邊は昔、人形細工の家が立並んでゐたので斯く名付けたと云ふ。松島町、住吉町、元大阪町がこれであつて、水天宮の月次祭には縁日で雑踏を呈する。

### 古衣店址 富澤町

市電 堀留三丁目下車。東北に入れば問屋橋に突き當るが、其の手前の右側の一郭が富澤町である。



富澤町には古着の大市場があつた。古着市は、江戸開府の際より行はれ、二百数十年繼續し、日本橋魚市場、神田多町の菜市と併稱され、その朝市は江戸に名高かつた。明治十四年、神田岩本町に市場が開くに及んで同地に移つた。現在は織物問屋が非常に多い。

落穂集は、盜賊富澤某が幕府の寛典に感じて決心して古着商となり、一方、輩下を指揮して秘密探偵を務めたのがその起源だとしてゐる。富澤を改めて富澤としたといふ。江戸繁昌記、都の手振はその繁昌の光景を記してゐる。

### 小傳馬町牢屋址 小傳馬上町二番地

市電 小傳馬町下車。本石町の方へ進み、直ちに右折すれば、左に小傳馬町鬼子母神があり、右に祖師堂、大師堂、大安樂寺がある。

是等の寺地は、小傳馬町牢屋の址である。

牢屋は始め常磐橋外にあつたのを慶長中にこゝに移したことは、御府内備考、禁令考に見えてゐる。江戸砂子には御入國の砌よりとある。當時は特に一郭を設けて周圍に堀を構へた。總坪數二千六百十八坪餘で、病囚を收容する溜を淺草千束村及び品川に設けた。

幕末勤王の志士は、多く此處に捕はれ辛苦をなめ、悲憤慷慨したことを忘れてはならない。

明治維新に當り南北市政裁判所に屬してゐたが、轉じて東京府の所管となり、同八年五月二十七日、囚徒を市

谷監獄に移し、この牢屋を撤廢した。

再び電車道へ戻り、右(西)へ行き鐵砲町停留場の所を南へ入り、百米ばかり行くと、右が本町三丁目、徳川氏入國以前は此處に梟首場があつたと云ふ。元は本町四丁目であつた。江戸砂子の本町四丁目の條には、「此邊むかしの仕置場といひ傳ふ。」とある。

### 清正公堂 日蓮宗 濱町二丁目

市電 新大橋下車。北に入れば、濱町公園に突き當る。公園の東南部に清正公の堂がある。

日蓮宗熊本本妙寺の別院で加藤清正公を祀り、明治初年から現在の地にある。濱町清正公と云へば可成有名で、縁日は毎月四の日、大祭は六月廿四日で、別に五月五日には勝守が授けられる。

濱町公園の中央にある塔狀の建物は、我建築界の恩人ジョサイア・コンドルを記念するために復興局が昭和三年に建てたもので、コンドルの設計により明治十三年落成した日銀集會所(永代橋畔)が震災で廢滅したので、其の殘材の一部を以て當時の様式に則つて作つたのである。

賀茂眞淵閑居地がまた此の附近であつた。賀茂眞淵は、寛保年間江戸に至り、田安宗武に仕へたが、後田安家を辭して濱町に閑居して庭を田居の如く作つて縣居と稱したことは江戸名所圖會に明らかであるが、果して濱町の何の邊であつたかは、今知ることは出来ない。眞淵は明和六年(1769)七十三歳で歿した。

公園を河岸に出て、北へ進み、濱町河岸の停留場をすぎ、兩國橋の方へ向ふと、左側に矢の倉町、米澤町があ



る。この邊は、大名八人の藏屋敷があつたので「八のくちやしき」と呼んでゐるのが、轉じて矢の倉となり、現在は矢の倉町として名残りを止めてゐる。

新大橋から西へ歩いて、濱町中の橋の停留場の所で、廣い道について左折し、菖蒲橋を渡ると中洲である。この北端が三派で月の名所として名高かつた。江戸砂子には、「新大橋の下、三つ合の川のわかれなり。此所月の名所と云ふべし。一とせ半井卜養を人々ともなひ、八月十六日、月見はべりしに、うたうたふかぶき子の年を問へば、十六と云ふ。こよひしも十六夜、折からおかしと、卜養、美しき人も二八の十六夜月もみつまたあるものでない。」とある。又、三派の名は、遊女高尾の物語に現れてゐる。三派は一名別の淵と呼ぶが、汐と水とが分れるからだと云ふ。中洲から對岸の深川へは中洲の渡があつたが、清洲橋の竣工した結果廢された。(岩見)

三 京 橋 區

西本願寺別院 築地居留地 佃島 石川島 人足寄場址 月島  
采女ヶ原 濱離宮 芝口門址 銀座址 八丁堀 河村瑞軒宅址

西本願寺別院

本願寺派本願寺築地別院 眞宗本願寺派 築地三丁目一番地

市電 築地終點下車。東南に進む、こと約二百米。

元和三年三月准如上人、江戸淺草濱町即ち今の日本橋區濱町二丁目に一字を建立し、江戸海邊坊舎といひ、後濱町坊舎と稱したのを本寺の起原とする。明暦の振袖火事のため今の地に移り、築地御坊と稱した。東叡山寛永寺・三縁山増上寺を兩山といひ、本寺と淺草の東本願寺別院とを併せて、兩寺と呼び、幕府から特別待遇を受けた。寺傳によると、明暦の火災後幕府が八丁堀海灣の洲渚即ち現地を與へたので佃島の門徒及び府下の信徒等が力を發せて之を築成して一萬二千七百廿二坪餘の地を得、萬治元年五月本堂を建て、境内中門外過半の地を三條に區劃し、之に末寺五十八箇寺を置き、延寶二年本堂再建に當り、特許を得て紫宸殿式の構造をなし、堂塔雲に聳え、一大偉觀であつたと云ふ。その後天災地變のため倒れた事が八回あり、その八回目が實に大正十二年の大震火災であつた。今復興建



築中であるが、古代中印度佛教式で、古典的であるが而も新鮮なる東京新風景の一つとなるであらう。本尊は聖德太子の作といはれる阿彌陀如來。その右には親鸞聖人、左には明如上人の像がある。寶物としては太田道灌が江戸城の陣鐘に用ひたと稱せらる釣鐘及び間重兵衛所持の長鐘がある。又大きい釣鐘は山ノ手時ノ鐘の一つであつた市ヶ谷八幡の鐘が、神佛分離後移されたものである。法會は一月の修正會、一月十八日の先師會、春秋彼岸の讚佛會、五月二十一日の宗祖大師降誕會、七月十三日より十六日迄の歡喜會、十一月十一日より十六日迄の報恩講等がある。墓地には畫家酒井抱一・赤穂浪士間新六・河東節の元祖十寸見河東、俳人鯉屋杉風、歌人にして姓氏學者細井貞雄・戯作家爲永春水・俳人立羽不角・畫家小林永濯・同じく瀧和亭・明治時代の閨秀作家樋口一葉・其他清元梅吉・土生玄碩等の墓がある。末寺は前記の如く多數あつたが震災後少數となつた。

こゝから二百米餘の南方にある海軍技術研究所の敷地附近が、樂翁公松平定信が致仕後隱栖地とした、有名な浴恩園の址である。

築地居留地址 築地明石町

市電 築地二丁目又は新富町下車。東南四五百米。

慶應三年十月之を約定し、明治元年十一月十九日に愈、出來たのである。同年十二月六日明石町今の渡場の所に外事々務所が出來て、東京運上所として税關の事をやらした。其頃英國の領事館も出來た。

京橋の繁昌はこゝから起つたといふ。居留地は明治三十二年まで續いた。

廢刀令が發布される迄、外人にとつて最も武士が恐れられたので、居留地でも嚴重に門をたて、武士に限り鑑札を携へねば入れなかつた。

明石町の對岸が佃島で北に石川島、南に月島がある。

佃 島

市電 新佃島下車。西北約三百米。佃ノ渡の東南にあたる。

佃島は寛永圖に三國島とあり、又文龜年間の江戸舊圖に向島と呼んでゐる。

天正年間徳川家康が濱松にゐて京都に上つた時に攝津國多田の御廟及び住吉大神に參詣するのに、神崎川に船がなかつた。而るに佃村の漁父が漁船を出して渡した。其後佃村の漁船は魚を奉つたり、使をしたりして怠りなく仕へたので慶長十八年には海川漁獲の免許に與つた。次いで寛永年間に鐵砲洲の東の干潟百間四方の地を給はり、正保元年二月漁家を立並べて本國佃村の名を採つて佃島と名付けた。この地は白魚に名高く、毎年取つて將軍に奉つた。

昔時境内の藤で有名であつた住吉神社は佃島にあり、由緒ある神社である。これ亦寛永中攝津佃村よりこの地に移つたといふ。

石川島



市電 新佃島下車。北五六百米。佃ノ渡東北にあたる。

昔鑑島と稱した地で今石川島と云ふ。寛永三年に舟手衆石川氏が此島を賜はり、代々こゝに居つたのでこの稱を得たといふ。石川氏が寛政四年に屋敷替をしてから全島人足寄場となつた。

又、昔將軍家光の御時異國から鑑一領を奉つたが、重くて誰も持てなかつた。而るに石川氏の祖は大力だったので是を片手に持つて大樹の御前へ披露したので、感賞に與り此所を宅地に給はつた。鑑を携へた賞とした地であるから鑑島と名付けたといふ。〔江戸名所圖會〕

御府内備考に曰く、「此處は昔わづかの洲なりしが、次第に出洲多くなりしかば、寛政二年長谷川平藏といへる人（御先手にて盜賊火付改を兼ね）建議して、世にある無宿薦被りなどいひて、よる所なくはてはよからぬ事しいづるものを皆集めて、この所に居らしめ、猶洲を築立て一島の如くせり、それより寄場奉行といふものを置かる。その下に從ふものあまたありてこゝを治む。是寛政五年よりはじまれりと。石川島は古名を森島ともいふ。」と。

### 人足寄場址

市電 新佃島下車。北約五百米。佃ノ渡東北。

寛政より明治の初年市ヶ谷刑務所の出来るまで石川島にあつた。舊幕府時代無籍無頼の徒を集めて懲戒し、引取人なく放遣れば又元の如く無宿となるべき者は皆此處に留置し、各自手業を營ましめ、手業のないものは絞油等の役に服せしめた。

### 月 島

市電 月島月島通五丁目・通二丁目下車。渡船は月島渡、カチドキノ渡。

東京灣内新築の島地で、埋立事業は明治十八年に始まり、同二十五年に竣工した。潮干狩・釣魚に適し、月夜に逍遙するのも亦面白い。西濱に立つて一望するならば増上寺の森、愛宕山、濱離宮、品川臺場等の諸景悉く双眸に入り、顧みて東天を望めば、房總の連山雲烟の間に一翠を横抹する。現在は更にその東南に略々同大の埋立地が出来てゐる。

### 采女ヶ原

木挽町五丁目（舊采女町）

市電 三原橋下車。南側。

三原・木挽・采女・萬年の四橋に圍まれたる地域は元馬場であつた。

常に賑かで講釋師・淨瑠璃・其他諸店軒を並べてゐた。享保九年までこの地に松平采女正定基の屋敷があつた故かくの如き名がついたといふ事である。同年正月晦日火災の後屋敷は麴町に移され、同年十二月の頃その跡へ新に馬場を開いたといふ。此所の井を采女の井といふも彼の屋敷の用水であつたからであらう。明治二年市店を開いた。

### 濱離宮 築地六丁目

京 橋 區





市電 木挽町六丁目下車。東南約六百米。

東には洋々たる東京灣を控へて遙に房總の山々を眺め、園内は池を中心として造られた一大林泉であつて幽邃の趣は無比である。

江戸時代にはこの邊を一帶に芝濱と稱してゐた。この附近は寛永の頃までは蘆葦の叢生する所で將軍鷹狩の場所になつてゐたが、四代將軍家綱の時この地凡五萬八千坪を松平綱重に與へ、その下邸とさせた。當時甲府濱屋敷又は海手屋敷と稱した。家宣將軍となるに及んで西丸御屋敷と稱し、後更に濱御殿と改め、寶永四年大修理を加へたのである。中島茶屋・海中茶屋・清水茶屋・觀音堂・庚申堂・大手門橋等は皆この時出來たのである。その後享保九年一月火災のため茶屋を始め悉く烏有に歸し、一時は大に荒廢したが、十一代將軍家齊の時更に修理を加へて燕・茶屋・藤の茶屋・藁の茶屋・御亭山腰掛・松原腰掛・五番堀前腰掛・鹽濱等を造營し、大に面目を改めたが、慶應二年十一月海軍奉行の直轄となり、後明治三年宮内省に屬し、濱離宮と稱せられたものである。又明治二年には延邊館といふ御殿を營まれ外國の皇族貴賓を招待する所に宛てられてゐる。一般には拜觀出來ない。

### 芝口門址 銀座八丁目

市電 銀座七丁目下車。南側。

南金六町即ち今の銀座八丁目の地であるが、いま何にもない。

御府内備考によると、寶永七年二月新橋の内部に郭門を設け、松平飛驒守・田村下總守をして工役を助けしめ、九月に至りて成り、之を芝口門と云ふ。享保九年正月火あり、後復營造せずとある。府内沿革圖に據れば當時西土橋より東出雲町裏河岸まで、一帶に城垣を築き、以て新橋川及び三十間川に沿ひ、門廢するに及びて之を藏地とす。明治五年街衢修治の時皆廢された。

電を通を京橋に向つて進めば、この通は即ち有名な銀座通である。

### 銀座址 銀座通二丁目

市電 銀座二丁目下車。北側。

銀座通二丁目は即ち銀座の址である。慶長十七年に駿府の銀座を此處に移し、兩替町とし、大黒常是幕命を享けて貨幣を鑄造した。寛政十二年蠣殻町に移つた。

明治七年の火事の後で、政府は市街經營の計畫の下に、巨費を投じて銀座一帶に修理を加へ、洋風市街及び店舗を建設した。これが爾來商工の繁榮を加へ、更に大正の大震災の試練を経て現在の容姿を導き出したのである。

なほ今俗稱に残る舊稱尾張町、出雲町、因幡町、加賀町の名は、慶長八年汐入地を埋立てた時にそれぞれ擔任の大名の國名を負はせたものであるといふ。

### 八丁堀



市電 八丁堀下車。

本湊町・八丁堀四丁目の間から、新富町一丁目に至り、京橋川・堀川を併せて八丁堀と稱してゐる。又八丁堀を櫻川といふ。「紫の一本」に寛永年間長さ八丁の堀を開鑿するとあるから、もと外濠に至るまでの稱であつたらしく。

紀の國屋文左衛門の宅は八丁堀四丁目（舊本八丁堀三丁目）にあつた。材木問屋を營業してゐた。千山亭などと稱した所で毎日疊さし七人宛を雇込み、客を迎ふるには新しい筵席を敷換へたといふ。

河村瑞軒宅址 新川一丁目

市電 新川一丁目下車。東側。

瑞軒宅は現在數十戸の民家を含有する宏壯なるものであつた。

彼は紀文と相俟つて成金振りを發揮した。もと伊勢の人で江戸奥羽間の航路を開通し、米穀を廻送して江戸市民を糧食難より救つた。又大阪の安治川を開鑿したのは名高い話である。文祿三年江戸にて歿し、鎌倉建長寺に葬られた。（新井）

四芝區

- 舊新橋停車場址 烏森神社 新錢座址 芝大神宮 江戸開
- 城談判地址 御田八幡神社 高輪大木戸址 泉岳寺 東禪寺 琴平神
- 社 愛宕神社 青松寺 天徳寺 西久保八幡神社 金地院 増上寺
- (大門 三解脱門 大銅鐘 西向觀音 一切藏經輪堂 黒本尊) 徳川家靈廟 (台徳院
- 廟 崇源院靈牌所 文昭院廟 有章院廟) 東照宮 丸山貝塚 丸山五重塔
- 丸山古墳 大久保忠教の墓 瑞聖寺 長壽寺 榎本其角の墓 承教寺
- 鳥取藩池田邸正門 濟海寺 龜塚稻荷の板碑 荻生徂徠の墓 品川臺場

舊新橋停車場址 汐留驛一丁目 汐留驛構内

市電 芝口下車。電車線路に沿つて三原橋方面に向ふこと約五十米、汐留驛西側入口に達する。

舊新橋停車場は不幸大正の震火災に消失して了つたが、往時この邊に現今の電車線路に面して建てられてゐたと云ふ。

即ち、明治五年京濱間の鐵道始めて成り、その開通式には 明治大帝の行幸があつて 勅語を賜ふたが、その



始點たる舊新橋停車場は、爾來東京驛の建設（大正三年十二月落成）に至るまで全國鐵道の首腦驛であつた。その建物は我が國初期の西洋建築の標本とも云ふべきものであつた。而して汐留驛と改稱せられてよりは、貨物驛として、秋葉原驛と並んで東京の關門となつてゐる。

構内には「大日本鐵道發源之地」と云ふ記念柱が残つてゐる。即ち日本鐵道の起源點であつて、當時のプラットホームの一部も保存せられてゐる。なほ舊新橋停車場の支關の階段石、當時用ひられた線路の一部が保存せられてゐるのは喜ばしい限りで、昭和六年同驛が六十周年記念として保存の方法を講ぜられたのだと云ふことである。

烏森神社

村社 烏森町

省線 新橋停車場の西側入口から約五十米歩けば、右側にある。

祭神 倉稻魂命 瓊々杵尊 天鈿女命

大正の震災火災に不幸焼失したが、完全に復興建築が出来上つた。石の鳥居を三つくぐると本殿に達する。

當社は、天正(1573-)の兵燹にかゝつて、古記録等焼失して詳細を傳へない。江戸名所圖會にも「往古よりの鎮座といへども年歴由來共に詳ならず」とある。然し享徳四年(1469)古河公方足利成氏の願文を所藏してゐるのを見ると、徳川氏開府以前の古社であるらしい。後、櫻田神社と合祀せられた。本殿の正面には東郷平八郎の書、烏森神社の額をかけてある。向つて左に神樂殿がある。境内は極めて狭い、寶物には、鰐口・足利成氏の願文、宗近・長船の大刀一振宛を藏し、祭禮は五月五、六兩日に行はれる。

新錢座址

新錢座町

市電 宇田川町下車、海邊に向つて約五十米、右側の方である。

御府内備考に依ると「新錢座は宇田川町の東海手の方松平肥後守屋舖のわきなり、按に寛永日記云十三年初て寛永の新錢を鑄とこの所も此時より建しなるべし。」と記してある。而して引用の改撰江戸志に依れば鳴海兵庫賢信が寛永通寶の錢をこゝで鑄たことが知られる。更に「いつの比廢せしといふはいまだしらせれど、延寶のころはもとより廢せしことしるべし。」と記してゐることを見るその亡びたのは古いことであつて今はその地點を判然知ること出来ぬ。

幕末時代福澤諭吉が慶應義塾を新錢座の地に設け、やがて現在の三田山上へ移したことは餘りにも有名な話である。

芝大神宮

府社 宮本町

市電 大門下車。少し戻つて左折、芝大明神に達する。

祭神 天照大神 豊受姫命

本社はもと増上寺境内飯倉にあつて、飯倉明神と呼ばれたが、今の地に移して修造を加へられたもの



である。この社も大正震災火災に焼失したが、今は復興建築が完成してゐる。

こゝの祭りには、生姜市が立つので有名である。即ち江戸名所圖會には「社の祭例は九月十六日なり。同じ十日より廿一日に至る間參詣群集す。商ひ物多きが中にも藤の花を畫きたる檜割籠および土生姜殊に夥し、故に世俗生姜市又生姜祭とも唱へたり」とあるが、今も九月十一日から廿一日に亙る祭日には、めつち生姜、千木箱を商ふ者が多く、「だらく祭り」と稱して有名である。

### 芝離宮 濱崎町

市電 大門又は省線濱松町驛下車。

もと寛永中(1654)加藤嘉明が徳川氏から與へられ、その後舊小田原藩大久保家の控邸となり、三轉して清水家に移り、更に紀州藩の濱屋敷となつたものである。而して維新後明治四年三月有栖川宮邸となり、同八年八月宮内省で買上げ、同九年二月離宮となつたものである。而して大正十三年二月廿六日攝政宮殿下の御成婚記念として、東京市に下賜せられ、現今は市の恩賜公園となつてゐる。御殿は大正十二年九月一日の震災火災の爲に焼失したがその跡には標柱が立つてゐて良くわかる。しかし庭園は始ど完全に保存されてゐる。

抑本園は元祿年間(1688)當時の老中大久保忠朝が藩地小田原の庭師を招いて經營したもので、江戸時代の代表的且つ典型的の名園である。即ち、廻遊式潮入林泉で壯大なる岩組はないが、地割に苦心の跡が窺はれ、典雅にして氣品の高い點に於いては他の追従を許さない。園内には文政年間(1818)は櫻樹が多かつたが、今は殆ど拾餘本を残すのみである。而して埋立地がなかつた頃は海邊の眺めも良かつたが、今はその面影が失はれるに至つた、建物も現在は舊馬見場を残すのみである。新橋より南金杉、田町に連る一帯の海濱を指して芝浦と云つた。柴濱または本柴浦とも記した。江戸開府以前は即ち芝村の地で蘆荻茂れる海濱であつたと思はれる。しかし今は埋立工事の爲めに風致を殺がれて了つた。とは云へ兩離宮の茂林もあり、折々の風趣又捨て難いものもない。而して大正の震災火災以來、大東京港の計畫が急速に進められ、芝浦には近代的港灣の設備が着々と行はれてゐる。古いものに代つて新しいものが急速に生長しつゝあるのである。

### 江戸開城談判地址

本芝四丁目 池貝鐵工發動機工場内

市電 薩摩原下車。三辻になつて居る。交番の筋向ひ海岸側に池貝鐵工發動機工場がある。此地はもと薩州侯の倉屋敷のあつた所である。大正震災前までは工場の東角附近に西郷南洲・勝海舟會見の地と書いた東京府の立札があつたが、今はない。

慶應四年三月十四日、西郷隆盛と勝安房の兩雄がこゝに會見し、兵火の慘を見ずして、江戸城授受の談判が成立した維新史重要な地である。しかし今は知る人が少い。

なほこの近代的工場の作業場の一部には薩州侯の倉屋敷の土藏の棟木の一部が保存せられてゐる。その參觀を許されたときには、流石に良く保存してあると感嘆した。この工場の裏手は直に東海道線の線路が通じ、更に



埋立地があつて海に接してゐるが、大正初年頃は線路の直ぐ下に海が接してゐた。  
札の辻 田町四丁目市電札の辻の停留場がそれである。三辻になつてゐて、昔はこゝに高札があつた。これが  
下高輪に移つてからは元札の辻と稱してゐたが、それも何時しか略されて、現今の地名で呼ばれるに至つたの  
である。

御田八幡神社 郷社 田町七丁目

市電 田町九丁目下車。札の辻の方へ向つて約二百米、左側にある。

祭神 應神天皇 相殿 天兒屋根命 武内宿禰

社記及び武藏風土記によれば延喜式内古社と傳へられてゐる。三田の總鎮守で、正保(1644)中に三  
田から今の地に遷したと云ふ。現今の社殿は、寛文十三年(1673)竣工のものである。江戸名所圖會  
には「三田の惣鎮守にして、祭る所山城男山八幡宮と同じくして、後一條帝寛仁年間(1017)草創す  
といひ傳ふ。舊地は窪三田にあり云々。正保年間今の地へ移し奉るといへり。此地後は山林にして前  
は東海に臨む故に風光秀美なり。」とある。以て往時の有様を偲ぶに足る。明治五年郷社に列せられ、  
現今祭日は、八月十四、十五の兩日があてられてゐる。

社寶には、同社縁記繪卷・稗田八幡皇大神宮記・八幡宮御縁記・上高輪村檢地水帳控(元祿十年)羅生門禁札  
等がある。

高輪大木戸址 車町

市電 田町九丁目下車。電車線路に沿つて西へ約五十米左手にある。

寶永七年(1710)にこゝに大木戸が設けられた。江戸時代には一町毎に木戸を設けて自身番に開閉せ  
しめたのであるが、こゝは丁度江戸の入口であり、規模の大なるものがあつた。こゝにこの名が起つた  
のであつた。即ち此處で、往來の客は旅装を改め、送迎の者も多くこゝを限りとしたのであつた。も  
と石垣は道路の左右にあつたのであるが、今は僅かに海邊の一方に遺つてゐる。幅約三間、高さ約二  
間、長さ約四間余の石垣が、舊觀を改めず残されて、道路がこれを廻つて設けられてゐるのは、懐し  
い思ひ出をさそふに足る。大正震災後、史蹟として指定せられてゐる。

猶、享和年間(1801)伊能忠敬が東海道測量の折には、こゝを起點としたことは有名である。

泉岳寺 萬松山 曹洞宗 車町

市電 泉岳寺前下車。約五十米にして達する。山門の内外は所謂門前町をなしてゐて、賣店が軒をならべ  
て、義士に因んだ種々の土産物を賣つてゐる。樓門の手前、右側に大石良雄の銅像がある。樓門を潜ると、  
正面が本堂である。

當寺は橋場の總泉寺、愛宕下の青松寺と併せて曹洞宗の江戸三箇寺と呼ばれた大寺であり、下野國大  
中寺末である。江戸名所圖會に依れば「坊舎三字學寮九宇あり。當寺は往古慶長年間台命を奉じて、



門庵宗關和尚外櫻田の地に創建する所の禪刹なり。後寛永十八年辛巳再命ありて、寺を今の地に移したりといふ。本尊釋迦如來は座像二尺計あり。脇士は文珠普賢なり。總門の額萬松山の三大字は華僧閩沙門道霈の書にして庸熙辛酉孟冬上浣と記せり」とある。而して寺内に赤穂義士四十七士の墓があるを以て、あまねく世に知られてゐる。即ち境内には本堂左手に、義士の木像を藏した木像堂、同じくその遺物を藏した遺物館がある。左手から墓地へ向ふ。墓門までの間の右手には、吉良義央の首級を洗つた首洗井戸、及び義商天野屋利兵衛の浮圖がある。墓門は、もと霞ヶ關藝州侯邸の小門である。

墓門を入ると直ぐ右手の柵内に淺野内匠頭及び夫人の墓がある、これは赤穂義士四十七士の墓と共に、史蹟名勝天然記念物保存法により、大正十一年十一月内務大臣に依つて、史蹟に指定せられてゐる。次いで四十七士の墓所に達するが、その入口の左手には維新勤王の土田中正雄の墓がある。彼は「輕き身に重き義をとり國の爲め死する命は何惜からん」と詠んで、獄中に斃れたのであつた。

石段を上ると義士の墓所である。入つて直ぐ左手に、大川源兵衛の墓があり、墓石に「双道喜劍信士薩州産舊宇都宮成高寺現住岱潤建焉」と刻し、墓石の裏の石の端には、「明和四丁亥九月十六日建之」と讀まれる。彼は世に村上喜劍と稱する人、細川家浪人で、京都島原に於いて大石良雄を罵り、後大石等復讐の擧を聞いて、大に恥ぢその墓前に自刃したと云ふことである。

右手の一番奥に大石良雄の墓があり、墓石は次の如く讀まれる。中央に「忠誠院双空淨劍居士」、左右に、「淺野内匠頭家來大石内藏助良雄、元祿十六癸未歲二月四日行年四十五逝」と刻んである。之に對し、左手の一番奥には大石良金の墓があり、正面には「双上樹劍信士」と讀まれ、左右に、「大石主稅良金、行年十六逝」と刻んである。今尙四時香煙の絶えることがない。

なほ、高輪西臺町の高輪御殿(細川侯の下屋敷)、三田の伊太利大使館(松平隱岐守の邸)には、彼等の切腹の遺蹟があると云ふことである。

### 東禪寺

佛日山 臨濟宗妙心寺派 下高輪町

市電 東禪寺前下車。海岸と反對に道路を入つて約百米右折して直ぐ左折すると門に達する。

江戸名所圖會には「總門は海に臨む、此門の額海上禪林の四大字は朝鮮國雪峯の筆なり、頗る世に稱せり」とあつて、昔は海岸も近くて、盛んな寺であつたらしい。慶長十九年(1614)僧嶺南が開創した所で、始は麻布溜池にあつて嶺南庵と云つたが、寛永十三年(1636)この地に移して東禪寺と稱するに至つたものである。江戸名所圖會には「妙心派の禪宗江戸四箇寺の一なり、本尊は釋迦如來、開山は嶺南和尚と號す」とある。本堂は目下新築中である。右手には鐘樓があり、佐野天明住持鑄物師、埼玉山五左衛門藤原峯高作の銘ある鐘がある。

本寺は安政文久頃は外國人の宿寺となり、英國公使館に充てられ、文久元年(1861)浪士の襲撃があり、鴨居



に刀痕を残してゐたと云ふことであるが、今は本堂を改築新造中で其の佛をしのぶよすがもない。寺資には、大應大燈兩國師書二幅・天目山中峰國師の書一幅・一休禪師の書一幅・李崇筆壽老人の像一幅・狩野探幽筆出山佛達磨宋雲黃檗臨濟圖三幅等を藏してゐる。

又當寺は仙臺・岡山・鳥取等諸侯の菩提寺であつて諸侯の墓がある。

又墓地内に大槻玄澤の墓がある。本堂の左手の小門から出て突き當つて右折して墓地に達する。右折してから五十米程上つて、更に右折して四十米程上り、右に曲つて四米にして先生の墓に辿りつく。餘り大きい墓でないから餘程氣を付けないと判らない。しかし、墓は大槻家の墓地として、一劃を占めてゐる。先生の墓は左端にある。正面に磐水大槻先生墓と題し、明治十三年の建設である。玄澤 仙臺藩の醫官で、有名な蘭學者である。天明六年以後常に幕命を奉じて、蘭書の翻譯に従事し、その功績は頗る多い。「解體新書」「還海異聞」「蘭學階梯」等三百餘卷の著書がある。文化十年三月晦日七十一歳で歿した。

右傍には彼の季子で、仙臺藩儒臣であつた大槻磐溪の墓がある。更に其の右傍には有名な「言海」の著者大槻文彦の墓がある。

なほ、伊達侯に仕へた有名な儒者齋藤竹堂の墓もある。

### 琴平神社

府社 琴平町

市電 虎の門下車。飯倉の方へ向つて行けば右側、溜池の方へ向つて行けば左側、何れも五十米位である。

祭神 大物主神 崇徳天皇

西側に石の鳥居がある。入つて左側に神樂殿があり右手に本殿がある、本社は俗に虎門の金毘羅様と云つてゐる。文化年中(1804)に創建せられ、府社に列してゐる。本殿に向つて右側に喜代住稻荷大神が祀られ、その手前には繪馬堂がある。

參詣者が多く、例年一月一日には開運の御札を授ける。祭日は十月十日であるが、毎月一、十、廿日を縁日としてゐる。

### 愛宕神社

無格社 愛宕町

市電 愛宕町下車。西へ愛宕山へ向つて二百米、突き當つて左折約五十米にして、愛宕山の麓に達する。即ち愛宕公園の地である。海拔二十六米突、面積約一六〇アール、東西南の三方が斷崖をなし、打開けて展望がきく。樹木も少なく、明治十九年公園として開かれた。先づ石の大鳥居を潜る。この鳥居の左柱の下の方に測量記號が見られる。これは明治初年内務省地理局で東京市内の高低測量を行つた際、この愛宕山の頂と麓に起點を設け、一は海拔二十六米二三六一、一は海拔六米一三七五と測定した。その折の記號の一つである。これは實に我が國に於ける高低測量の最も古きものである。登るのに三道ある。正面は男坂で、八十六段の頗る急峻な石段であつて、世俗に曲垣平九郎が驕馬で上下したと云ふ。中央に鐵鎖を設けて、登攀の便に供してゐる。女坂は男坂の右手にあつて、稍々緩やかである。北側の新道は勾配が緩い。石段を登り切る



と、愛宕神社である。

祭神

火産靈命

罔象女神

日本武尊

山頂は平坦で、そこに愛宕神社が祀られてゐる。慶長年中(1596—)に創建せられたのであるが、大正震火災で社殿悉く焼失し、目下復興建築にとりかゝつてゐる。當社は初日の出、六月廿四日の千日参り、七月廿六日の月待には参詣者で賑ふ。而して暮の廿三四日の歳の市は市中最後の歳の市として有名であり、賑やかである。九月廿四日を祭日としてゐる。

こゝから東を望めば、東京灣の景趣を一眸の中に收め得て、頗る景勝の地である。されば江戸名所圖會にも「抑當山は懸崖壁立して空を凌ぎ、八十六級の石階は疊々として雲をさすが如く聳然たり、山頂は松柏鬱茂し、夏日といへどもこゝに登れば涼風凜々として、さながら炎暑を忘る。見落せば三條九陌の萬戸千門の雲をつらねて所せまき、海水は渺焉とひらけて千里の風光を貯へたる美景の地なり。」とある。

なほ、社殿の左側には、東京中央放送局(J O A K)があつて、アンテナが中空高く聳えてゐる。

### 青松寺

萬年山 曹洞宗 愛宕町一丁目

市電 御成門下車。線路に沿ひ廣町方面へ五十米、右折して約五十米、左側にある。

本寺も大正震火災に祝融の災にかゝつたが、本堂は立派に復興建築が出来上つて、大伽藍が高く聳えてゐる。當寺は曹洞宗の禪刹で、江戸三ヶ寺の隨一、徳川入國前から存在してゐた。文明(1469—)頃の創建で、慶長年中までは貝塚の地にあつたが、後この地に移されたものである。愛宕山の南にあつて居り、境内は廣く、後は山にかこまれて樹木が多い。本尊は釋迦如來、開山は雲崗俊徳大和尚である。

本堂の右手には鐘樓があり、寛文五乙巳四月吉日の銘ある鐘がかゝつてゐる。境内には井上金峨の墓がある。即ち本堂の左側の坂道を上つて、本堂の裏山に上り、新しい墓地の塀に沿つて廻るとその端に柵を廻して、井上金峨の家がある。墓は府の史蹟として假指定せられてゐる。角石の正面には隷書を以て「金峨井先生墓」と題せられ、三面には銘文がある。金峨は江戸の人で、折衷學を高唱し、著書は頗る多い。門下に、山本北山、龜田鵬齋等の著名な學者を出し天明四年六月十六日五十二歳で歿した。

### 天徳寺

光明山和合院 淨土宗 西久保巴町

市電 神谷町下車。西久保巴町方面へ向つて約二百米、右折して、愛宕山のトンネルの前で右折すると、直ぐ右側である。

大正震火災に焼けて、目下假建築である。天文二年(1533)僧稱念が創建して、天地庵と號した。舊地は江戸城西丸の邊であつたと云ふ。天正十三年(1585)霞ヶ關に移り、慶長十六年(1611)この地に移つた。

江戸砂子には「中興十二世晁譽上人は、智徳すぐれ、大名高家の崇敬あつく、寺中榮え、寺領五十石を有した



巨利」とあり、又江戸名所圖會には「花洛智恩院に屬す、淨家江戸四箇の一にして、紫衣の地たり、支院十七字あり、本尊阿彌陀如來は行基大士の作、開山は三蓮社縁譽稱念上人」と記してあつて、仲々盛んな寺であつたことが知られる。

天徳寺を出て、トンネルへ通する道を少し戻つて右折する。五十米程で、右側に榮閑院がある。天徳寺の子院で同じく假本堂である。本堂の裏手に杉田玄白の墓があり、柵を廻らし、丁寧に保護してある。府の假指定史蹟なることは、今更云ふまでもない。角石の正面に隷書を以て「九幸櫛田先生之墓」と題し、左側に「文化十四丁丑四月十七日歿」と刻んである。

玄白は代々小濱藩の藩醫であつた。彼は十七歳の時より、幕府の醫官西元哲に就いて外科の術を學んだ。偶々江戸に來た和蘭人から人身内景圖を得て、漢説と異なるを疑ひ、明和八年(1771)江戸小塚原に於て刑死の屍を解剖してその精確なることに驚嘆し、同志と共に之を翻譯せんことを謀つた。即ち中津藩の醫師前野良澤を會主として、桂川甫周・中川淳庵等々と三年半を費して「解體新書」を譯了したのであつた。これ、我が國に於ける西洋書翻譯の嚆矢である。而して之を刊行、幕府・諸家に献じた。門人數百に達し、著書も多い。文化十四年四月十七日八十五歳で歿した。なほ蘭學事始(杉田玄白著)(岩波文庫)参照。

### 西久保八幡神社 西久保八幡町

市電 飯倉一丁目下車。直ぐ前に鳥居がある。可成り急な石段を登ると本殿に達する。

祭神 應神天皇 足仲彦尊 氣長足姫尊

慶長五年(1600)霞ヶ關からこの地に移つたもので、社殿は寛永年中造營のものと云はれてゐる。

本殿の右手には人麿神社がある。境内は割合に廣く、樹木に富み、且つ高臺であるので展望もきく、祭日は八月十五日である。

### 金地院

勝林山 臨濟宗南禪寺派 芝公園二十一號地

市電 廣町下車。南に向つて坂を上り右折して和蘭公使館の前を過ぎて突き當りが金地院である。約二百米

當寺は慶長十三年(1608)京都南禪寺金地院の崇傳が、徳川家康に召され、その信任を受けて幕政の樞機に參し、駿府城内に金地院をたて、住したのがこの寺のはじめである。その後家康の薨するに及び、江戸城内の楓山に移し、更に寛永十五年(1638)崇傳寂するや、現在の地に轉じたものである。

舊幕の頃は寺領七百石を有して五山派の僧録所であつて、仲々盛んであつた。なほ黒衣の宰相金地院崇傳(辻善之助氏「續日本佛教史の研究」所收)参照。

芝公園内金地院墓地内に堀杏庵墓がある。

墓地の略々中央にある。正面に「杏庵正意法眼」と刻み、裏面に寛永十九年壬午年十一月廿日とある。墓は東京府の假指定史蹟となつてゐる。杏庵は近江の人、儒醫で、藤原惺窩に學び、林羅山・松永尺五・那波活所とともに四天王の稱があつた。尾州侯に仕へたが、後幕命を奉じて、諸家の系圖を編修した。別に自ら武家系圖を



も撰したこともある。寛永十九年十一月二日卒した。年五十八。なほ堀杏庵と相對して、有名な相馬大作之墓がある。

増上寺

三縁山 廣澤院 淨土宗 芝公園二號地

市電 増上寺前下車。

本寺は淨土宗關東總本山で、創建年代は詳かでない。眞言宗であつたが、北朝至徳二年(1385)聖聰(西譽上人)が淨土宗に改めた。天正十一年(1583)存應(源譽上人)の時に徳川氏一門の菩提寺と定められ、次いで慶長三年(1598)現今の地に巨利を構へることとなつた。屢々火災にかゝつて、當時の建築物は殆ど焼失し、只僅かに三解脱門を残すに過ぎない。現在の本堂は大正拾年の建築にかゝるものである。

嘗ては徳川氏の歸依深く、方丈領千五百石、隱居料二百石、靈舍利九千四十石を附せられてゐた。現今も仲々盛んである。

寺寶のうち、法然上人繪傳二卷(傳土佐吉光筆)、及び大藏經が國寶になつてゐるが、その他に阿彌陀經(後伏見天皇宸筆)、觀無量壽經(後鳥羽天皇宸筆)、阿彌陀經(後陽成天皇宸筆)、五百羅漢百幅(狩野一信筆)等がある。

大門は三解脱門前約二町前にある。片門前町に出でんとする所である。

三解脱門は寺前正面にあつて東面してゐる。慶長十年(1605)創建、寛永十年(1633)改造せられ、元祿以後屢々修繕を加へられて現在に至つてゐる。五間三戸の丹塗樓門で兩袖に山樓を附してゐる。江戸時代初期の所謂禪宗三門風を襲用したもので、結構壯麗規模雄大、關東第一の大樓門であり、同時に市内最古の建築物となつてゐる。

大銅鐘は三門を入つて右手にある。江戸名所圖會には「鐘の厚さ尺餘、口の渡り五尺八寸ばかり高さ一丈程あり銘曰新鑄洪鐘掛三縁山増上寺之樓二十六世森譽上人歷天和尙延寶元癸丑年十一月十四日神谷長五郎平直重須田次郎太郎源祇、寛鑄工椎名伊豫吉寛云々」とある。

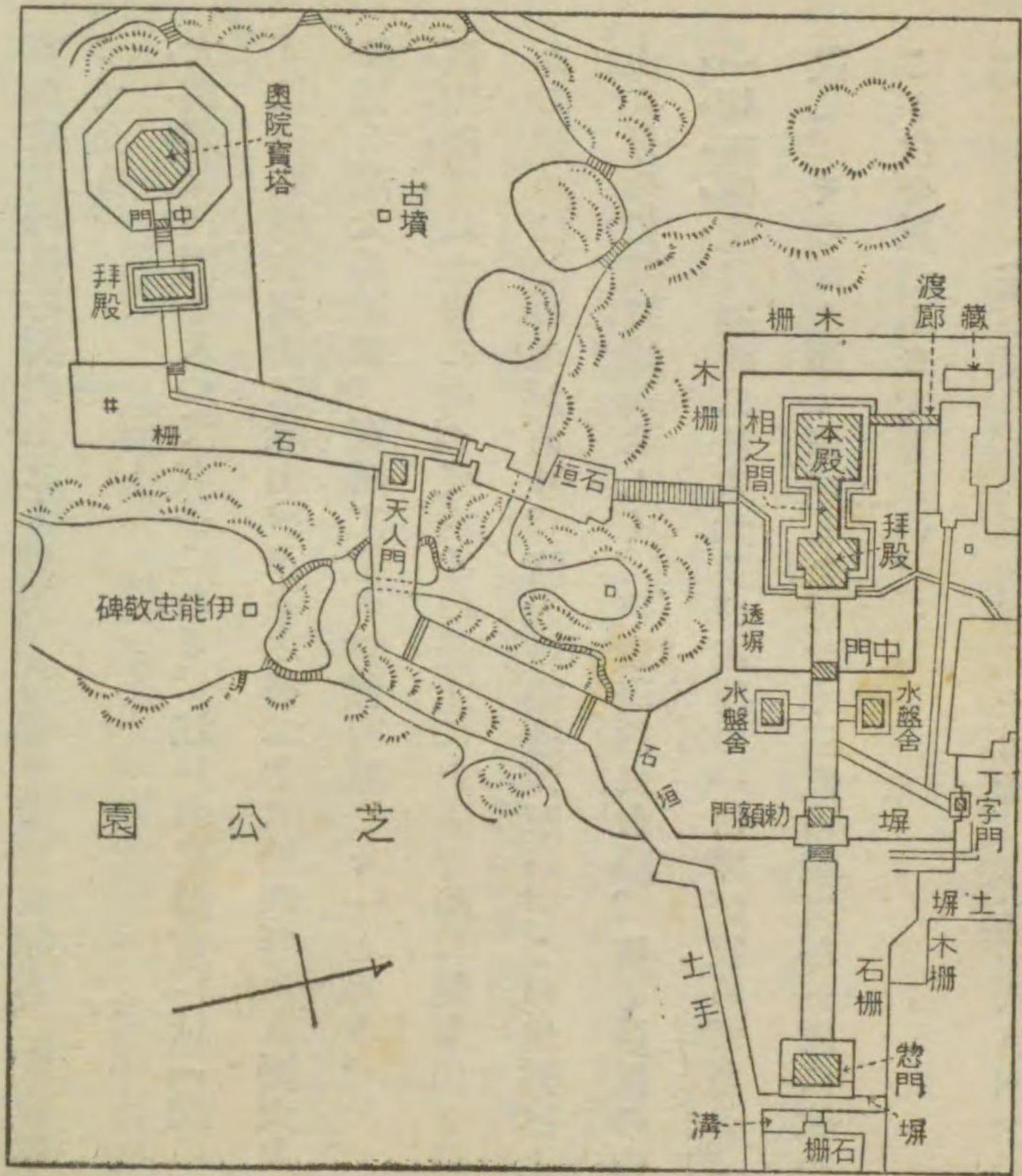
西向觀音は本堂に向つて右手の丘上にある。俗に觀音山と云つてゐる。長七尺餘の正觀音の石像で西に面してゐる爲めにこの名があり、諸人の崇敬が厚い。この地點は上代の古墳で石棺の一部が露はれてゐる。而して山上よりの展望は素晴らしく、東京灣内は勿論、遠く房總の山々も見渡すことが出来る。

一切經輪堂は經藏には宋元及び高麗の一切經が收めてある。慶長十年始めてこれを建て、天和元年(1681)改築し、その後も屢々修理した。かく三部の藏經を一庫に收めてあるのは全國に比類がない。國寶になつてゐることは今更云ふまでもない。

宋版	五千三百五十六册	五千八百四十七卷
大藏經 元版	五千三百八十六册	五千九百三十一卷
高麗版	千二百五十九册	六千五百三十一卷



而して宋版は近江菅山寺、元版は伊豆修善寺、高麗版は大和圓成寺の有であつたものを家康が寄進したものと云ふことである。



(る據に圖の製作氏進之良谷阪)圖面平廟靈院德台

黒本尊は本堂の背後にある。無量壽如來を安置してある。江戸名所圖會には「本尊阿彌陀如來の像は惠心僧都の作なり、御長二尺六寸相向圓備にして生身の佛體に向ふが如し、世人呼んで黒本尊と稱せり」と記してゐる。

徳川家靈廟 芝公園内

徳川家靈廟は南廟と北廟とに分れ、南廟には二代台徳院と二代夫人崇源院の靈廟があり、北廟には六代文昭院並びに七代有章院の靈廟がある。此等四つ

の廟所は、何れも芝公園の東南の小高き丘陵を背景として、東面して建ち、大體南北に長く一列に配列せられてゐる。國寶に指定せられたものは次の如く多數に上つてゐる。

- 二十六棟 台徳院
- 十二棟 崇源院、合祀廟共
- 九十六棟
  - 二十八棟
  - 三十八棟 文昭院、合祀廟共
  - 六十八棟 有章院、合廟祀共
- 三十棟
- 台徳院廟 芝公園一號地

増上寺の南側にある。徳川二代將軍秀忠の廟所で、三代將軍家光が父台徳院秀忠のために、寛永九年(1632)に工を起して、約半ヶ年にして竣工したものである。その地域に前區に靈屋、後區に奥院があり、その間は參道で連結して居る。本殿(桁行五間、梁間五間、重層、屋根入母屋造、銅板葺)相之間(桁行四間、梁間一間、單層、屋根兩下造、銅板葺)拜殿(桁行五間、梁間三間、單層、屋根入母屋造)で相之間重層殿式の權現造である。而してその設計意匠は、建築群全體の様式取扱ひに一機軸を出してゐることは注意すべく、その裝飾は華麗を極めてゐる。その他に渡廊、中門透塀、左右水盤舎、勅額門、惣門、丁字門がこれに附屬してゐる。奥院には寶塔(木造)及び同覆屋、中門、玉垣、拜殿、御成門等がある。

崇源院靈牌所 芝公園一號地及び三號地

台徳院廟の隣にあつて、秀忠夫人の靈屋、正保四年(1641)入佛供養が行はれたもの、本殿(桁行五間、梁間五間、重層、屋根入母屋造、銅板葺)相之間、拜殿より成り、所謂權現造である。渡廊、中門、透塀がこれに附屬し、寶塔(石造八角圓堂形)唐門、北側の三號地にある。猶、天英院(家宣夫人)寶塔(石造八角圓堂形)、



廣大院(家齊夫人)、寶塔(石造八角堂形)、桂昌院(綱吉母)寶塔(銅寶塔)、月光院(家繼母)寶塔(石寶塔)が合祀せられてゐる。

文昭院廟 芝公園三號地

増上寺の北側にある。徳川六代將軍家宣の廟所で、正徳三年(1713)の建築である。本殿(桁行三間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅板葺)相五間(桁行四間、梁間二間、單層、屋根兩下造、銅板葺)拜殿(桁行七間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅板葺)の相之間單層式の權現造であつて、前廊、中門、左右廊、渡廊内透塀、仕切門、鐘樓、井戸屋形、水盤舎、勅額門、外透塀、二天門、がこれに具備してゐる。その後方には寶塔(銅寶塔)中門、波板塀、拜殿、前廊、唐門、透塀を具へた墓所がある。特にその建築裝飾は江戸時代の技巧の精を發揮してゐるのは注意すべきである。而して文昭院寶塔に並んで、愼徳院(十二代家慶)寶塔(石寶塔)、昭徳院(十四代家茂)寶塔(石寶塔)、靜寛院宮(家茂夫人)寶塔(銅寶塔)が合祀せられてゐる。有章院廟 芝公園三號地

文昭院廟の北にある。七代將軍家繼の廟所で享保二年(1717)の造營、その構造様式全體は略々文昭院廟と等しいが稍々簡素である。愼信院(九代家重)寶塔が合祀せられてゐる。

なほ九代將軍靈廟内には名木塗羅双樹がある。周圍六尺五寸、高さ二丈五尺、地上四尺より幹は分れて枝となり、しかも各枝は相合してまた密着し、所々環狀を呈してゐる。枝條多く枝張もよい。樹齡約百五十年餘と曰はれて居り國內諸大名が徳川將軍家に献上した名木の一つである。

なほ詳細は「芝徳川家靈廟附權現造について」(阪谷良之進氏)(建築雜誌 昭七・六)を参照。

東照宮 郷社 芝公園一號地

芝園橋下車。増上寺の方へ向つて約二百米、左側にある。丁度公園の南部、丸山の東麓に當つてゐる。

祭神 徳川家康

社殿は寛永十八年(1641)造營、嘗て安國殿と稱したが、明治六年東照宮と改め郷社に列せられた。安置せる木像は、家康が自ら命じて彫刻せしめたものと云ふことである。本殿(桁行五間、梁間五間、單層、屋根入母屋造、銅板葺)は一種の靈廟建築で國寶となつてゐる。

境内、拜殿の右手、社務所の前には、徳川三代將軍家光が手植のものと傳へられてゐる公孫樹がある。周圍二丈、高さ五丈、幹は地上二丈の所で二本に分れてゐる。もと高さ八丈あつたが、枝の頭を切つたために短くなり小枝が派生してゐる。樹齡約三百年、今なほ元氣に繁茂してゐる。昭和五年に天然記念物に指定せられた。

丸山貝塚 芝公園一號地

東照宮背後の地の高丘を丸山の地と云ふ。東南麓の梅林の處にある。先住民の石器時代の遺蹟で貝殻に交つて、當時の土器の破片及び獸骨等が出たことがあるが、その殻は何れも鹼水産貝類のものであるから、古代に於いては、尙ほ海濱に近かつたことと思はれる。

丸山五重塔 芝公園一號地



丸山瓢形古墳の西南隅にあつて古墳より勿論低い處にある。方三間、朱塗の五重塔である。もとは台徳廟院に屬してゐた。承應年中(1652)酒井雅樂頭の創建にかゝり、文化年中(1804)火災にかゝつて再建した。今は周圍に立派な柵を設けて保護し、市の管理となつてゐる。

丸山古墳 芝公園一號地

丸山五重塔の一段上にある。瓢形墳である。丘陵の東南の突端に近い所に築營せられて、略々南北に横はり、規模壯大、中軸の長さ百米、前方部の高さ六米、後圓部の高さは十米ある。而してこの後圓部に伊能忠敬記念碑があるのである。

明治廿一年頃この古墳の周圍の土中から埴輪破片等が発見せられた。この他に圓墳が約十箇あるが、これらは陪塚とも見られ、瓢形墳の西方及び北方に散在し、何れも直徑二十米を超えない。此等の内部からは、齋瓮土器、直刀、鎗身、小刀子、鐵鏃、骨製鏃、勾玉、管玉などの玉類、金環、銅製劍、馬具金具、等の諸遺物、外部からは埴輪圓筒、土偶等の破片が発見せられた。これ等は何れも東京帝國大學理學部人類學教室に保存せられてゐる。而して丸山古墳は府の假指定史蹟となつてゐることは今更云ふまでもあるまい。丸山の頂上に伊能忠敬碑がある。櫻樹楓葉が多く、その間から遙かに品海を臨むことを得て、眺望の地である。伊能忠敬の碑は明治廿二年四月十三日東京地理學協會に依つて建設せられたオベリスク形の銅碑である。碑面には「贈正四位伊能忠敬先生測地遺功表」と讀まれる。碑の内部には忠敬の使用した測量器械一式を藏してゐると云ふことである。

忠敬は早くより星學を好んだが、寛政六年(1796)江戸に出て、高橋作左衛門至時の門に入つて、西洋曆法を學び、殊に測量の術に精通するに至つた。幕命によつて、寛政十二年(1798)より前後十七年を費して、日本輿地實測圖を完成した。その測量の精確なりしことは餘りにも有名である。文政四年九月卒した。年七十、下谷清島町源空寺に葬られた。

大久保忠敬の墓 三光町立行寺内

市電 名光坂下で下車。北へ向つて約百米。左側に立行寺がある。本寺は智光山と號し、法華宗京都本禪寺末で開山は僧日通。寛永七年(1650)麻布市兵衛町に創建せられたが、寛文八年(1668)に此地へ移された門を入ると、正面に本堂があり、それと並んで左手に毘沙門堂があつて、その前には假蓋松がある。毘沙門堂の左手が墓地になつてゐて、大久保忠敬の墓はすぐわかる。

墓は寶篋印塔形で中央に「了眞院殿日清靈位」と題し、左に寛永拾六曆二月二十九日と刻んである。府の假指定史蹟となつてゐる。

忠敬は彦左衛門と稱し、徳川氏創業の功臣であつた。一旦沼津の地二萬三千石に封ぜられたが、故あつてこれを除かれ、後三千石を賜ふて旗本となつたが、彼は無冠の大宰相の風があつた。その奇矯な逸事は多く人口に膾炙してゐる所である。寛永十六年二月晦日八十歳で歿した。猶後方に五輪塔があるが、これは一心太助の墓である。



瑞聖寺

紫雲山 黄蘗宗 白金臺町一丁目

市電 日吉坂上で下車。線路に沿つて西へ五十米、二つ目の横町を左折、五十米にして達する。

同宗東京宗務院である。寛文十年(1670)藏經開板の大業を成した鐵牛が創立する所であるが、木菴を請して開山とし、鐵牛は第二世となつてゐる。本堂は流石に大きい、荒廢して昔日の佛はない。

長壽寺

高野寺 眞言宗高野派 二本榎二丁目

市電 二本榎で下車。東へ向つて坂を上り切つて右折、左側、高輪警察署の隣である。初め中之郷瓦町にあつたが、後此地に移した。

俗に高野寺と云ひ、この方がわかりよい。境内に三鈷松と云ふ名木があるが、今は枯れて空しく殘骸を止めてゐる感が深い。本堂の右手に鐘樓があり、延寶五年(1687)の鐘銘ある鐘がある。

榎本其角の墓

二本榎町 上行寺内

市電 二本榎下車。東へ向つて坂を上り左折、約五十米にして、左側に上行寺がある。御府内備考によると昔此寺の門前の左右に大塚が二基があり、その塚の上に老榎二株を栽ゑて一里塚とした。これから町名が起つたと云ふことである。しかし元祿十五年(1708)火災のために灰燼に歸して了ひ、今は跡方もない。門を入り、本堂に突き當つて、右手の坂を下り切つた墓地の入口に、榎本其角の墓がある。

井を廻つて東順その他一族の墓と共にあつて、「妙法蓮華經喜覺」と題しその左右に「寶永□年□□□十日」と讀まれる。側に雅致ある「寶井其角墓」と云ふ碑がある。此の墓は東京府の指定史蹟となつてゐる。

彼は別號を寶晉齋また狂雷堂と云ひ、源助と通稱した。元祿時代の有名な俳諧師で、芭蕉に師事し、所謂蕉門十哲の隨一に推されてゐる。寶永四年(1707)二月三十日四十七歳で歿した。

同じく上行寺内に桂川甫周の墓がある。墓地の右手の方にあつて、府の指定史蹟に編入せられてゐる。甫周は幕府の醫官として有名であり、寛政五年幕府我澤民幸太夫、磯吉等を江戸に召すや、命によつて其の見聞する所の風俗制度の梗概を訊問して「北棧聞略」を著した。その他に「魯西亞志」「魯西亞記」等の譯書がある。文化六年、年五十九で歿した。

猶同寺の墓地の一番奥には舊幕府將棋所宗匠三代目七段の名手大橋宗桂の墓がある。その墓石は將棋の駒形で中央に「妙法蓮經宗桂日將靈」と刻み、左右に萬治元年三年庚子歲九月二十三日と刻んである。この墓も亦、府の假指定史蹟となつてゐる。

承教寺

日蓮宗本門寺派 二本榎一丁目

市電 二本榎下車。東へ向つて坂を上り左折、行くこと約二百米弱にして、右側にある。

日蓮宗本門寺の觸頭で、もと西久保にあつたが、承應二年(1653)この地に移つたものである。開山は僧日圓。寺内に英一蝶の墓があるので俗に一蝶寺とも云はれてゐる。



仁王門を入つて、本堂に向つて左側に英一蝶の墓がある。草體を以て正面に「北窓翁一蝶墳」と題し、左側面には「まさきはすきよの業の色とりもありとや月のうす墨の空 英一蝶書」と刻し、右側面には「安政二年乙卯十月二日江戸大震祖君墓碣斷碎謹模舊樣再建之是日實爲百五十年忌辰不勝悲慕感愴之至也 明治六年一月十三日 六世孫 一蜻識」と讀まれる。この墓は勿論、府の假指定史蹟となつてゐる。

英一蝶、姓は多賀、名は信香、承應元年大阪に生れた。初め狩野守信に學んだが、後一派を開いた畫家である。繪畫をもつて朝事を諷し、幕府の忌諱にふれて、三宅島に遠謫せられた。島に駐ること十二年、寶永六年許されて江戸に歸つた。俳諧をよくし其角とも交友があつた。墓石に刻んである句は、彼の辭世の句である。

### 鳥取藩池田邸正門

高輪西臺町

市電 伊皿子坂上下車。二本榎方面へ向つて約五十米、右側舊高輪御殿の正門である。現在は周圍に柵を廻らして保護してゐる。

此地もと熊本藩主細川侯の藩邸であつたが、維新の際、その邸門を毀ち、維新後丸の内大名小路にあつた因幡藩（池田侯）邸の正門を移したものである。左右に唐破風造の兩出番所と兩潜門とを有する構造で、その莊重雄麗なる舊態を依然として存してゐる。十萬石以上の諸侯でなければ建てることの出来ない、格式あるものである。

### 濟海寺

周光山長壽院 淨土宗 三田臺町一丁目

市電 伊皿子坂上下車し、聖坂方面へ約百五十米、華頂宮邸の隣である。

江戸名所圖會に「上古竹柴寺と號して巍々たる眞言の古刹なりしが中古荒廢に逮ぶ。依て法譽上人念無和尚中興す。」とあつて、古刹なることが知られる。本堂には阿彌陀如來を本尊としてゐるが、更に本堂の左手に當つて龜塚正觀音像が安置されてゐる。當守は嘗つて佛國公使館があつたこともある。

更級日記に「今は武藏の國になりぬ。ことになかしき所も見えず。はまもすなごしろくなどもなくこひちのやうにて、むらさき生ふときく野も、あし萩のみたかく生ひしげりて、中をわけ行くに、たけしほといふ寺あり」とある。境内は榎樺等の老樹巨木蒼蒼としてゐる。本堂の裏手は眺望に富んで居り、江戸名所圖會にも「當時庭中の眺望は絶景なり。房總の群山眼下にありて雅趣すくならず。朝夕に漂ふ釣舟は沖に小さく暮て數點の漁火波を焼かと疑はる。群芳發して綠蔭深く風露爽にして、氷霜潔し。四時に觀をあらためて風人の眼を凝しむる一勝地なり。月の岬と云ふも此邊の惣名なり。」とあつて、眺望の地なることが知られる。しかし山門なく、唯僅かに鐵門があつて、何となく時世の推移を感じしめる。

### 龜塚稻荷の板碑

三田功運町

市電三田三丁目下車。北へ入つて、西へ聖坂を上り切らうとする右側にある。約二百米、石段を上つて右手に「かち塚神」と建札にかいてあるところにある。

凡て五基あり、高さ三十糎許りのものが三基、二十四糎許りのもの二基である。前者は正和二年(1313)



文永二年(1226)延文六年(1361)の年號のみが僅かに見られるが、後者はいづれも不明である。

三田功運町功運寺内には大岡忠相の墓があつたのであるが、今は寺が中野へ移轉してその跡は、住宅地となり跡方もない。大岡越前守として、あれほど有名でありながら、史蹟として残らず、滅んで行くのは有爲轉變の世とは云ふものゝ感慨無量である。(中野の項参照)

### 荻生徂徠の墓 三田豊岡町 長松寺内

市電 魚籃坂下で下車。豊岡町方面へ向つて約五十米、右側に長松寺がある。山門を入り、石段を登つて、左手の墓地の奥の方にある。

三重の台石上に長方形圓頂の竿石を置き正面に隸書を以て「徂徠物先生之墓」と題し、裏面には元文四年門人藤忠撰の銘文がある。墓は府の假指定史蹟となつてゐる。

徂徠、姓は物部、名は雙松、字は茂卿、一に護園と號し、通稱は惣右衛門と云つた。父は官醫であつたが、彼は幼時より學に勵み、柳澤吉保に優遇せられた。復古學を唱へて、一世を風靡し、その門下よりは太宰春臺、服部南郭等の俊秀を出した。日本橋茅場町に住んでゐた。享保十三年正月十九日六十三歳で歿した。著書は數十種に上るが、「政談」は殊に有名である。

市電魚籃坂下から豊岡町方面へ約二百米、東横乗合バスの停留場豊岡町の右側の坂を上つて直ぐ右折する。約五十米にして左側が明福寺であるが、こゝに片山兼山の墓がある。山門から入つて、本堂の裏手が墓地に

なつてゐる。一番奥の左手の方にある。「兼山先生之墓」と題してある。兼山は上野の人である。博く漢宋の學をきはめて折衷の學を唱へた。著書は「古文孝經標註」以下數十卷ある。天明二年三月廿九日五十三歳で歿した。猶之と並んで、兼山の高弟萩原大麓の墓がある。(以上 佐治)

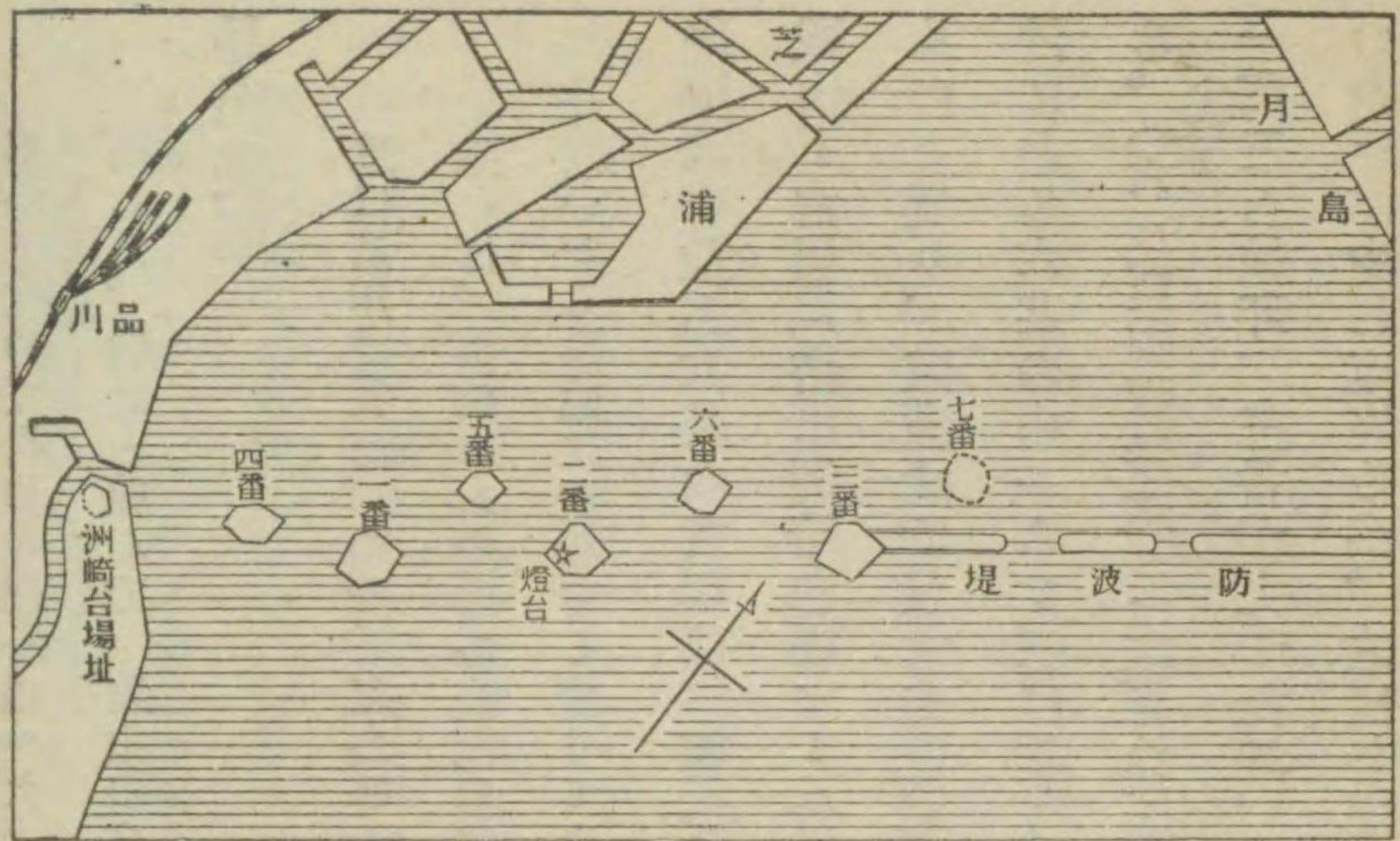
### 品川臺場

夏は品川、芝浦、兩國、月島等からお臺場沖海水浴行きの舟がある(賃金三十錢位)。品川八ッ山下附近から乗れば、全部のお臺場を概観出来る。三番臺場は市の公園として常に開放されてゐるが、船は常設のものではないから晝段は賃船でも借りて出掛けるがよからう。

品川灣に並ぶ六基の台場は、西から四・一・五・二・六・三の順で、品川町の東端獵師町、洲崎にあつた御殿山下台場(俗に洲崎台場)と合せて七基、幕府海防の遺跡として名高く、その様式と目的が従來のものと同じ、歐洲式で且大砲を用ふることを主眼とした對外的のものである點に於て注目し値する。沖にある六基の中一・二・三は稍々沖にあり、四・五・六はそれらの間に在つて稍々内に一列を爲してゐる。(六八頁圖版参照)三番及び洲崎台場は五角、他は全部六角形で、面積は最大の一・二番が同大で一萬三百餘坪、三番が九千餘坪、最小の五・六番が夫々五千七百餘坪及び五千四百餘坪で、各台場はその向きが少し宛異なるが、之は各面の組合せにより有らゆる方向を砲撃し得る爲であるといふ。構造は何れも大體同様であるから、東京市の公園として開放されてゐる三番を例に説明する。(口繪寫眞及び



六九頁圖版参照)凡て外面は水面上高さ平均四間餘の石垣を疊み、その上部に幅二尺程石が全周に突出



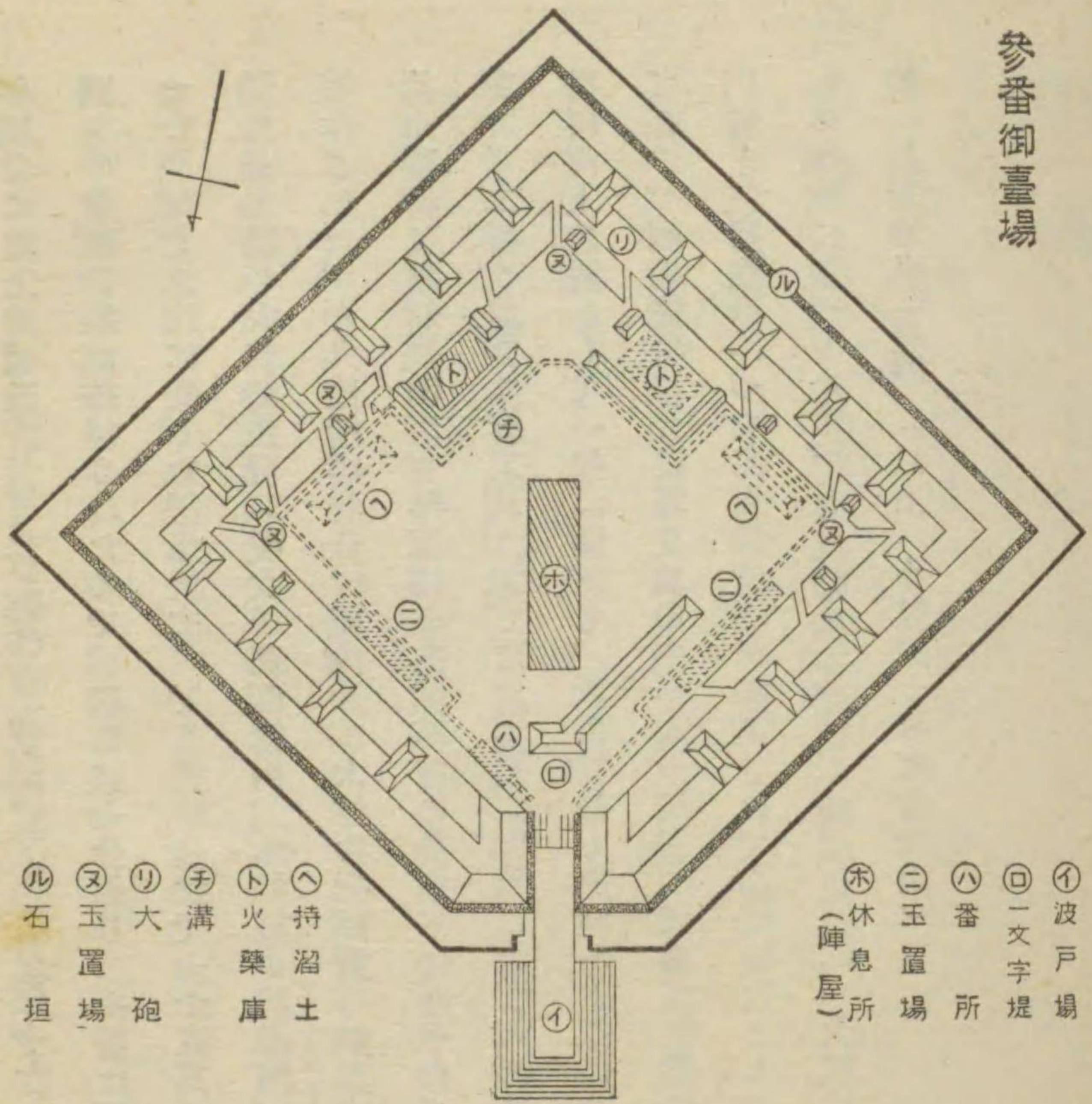
品川臺場

し、敵の攀ち登るのを防いでゐる。之は幕末築城法の一特徴で、純日本式のものには見られないといふ。入口は江戸に面し、嚴重な柵門を設け、その正面には一文字堤又は塚と呼ぶ土壘がある。之は敵が後正面に廻り中を見透して砲撃する場合を豫想した防壘である。陸から見れば渺乎たる浮島の如く見えるお台場も、一步中へ入つて見ると、その規模の宏大複雑なこと驚くばかりで、一見平に見える中央部も實は大部凹んでゐて、その中に休息所(所謂陣屋)、火薬庫、玉置場等の重要建物を保護してゐる。周囲は石垣の上高さ約一間半幅十餘間の堤を築き、更にその上に七八間置きに玉除けの土壘を築いて全部を芝で被ひ、その間に二三門宛の大筒を配置した。今も正面突端に近く、二門の混泥土製擬砲が据ゑられてゐる。

引き續く外船の來航に神經を尖らせ切つた幕府は嘉永六年(一八二四)米艦の來航に異常なショックを感じ、遂に

先年來近海防禦に關し屢々建議した伊豆菰山の代官江川太郎左衛門をして、若年寄本多越中守と共に江戸灣沿岸一帯を檢分せしめ、その意見を徵するに至つた。その復命書はその議論の詳細なこと、江戸灣防備上エボック、メイキンクな點に於て重視すべきもので、第一に軍船製造の急を説き、江戸灣防禦には富津觀音崎に臺場及び海堡を築くを最善とし、品川灣に臺場を築くを次善の策としてゐる。種々異論も出たらしいが、結局財政、技術の上から急に充分な施設を爲し得ずして、當時も不完全とは知り乍ら人心鎮撫等の政策をも含む應急的處置として、遂に品川臺場築造となつた。

參番御臺場



- ① 波戸場
- ② 一文字堤
- ③ 番所
- ④ 玉置場
- ⑤ 休息所(陣屋)
- ⑥ 持溜土
- ⑦ 火薬庫
- ⑧ 溝
- ⑨ 大砲
- ⑩ 玉置場
- ⑪ 石垣

が、兎に角品川宿・目黒川口の沖合から、深川・洲崎辨天の沖合にかけて、十一基の臺場を連ねて江戸を守ること



になつた。最初の起工は米艦が浦賀を去つて二ヶ月後の嘉永六年八月で、一・二・三番は八ヶ月を経て翌安政元年四月に竣工し、五・六番及び洲崎臺場は同年十一月竣工した。四番・七番は工事半にして神奈川條約を初め諸國との通商條約が締結されたので、四番は七分通り、七番は海中埋立のみで中止され、他は全然着手されなかつた。而し之迄に費した築造費丈けても當時の金で七十五萬兩餘に上つてゐる。臺場に据付けた大筒は大部分湯島櫻馬場の大筒鑄造所（現女子高師構内、本郷區の部参照）で鑄造し一部は佐賀及び葦山の反射爐によつて製作された。今九段靖國神社神苑内及び大村益次郎翁の銅像附近に在るのが即ちそれである。

品川臺場は維新後明治三年迄は全部陸軍省の管理下にあつたが、現在では一番・四番が拂下げられて<sup>プラキ</sup>緒明造船所所有、二番・五番が海軍省で、二番には燈臺があり、三番・六番は東京市所有で共に内務大臣指定史蹟である。三番は海上公園として一般に開放し、六番は最も原型をよく保つてゐるのでそのまゝ絶対に人を入れずに保存してゐる。洲崎臺場は今埋立地の中へ入つて了つてゐて何等の遺構も存しない。尙東京灣築港計畫で既に深川洲崎と三番臺場をつなぐ大防波堤が築造されてゐて夏はこゝに海水浴が出来るが、之は更に六・二番まで延長される豫定になつてゐる。なほ築城本部篇「築城史料」、大類伸氏「城郭之研究」「戦争と城塞」、東京市公園課篇「品川臺場」参照。（以上 小笠原・増訂者秋山）

## 五 麻 布 區

長谷寺 深廣寺 善福寺 氷川神社

### 長谷寺 普陀山 曹洞宗 笄町

市電 高樹町下車。北へ路次を入れれば、やがて側面からその境内にはいる。

正面黒門からはいつて突當りに本堂、背後に庫裡がある。本堂前に露座の銅佛、夜叉神堂があり、門外に舊子院慈眼院がある。境内は相當廣潤で、閑寂如何にも禪刹らしい。

近世初期以降の舊寺で、開山は門庵宗關、駿河の人、家康の參禪の師であつた。本尊は木彫十一面觀音で、身長約八米、府内最大の觀音である。この寺は、もと赤坂溜池の上にあつて龍雲院といつたが、天正十二年（1584）五月、この地に移つた。こゝにはその以前から創立年代不明の古刹長谷寺があつて大觀音を本尊としてゐた。よつて移轉の際龍雲院を今の名に改めたものである。舊幕時代は禪宗江戸四ヶ寺の一であつた。はじめ下野大申寺の末寺であつたが、去る大正十年（1921）以來本山永平寺の直末としてその東京出張所となつた。寺寶に朝鮮傳來の十六羅漢木像等を藏するといふ。

なほ當寺の五代東傳和尚は音に聞えた傑僧であつたが、その頃世に傳ふる黒田騒動が起つた。寛永十年筑前の國守黒田左衛門佐直之が奸臣栗山大膳から讒訴され、その申開きのため出府した彼直之が、その宿所を芝以北



他の大寺に乞ひ、いづれも後難を懼れられて断られつゝ當寺に辿りついたとき、この東傳和尚は決然これを容れて宿院を供し、その冤罪を解くに骨を折つたといふ。後、疑は晴れたが、その居間として急造して供した書院は一夜書院と稱へ、明治の半頃まであつた。又此事件中屢々大久保彦左衛門が來寺して馬を繫いだ櫻樹を大久保の駒繫ぎ櫻と稱へ、今もその跡に櫻の老樹がある。

後の墓地には、京師の儒者谷一齋、明治の功臣井上馨・渡邊洪基、其他大高坂芝山・河島醇・大内青巒・松平正直・波多野敬直・橋本綱常・花井お梅等の墓がある。

### 深廣寺

高明山松徳院 淨土宗 六本木町

市電 六本木下車。西北へ電車通を少し歩けば左側にある。

増上寺の末寺である。右手に本堂及び庫裡、左手には西方十一番札所たる觀音堂がある。

開山は傳專譽といひ、文祿元年(1592)西久保城山邊に創建したが、寛永三年(1626)秀忠夫人淺井氏薨去のとき、法務勤行の功により、その火葬地を給與されて、同六年こゝに移つたと傳へる。境内にその灰塚があるさうだが、實は不明である。墓地へ入つて右の雜草の中に碑面の磨滅した高さ約一米位の矩形の石碑があるが之も疑はしい。觀音堂に向つて右側に佐藤家の墓所がある。府の假指定史蹟佐藤一齋の墓はこゝにある。一齋は江戸の人で、陽名學を奉じ、林氏の塾長、ついで昌平黌の教授となり、その系統に幾多の逸材を出した。安政六年八十八歳で歿した。その門下若山勿堂、河田地齋の墓も側にある。

次に飯倉四丁目の金龍山瑠璃光寺(曹洞宗芝青松寺末)には、山崎闇齋門下の傑物佐藤直方の墓があり、府の指定史蹟になつてゐる。

飯倉に隣る森元町附近は昔學者の多く住んだところで、先生小路の稱があつた。

### 善福寺

麻布山 眞宗西本願寺派 山元町

市電 二ノ橋下車。西へ大通を入ること約二百米、右へ折れてすぐ左手に總門がある。

都下有數の巨刹である。約百米歩いて中門を經、本堂を仰ぎみる。本堂は、延慶三年(1310)二世眞海上人の時代に、桁行十三間、梁間十二間のものがあつたが焼失して、更に復舊、焼失を繰返し、現在のもは安永三年(1774)の建立にかゝり、十四間四面宸殿造である。他に開山堂(藏王權現堂)、麻布權現、また了海堂と稱する、經藏、太鼓堂等がある。

當寺はもと弘法大師創建のもの、眞言宗に屬し、規模を高野山にとつて成つたものであつたが、後中興開山了海の時、親鸞上人の關東弘法に際會し、上人を迎へて之に歸依し、則ち宗風を轉じて眞宗に改めたと傳へる。關東に於ける七靈場の隨一。はじめ龜子山といつた。龜山天皇の勅願、本尊は阿彌陀如來、支院十餘を數へた。更にこの寺はまたアメリカ公使館舊址としても有名である。安政六年(1859)六月三日アメリカ使節の客館を命ぜられ、公使ハリス及び書記ヒュウスケンが來宿してゐた。明治六年(1873)六月、米國使節はこゝを引拂つたのであつた。



なほこの寺の行事としては、毎年五月中に親鸞上人降誕會、十一月三日から六日まで、報恩講、春秋彼岸會が行はれる。

境内には、本堂に向つて左手の丘（この一帯は貝塚の址である）の上に、親鸞上人の大地に挿された杖から根芽逆まに生じたといふ大銀杏樹がある。俗に逆銀杏、また杖銀杏と稱する。幹圍約十米、高さ三十米、指定天然記念物になつてゐる。

次に總門から中門への間、右手に柳の井址がある。石垣を以て圍み、傍らに柳樹が植ゑられてゐるのでこの名があり、また楊柳水ともいつた。これは弘法大師が常陸國鹿島明神に乞うて得られた阿伽井であるといひ傳へてゐる。故にまた鹿島清水ともいつた。いま見るのは他より引いてゐる水で、こゝに湧いてゐるのではない。なほ儒者赤松太度墓がその墓地にある。

氷川神社

郷社 本村町

市電 二ノ橋下車。西へ大通を入ること約四百米、仙臺坂上の四ツ角から右へ折れてすぐ右側にある。

祭神 素戔鳴尊 配祀 日本武尊

麻布の總鎮守である。鳥居を入つて左に拜殿、本殿がある。境内はさう廣くない。

創建年代に二説あり、一つは天慶二年（939）源經基東征時の創祀といひ、又一つは文明年間（1469）太田道灌が當國一宮氷川明神を勧請したといふ説である。舊時は同所宮村の切通坂にあつたといひ、明神は眞言宗徳



乗寺であつた由である。祭禮は一時八月十七日であつたが、近時またもとの九月十七日に復した。同じ本村町にある日東山曹溪寺（臨濟宗妙心寺末）には、儒者藤森弘庵、赤穂義士の一人寺坂吉右衛門の墓がある。

本村町に隣る富士見町に慈眼山光林寺（同じく臨濟宗妙心寺末）があつて、寺内の墓地に米國提督ハリスの通譯官で、清川八郎に殺されたヒュウスケンの墓がある。

こゝから西北方面一帯に廣尾ヶ原と稱する原があつた。新編武藏風土記稿には下澁谷村、豊澤村の持分であるとしてゐる。故に豊澤の里とも、また土筆の多く生ずるため、つくしが原とも唱したらしい。後開墾を進めて、一時は二千七百坪許の茅野を残して御鷹狩場となつてゐたやうであるが、今日は殆ど舊觀を残さない。

（藤木）



### 六 赤坂區

和歌山藩徳川邸址 豊川稻荷 溜池址 氷川神社 乃木神社 青山墓地  
善光寺

#### 和歌山藩徳川邸址 赤坂離宮・青山御所

赤坂離宮正門は市電四谷仲町、青山御所正門は青山二丁目下車。

赤坂區の東北部を占める現赤坂離宮、及びその裏につゞく青山御所の大部分が和歌山藩徳川邸即ち所謂紀州藩邸址である。邸の廣さは拾四萬五千三百八十一坪餘と謂はれた。

寛永九年(1632)七月、はじめて紀州家の始祖頼宣が將軍家から給せられたもので、爾來數次、添地の拜領を加へつゝ、紀州藩の御中屋敷として明治に及んだ。(紀州侯は歴世上屋敷なる麴町邸と交互に住居せられたが、文化六年(1809)麴町邸炎焼の後、維新に至るまで専ら此處に住邸とせられた。)明治五年(1872)より六年にかけて宮内省御用地に献上、六年一時假皇居となり、二十二年宮城御造營の後、假に東宮御所にあてられ、その後、新宮殿が明治四十一年に落成して、爾來赤坂離宮と稱せられる。次に青山御所は紀州の青山御殿を主とし更に丹波篠山藩青山邸址の一部をも含んでゐる。明治七年より青山御所と稱し、爾來皇太后宮の御所になつてゐる。森林丘陵地帯に據つて、その自然の美の巧みにとり入れられた壯麗な邸園は西園といひ、尾州藩邸

の戸山園(現牛込陸軍戸山學校内)・水戸藩邸の後樂園(現小石川砲兵工廠内)と共に、徳川御三家の三名園として有名であつた。(詳細は南紀徳川史卷之百八十六城郭邸園誌参照。)

なほ傳馬町から喰違門址へ向つて正門の方へ登る道を紀伊國坂キノクニザカと今も稱して、その名にまた往時の名殘を留めてゐる。因みに、江戸名所圖會に、「赤根山 紀州公御中屋敷の地をいふとぞ、昔は此地に多く茜アカネを産す、故に茜山とよびけるとなり。今紀伊國坂と呼ぶ地、昔は赤坂と稱へしとなり。赤根山の坂なれば、かく赤坂とは名けたりと云ふ。」とあるが、所謂赤坂の地名について、赤坂庄より更に遡つての由來を説くには略々此の説によつて穩當であらう。

#### 豊川稻荷 表町二丁目一二番地

市電 豊川稻荷前下車。

境内はさまで廣くはないが參詣者の多い有名な稻荷である。大祭は九月二十一日。

一にまた豊川吒枳尼眞天と稱する。嘉吉元年(1441)東海義易和尚が三河豊川に妙嚴寺(圓福山 曹洞宗)を開創するに當り、別に祠堂を設けて、自作の吒枳尼眞天像を安んじ、その鎮守としたといふ。靈驗世に聞え、信長・秀吉・家康・義元等の尊崇厚く、後、一文政十一年(1828)五月、大岡越前守忠相はその江戸一ツ木町の邸内に之が分祠を設けて、敬信甚だ篤かつた。然るに明治九年(1876)私邸の神社佛閣に衆庶の參拜を禁ぜらるの官令あるに及び、之を現在の地に移して、同時に三河妙嚴寺の支院としたのである。因みに、また俗に平八郎稻荷とも稱するのは、開山東海義易和尚に隨從した平八郎といふ翁が吒枳尼眞天の化



現であつたとせられる傳説によるものである。

これから電車通を東北へ約二百米して赤坂見附へ出る。赤坂門址を右に仰いで、麴町の清水谷公園へ通する、東京には珍らしく古雅な辨慶橋がある。その欄干にはむかしの淺草橋、筋違橋、神田橋等の擬寶珠が用ひられてゐる。

### 溜池址

市電 赤坂見附、又は山王下・溜池・虎の門下車。

赤坂見附から東へ山王臺の下を巡つて虎の門に至るまでの間に所謂溜池といふ一大池水があつたが、今は埋立てた上に人家が出来て、たゞその地名に往時を忍ばせるのみである。

江戸城でははじめ此處にあつた大池を元和年中修理して飲料の上水に用ひてゐたが、後、玉川・神田の兩上水を引いてから之が使用を止め、明治以後その氾濫の害を懼れて池水を排除し、僅かに一溝を通ずるのみとなり、而も道路舗装工事のため今は之も地下に没し去つた。

この電車道路の西側は田町といひ、この溜池を排開して出来た新巷である。いま有名な妓街となつてゐるが、往昔風呂屋遊女が居たといふ風呂町もこの附近にあつたし、麥飯と稱する娼家も今の市電溜池邊にあつたといふから、その歴史は淺くない。

なほこの附近には、靈南坂町澄泉寺に垂加神道の學者跡部良顯の墓、一ツ木町堂支寺に石州濱田松平侯の奥女

中であつた名婦瀧野の墓、台町種徳寺に畫家狩野定信(興以、興意)の墓、同じく台町報土寺に幕末の高橋井部香山の墓がある。

### 氷川神社

府社 氷川町五二番地

市電 福吉町下車。直ちに西北へ入ること約五百米。突當りは勝安房邸址の氷川小學校であるが、その少し

手前から左折して約百米ゆけば、右側に氷川神社の鳥居が立つてゐる。

祭神 素戔鳴尊 配祀 奇稻田姫命 大己貴命

赤坂の總鎮守として江戸以來盛大な神社である。境内は巨木鬱蒼として鎮守の杜にふさはしい。

神社の略誌によると、創立の起因は六十二代村上天皇天曆五年(951)武州豊島郡人次ヶ原(いまの一ツ木町)の小六ヶ岡に創祀したものと云ふ。降つて徳川氏に及び、八代將軍吉宗がなほ紀州家に在るとき當社は同家の産土神たる故を以て尊崇淺からず、その將軍職を襲ふ享保十四年(1739)今井臺即ち現在の地へ現社殿を造營し、翌十五年四月遷宮を行はしめた上、將軍御直拜があつた。社地五千坪其他數所の社領を附せられた。明治元年(1868)車駕東幸せらるゝや勅祭社に准ぜられ、明治三年東京府管轄に移された。同十三年府社に列せられた。本社の舊別當神留山無動寺大乘院は本山派修験の江戸觸頭で二百五十石の給田を受けて羽振りをきかせた山伏であつた。

本社嘗てまた小六の宮といつたかについては、既に江戸名所圖會にもその考按を載せ、疑ひを存して各々別社



ならんとなし、甚だ分明を缺いてゐる。「紫の一本」には、昔一ツ木村に居た、美男の上に伊達者な、小六といふ馬追が、日ごろ氷川大明神を信仰すること厚く、此處に明神を祝ひ奉つたが、その死後この宮に葬られたので小六の宮といふといふ傳説を掲げ、其他、もと足立郡大宮の近くに小呂古（古呂故）と云ふ所から遷したのを誤つてかく唱へたといふ説などもある。なほ現在本社でも小六天神といふのが祀られてある由である。

祭日は江戸以來六月十五日であつたが、明治四十一年認可を経て九月十五日に改められた。氏子は赤坂・麻布・芝の三區に跨り三十七箇町戸數六千五百餘戸に達するといふ。

境内名木多く、社務所の裏にめづらしいなぎの大木のあることを書添へて置かう。

### 乃木神社 府社 新坂町五一番地

市電 乃木坂下車。乃木邸のすぐ裏に當る。

祭神 乃木希典 同夫人静子

質素にして、さゝやかながら神嚴の氣自ら湧く神社である。神社を中心に小公園が出来て居て、その周圍を江戸城虎の門の枳形の巨石を以て圍んでゐる。

本社は、乃木會の手によつて乃木邸の裏手に造營されたもの、大正十二年（1923）十一月の鎮座である。大正元年九月十三日、明治天皇御大葬の日、忠節無比の乃木將軍が、夫人と共に殉死を遂げられたことは國民の記憶に今だに新しい。

之に接續する舊乃木邸は質素な木造洋館である。その殉死の部屋を外から窺つて涙を新たにしない者はあるまい。舊邸の土地全部は、大將の遺言によつて東京府に寄附せられ、現にその管理に屬して公開されてゐる。因みに、乃木將軍誕生の地は近く麻布區六本木舊毛利邸内であり、將軍夫妻の墓も近く青山の共同墓地内にあ

### 青山墓地 青山南町二丁目、三丁目の南方麻布區霞町に至る

市電 青山三丁目、又は三聯隊前下車。

市内で有數の廣潤な墓地（凡そ八萬四千坪）で、舊青山氏邸の庭園を改めたものである。名士の墓碑が少くない。

前記乃木將軍夫妻の墓のほか、明治維新の元勳大久保利通（勅命により墓側に大久保利通神道碑が立てられてゐる）、明治大正の元老松方正義・維新の功臣後藤象次郎はじめ大島圭介・森有禮・西郷從道・川上操六・福島安正・兒玉源太郎・加藤友三郎・島田三郎・元田永孚・廣瀨武夫・中江兆民・尾崎紅葉・落合直文・國木田獨步・有島武郎・市川團十郎・遊女今紫等々殆ど數ふるに堪へない。

青山四丁目の電車通に面して南側に梅窓院（長青山寶樹寺）がある。浄土宗で知恩院に屬する。俗に青山大觀音と稱し、奥州伊達郡から青山家に傳はつたといふ所謂泰平觀世音を祀つて參詣者が少くない。

### 善光寺 南命山 浄土宗 青山北町六丁目

赤坂區



市電 明治神宮前下車。東へ向つて左側、電車通から稍入る。

山門をはいつて壯大な本堂を仰ぐ。信濃善光寺本願上人の宿院で、尼寺である。

永祿元年(1558)の創建で、はじめ谷中にあつたが、寶永二年(1705)この地に移つた。本尊阿彌陀如來、觀音堂の本尊聖觀音は、昔谷中にあつた頃火災に罹つたが自ら椽に飛び移られたといふので、俗に椽觀音と稱せられてゐる。

境内、本堂に向つて左手の側に高野長英碑がある。高さ約三米、幅約一米半の一枚石で、贈正四位高野長英碑と題し、下に勝安房の撰文に成る長英の事蹟を彫つてある。高野長英は陸中水澤の人、蘭學に通じ、蘭醫シールトに學び、また渡邊華山・小關三英と結んだ。後、幕府の忌諱に觸れ、捕へられんとして捕吏を斬つて自決した。時に嘉永三年十月、歳四十七。その著「夢物語」の如き、彼が時代に先進せる非凡の卓見を窺ひ知らしめる。(藤木)

七四 谷區

鮫ヶ橋 愛染院 塙保己一墓 須賀神社 山縣大貳墓 笹寺

四谷大木戸 玉川上水碑 新宿御苑 新宿 太宗寺 正受院

天龍寺 華園神社

鮫ヶ橋 谷町

市電 四谷仲町下車。赤坂離宮正門前を過ぎて坂を下つた所の低地にあつたと云ふ。

今は跡方もなくて、その架つてゐた小溝は、谷町方面から流れてゐたが、今は暗渠となり廣い舗装道路になつてしまつてゐる。

この橋名をとつて附近一帯を鮫ヶ橋と呼んでゐた。今の四谷南町、谷町一、二丁目の邊で、一時は繁華であつたが、その後荒廢してしまひ、現在は細民の住居が大部分を占めてゐる。現況と江戸名所圖會にある往昔とを比較すると面白いものがある。

橋名の起源について、江戸名所圖會には「昔、此地海につゞきたりし頃は鮫のあがりしのゆゑに名とす」とある。江戸砂子には、牛込行光寺に鮫馬と云ふ名馬があり、之がある時過つてこの橋から落ちて死に、それから「さめ馬ヶ橋」と云つたが何時の間にか「さめヶ橋」と呼ぶこととなつたと書いてある。そして字も佐目河橋と



なつてゐる。そして前の説(圖會)を信じ難しとしてゐる。

愛染院

十股山光明寺 新義真言宗豊山派 寺町二番地

市電 麴町十三丁目下車。南側を新宿方面に向つて進み最初の横丁を左折、四谷第一小學の前を過ぎると下り坂になる。其の中途に愛染院がある。

愛染院は、開山は空海、中興開山は正齋で、寛永十一年(1634)麴町貝塚から現在の土地へ移つた。境内には本堂の外に、大師堂・鐘樓があり、大師堂は本堂に向つて右側にある小堂がそれで、府内八十八ヶ所第十八番の額が上つてゐる。

寺寶としては傳弘法大師作の愛染明王木像、同筆般若心經、愛染明王畫像、大師の唐より持來つたと云ふ獨鈷、湛慶作の四天王像がある。

塙保己一墓

寺町二番地 愛染院内

交通 前項参照。

塙保己一の墓は、本堂に突當つて右側へ廻つて墓所へ入り、眞直ぐに行くと石垣の下にある。入口に木碑があるから直ぐ分る。正面の大きい墓標が保己一のもので、「前總檢校塙先生之墓」と刻んである。その周圍に一族の墓がある。墓は元、隣地の安樂寺にあつたのが明治三十一年五月移轉改葬した。この墓は東京府假指定史蹟である。

保己一は武州保木野村に生れ、幼少にして明を失つたが、國學、漢籍を修め、寶曆六年(1758)賀茂真淵の門に入り、師事すること半年餘、同八年群書類從の編纂に着手。天明中、檢校に進み、寛政五年、和學講談所を設立し之より有名になつた。文政四年(1821)總檢校となるも、翌年七月九日七十七歳で歿す。明治四十四年正四位を贈られた。

須賀神社

郷社 須賀町三二番地

愛染院の前の坂を下れば、目の前に石段がある。之を登れば須賀神社である。

祭神

健速須佐之男神

合殿

宇迦能御魂神

舊名は牛頭天王社と云ふ。故に現在でも愛染院前の通りを天王横丁と呼ぶ。境内には、本殿の外に、神樂殿、御水屋及び末社として大鳥神社、稻荷神社がある。本殿、神樂殿、御水屋は彫刻が頗る精巧である。又境内の一廓は小公園的の設備が出来てゐて子供の遊び場になつて居る。

當社は寛永年間の勸請と稱せられ、須賀神社と云ふ様になつたのは、明治に入つてからだと云ふ。寶物としては大岡雲峰畫、千種有功書の三十六歌仙があり、又壯麗な御神輿二基がある。現在の社殿は文化より文政に互つて建てられた社殿で、舞殿は近年のものである。尙、社記に依ると、以前は當社は四谷御門の外にあつたのが、寛永年間、外濠開鑿のときに今の土地に移つたと云ふ。



社名についても、古事記の「かれ是を以てその速須佐之男命宮造るべき地を出雲國に求ぎたまひき。こゝに須賀の地に到りまして詔りたまはく、吾此地あれこゝに來まして我が御心すがすが清淨しと詔りたまひて其地に宮作りてましましける」から取つたと云ふ。

祭日は毎年六月十七、十八、十九の三日間に亘つて行はれる。末社大鳥神社は、日本武尊を祀る。毎年十一月酉の日の大祭は、酉の市とて、例年參詣者で混雜するので、須賀神社のことを俗にお酉様と云ふ位である。須賀町の西に隣る左門町四九番地にお岩いわ稻荷がある。有名な四谷怪談のお岩を祀つたものである。

### 山縣大貳墓

舟町六七番地 全勝寺内

市電 四谷鹽町下車。四谷大通りの北側を四谷見附方面に進むこと約二百米にして左折する。この通りは俗に杉大門通りと稱する。更に約三百米行けば交番がある。其のすぢ向ふが雄峰山全勝寺(禪宗)で、入口に東京府指定史蹟の木碑がある。門を入り本堂に突きあたり左へ行けば、庭の中に、三條實美みつみ蒙額山縣柳莊の碑がある。

墓は、一旦門を出て坂道を五六間登ると木戸があり、それを入ると墓所で、此處にある。木戸を入ると、直ぐ右側に五基の墓が並んでゐる。大貳のは、その最も奥のもので、山縣氏一族累代一切諸精靈等と刻まれ、右端に俊昌院卓英良雄居士、明和四亥年八月廿二日歿とあるのが大貳である。臺石に松澤氏とあるのはおかしい。この墓は府の假指定史蹟である。

### 笹寺

四谷山長善寺 曹洞宗 鹽町三丁目九番地

市電 大木戸下車。鹽町停留場方面に道路南側を行けば約百米にして長善寺がある。

俗に笹寺(篠寺)と呼ぶ長善寺は、天正三年(1575)の創建で、開山は隣覺和尚、本尊は聖觀音である。相州法泉寺末。本堂には「世尊殿」と書いた額が掲げてあり、境内には昔を偲ぶよすがとして、熊笹が黒い木柵に圍まれて本堂に向つて右側にあり、その隣りに立派な舍利塔がある。左側には東京大角力協會のたてた勸進相撲創始の碑がある。之は寛永元年(1624)明石志賀之助が行つたので、晴天六日の興行であつた。回向院で行つたのは文政年間からである。

江戸砂子は次の如く書いてゐる。「當寺を笹寺と云ふは寛永の頃、御鷹野の時立よらせ給ふ。當寺其の頃は寺號なく長善庵といふ庵室にて此所藪の中にて小笹ふかゝりければ笹寺と呼ぶべしとの嚴命ありしとなり云々」とある。

本堂の左側へ廻り墓地へ入ると、すぐ左傍に天保年間の砲術家、大草求玄の墓がある。天保七年十二月歿。

### 四谷大木戸

鹽町三丁目

市電 大木戸又は新宿一丁目下車。

現今では全く跡方がないのであるが、恐らくは市電大木戸停留所と新宿一丁目停留所の中程の内藤町と鹽町三丁目の境にあつたのであらう。徳川氏入國の頃から石垣をたゞみ、門を設け、番屋を置き駄



馬の切手を檢した。形は、一部現存する高輪大木戸の如きものであつた。

江戸名所圖會によると、「四谷大木戸、又大關戸おほきどに作る。甲州及び青梅への街道なり。土俗云霞關かすみかき或は旭の關とも云ふとそ。御入國の頃まではこの地の左右は谷にて一筋道なり。此關にて往還の人を糺問せらる。近頃迄江戸より附出す駄賃馬の荷物送狀なきを通さざりしとなり。今も猶駄賃馬の荷鞍なきをば江戸宿又は荷問屋等の手形を出して通るは其遺風なり。此故にやこの番屋は町の持なれども、突棒指股つくばうさまたもじり等を飾置けり。是往古そのひ關のありし時の遺風ならん。」とある。霞ヶ關と云ふ名稱の起りにについても、種々の説あることは江戸砂子にも見えてゐる。附近にある霞關山太宗寺と何等かの關係があるかも知れぬ。又、今ある旭町もこの旭の關の名をとつたのであらう。この關は寛政四年(1793)廢され、今はその名のみが残つてゐる。

玉川上水碑

内藤町一番地十二號 東京市水道課大木戸出張所構内

市電 新宿一丁目(御苑前)下車。道路の南側を鹽町方面に百米ばかりすれば、道傍に鐵柵に圍まれた大石碑が之である。この位置は昔水番屋の高札のあつた所である。

玉川上水は江戸に飲料水を供給するために出來たもので、玉川清右衛門・玉川庄右衛門兄弟の經營による。初め將軍秀忠は上水に注目して計畫をたてたが、玉川兄弟は、多摩川の流れを引いて上水に充てようとし、幕府に請ふた。家綱は秀忠の遺志をついでその事業に着手し、玉川兄弟に依囑した。承應二年(1683)起工して明暦年中に竣工した。昭和二年頃までは御苑沿ひに旭町に至るまで、水道の

名残があつたが、現在は暗渠となり上は道路になつてゐる。碑は公爵徳川家達篆額、肝付兼行撰、金井恭書である。碑文を示せば、

詩曰。瞻彼洛矣維水泱泱。聖人之設都也。以水爲急。蓋以人須水不可一日缺也。徳川氏之開府于江戸也。諸侯會同工商簇聚者殆一百萬。地窄不能盡。乃填海爲陸。而地無清泉。民籲渴。將軍秀忠深患之。乃親騎旁索四方多摩郡有一沼潏沸。嘗之味甘。大悅。乃命工人浚汚泥鑿田畝東道四里有半。至關口村置閘築堰。道至小石川。理石地下作閘溝。驗神田川至小川街分爲兩岐。一過東神田湯柳原溝。一至神田橋分注城內百邸。本流踰竜閑橋常盤橋外至京橋。此間分二派。一注銀街喰街入淺草溝。一注本街折至堀留過小舟小網街至箱入大河。人民各捐私金自引地下閘溝。如布網。千已百街無處不注。是爲神田水道。將軍自命白井頭。謂市井之衛也。而水猶不足。將軍家綱更開玉川水道。玉川發源甲斐山梨郡。東流三十八里入海。家綱權擢市戸尹神尾備前幹前。備前舉川傍富民庄右衛清右衛門二人。不別設官吏。二人米工事。測道遠近。度地高低。豫算經費六千五百兩。備器具。備役人。承應三年四月既肇羽村鑿渠。八尺廣十二尺。設閘若干。以備暴溢之虞。東導十餘里至。四谷。費用不足。二人私金繼之。不復稟求。埋木桶作閘溝。一如井頭水道。至麴街分四流。下赤阪至虎門外。分之三二方。東者入櫻田門注西城外諸區瀉吳服橋。南者書京橋滙八町堀木挽街入大河。西者注芝百街入金杉海。第二流注平河永田霞關數街。第三第四流入牛藏門。一注西域。一入大城。爲宮園瀑布。風老添趣。餘流環爲城溝。工事告竣。閘溝長若干埋木無一所缺。家綱嘉賞。賜二人姓玉川。給祿二百石。列之士伍云。嗚呼水道之益于都下。實莫大。旱不枯。雨不溢。源源混混。然不止三百年于今。民不病一日之渴。且此水流遠性和。百萬人民不病癩



疾疹癘。爲惠也大。如玉川二氏。盡力于此。不少爲勞又損金無吝色。其事爲後法。其利及百世。可謂偉也。若神田水道雖有粗記之者。不悉費金多寡及役夫之數。不可得而審。爲可惜焉。餘閱舊志略知其顛末。恐歲月之久功績湮沒後人無可考。因不顧不文。及記其概。與同志者合力刻石。以垂不朽云。

尙、この石碑は明治十八年四月に建てられたものである。(井ノ頭と深大寺の條參照)

### 新宿御苑

市電新宿一丁目停留場は御苑の正門前にある。内藤町から西邊は追分、旭町に接し、南方は千駄ヶ谷町に接し、こゝに裏門がある。

總面積十八萬餘坪あり、御苑は大部分は元の内藤駿河守の邸地であつて、明治五年皇室に献上され、大藏省の所屬となり勸農試験場が置かれ、同十二年宮内省所管となり、御料局で管理し内外蔬菜を作り、供御の料にせらる。同二十三年より果樹花卉を栽培し、新宿植物御苑と稱す。同三十九年佛蘭西式の花園工事が行はれ、新宿御苑と改めた。又、苑内には各種の動物も飼養され、温室も多くある。東北隅に平屋の御殿あり、その庭園は純日本式である。折々行幸啓あり、春秋に觀櫻會觀菊會が行はれ内外使臣の拜觀が許されてゐる。大正天皇崩御の際、昭和二年二月七日この御苑内に於て御大葬儀が行はれたのは記憶に新しい所である。

新宿

市電 新宿一丁目―三丁目下車。

現在では主に追分から驛前迄の方が新宿と呼ばれるが、昔の新宿は現在の新宿一丁目停留所から新宿三丁目追分に至るまでであつた。今は全く面目を新にして、大建築も多く、交通も劇しく、殊に各郊外との連絡點に當るので年と共に發展して居り、新宿驛の如きは乗降客數全國一と云はれる程の混雑である。併し、昔の内藤新宿よりも今は追分より西の青梅街道に沿つた部分が最も賑やかである。

この地は元内藤氏が寛永の頃、拜領したもので、屋敷があつたが一面の萱原で、日本橋と高井戸の間は四里もあつて人馬も疲れるので、元祿十一年(1698)甲州街道繼立驛として宿場を許可された。内藤新宿の稱呼はこの時始めて生れた。而して享保三年(1718)人馬繼立驛たることが廢され、幕府直轄の町場となつた。それから五十餘年を経て明和九年、往來頻繁の所から再び甲州街道の驛次となつた。馬二十五疋、人夫二十五人を常置し、甲州街道のみならず、青梅街道の中野とも連絡した。同年、旅籠五十二、飯盛女百五十人を許可されたがこの女は女中兼商女で後には宿場遊女と呼ばれた。甲州街道と青梅街道の分岐點が追分で新宿三丁目にある。現今の一丁目、二丁目、三丁目は昔は下町、仲町、上町と呼ばれてゐた。

### 太宗寺

霞關山 淨土宗 新宿二丁目二七番地

市電 新宿二丁目停留場際(道路北側)に太宗寺がある。

境内は稍々低くなつてゐるので、道路から一寸下ると、右手に閻魔堂、それに向ひ合つて、大地藏尊



の座像がある。正面には閻魔堂を新築中で、それに隣つて三日月不動尊がある。本堂はその裏手になつてゐる。本尊は阿彌陀如來、開山は念譽故心學玄和尚である。尚、勸請開山は聖光上人。

元は一草庵であるにすぎなかつたが、寛永年中内藤大和守重頼が此地を賜つたとき、この庵に若干の地を與へて、太宗寺と號せしめたと云ふ。前述の地藏尊像は銅製一丈餘のもので、地藏坊正元作。江戸六地藏の第二番目であつた。現在は史蹟になつてゐる。閻魔王像は高さ一丈八尺、市内最大のもので運慶の作と傳へてゐる。一月、七月の十六日は祭日で、大混雜を呈する。

正受院

願光窟妙了山 淨土宗 新宿二丁目四一番地

市電 新宿二丁目下車し、道路北側を東四谷方面に向つて進み五十米ばかりで左折し、突き當つて更に左折すれば左に正受院がある。恰度太宗寺の裏に當る。

江戸砂子には明了山正受寺とある。門を入ると右に本堂、正面に脱衣姿の木像を安置せる堂がある。江戸時代には參詣者が多かつた。この寺には元、松平容保の墓があつたが、現在は國許へ移されてしまつて無き。

正受院の門を出て尙行くと程なく左側に成覺寺がある。矢張淨土宗増上寺末で、十劫山と號す。創建は文祿三年(1594)と云ふが伽藍は極めて新らしい。門を入つて右側に白糸塚がある。新内、常磐津、芝居などで名高い鈴木主水と馴染んだ新宿遊廓の白糸が此寺に葬られたが、俳優二代目しうかが白糸の芝居をして當つたので

この塚を建てたと云ふ。青色の小さな自然石で、「すゑの世も結ぶるにしゃ糸柳」の句が刻んである。

天龍寺

護本山 曹洞宗 旭町五五〇番地

市電 新宿三丁目(京王電車前)下車。道路南側の京王電車停車場のわきを裏通りへと抜けて、府立六中の校門の前を過ぎ、最初の横丁を左折して、二百米ばかり行くと右側に天龍寺がある。

境内は可成廣く鐘樓もあり、昔は大寺であつたことが分る。本尊は千手觀音である。開山は春屋和尚。開山の墓も、今墓地内の一隅に残つてゐる。

江戸名所圖會には「當寺其先は遠州の天龍川の邊にありしを後江戸に移し牛込にありしが天和三年癸亥二月十六日火災にかゝり竟に此地に引きたり。」とある。

牛込ほどの邊であつたかと云ふに、江戸名所圖會では牛込御徒歩町とあるが、現在御徒歩町なる名は残つて居ない。江戸砂子には淨瑠璃坂下の邊にありと云つてゐるから、今の市谷田町のあたりであらうか。「元天龍寺前」と呼んだと書いてあるが、現今では聞かない。

河村瑞軒の墓は墓地の奥の方にあるが、可成荒れてゐるから一寸分り難い。本堂へ行つて案内を求めるとよい。墓は二基あつて向つて右側のが瑞軒のであり、離明院玄鑑自休居士元祿十二年九月六日歿と刻んである。

華園神社

郷社 三光町一五〇番地

市電 新宿車庫前下車。道路北側の車庫の横に入り、更に車庫の石垣について右へ曲れば、半町ばかりで左



側に華國神社があり、郷社の石碑が立つてゐる。

祭神 宇迦御魂主命 相殿 素戔鳴尊 菅原道真 合祀 華國稻荷 雷電稻荷

その名稱は、昔尾張侯の別邸のあつた時、花園のあつた所から名付けられたので參道には大樹が繁つてゐる。拜殿の前には文政四年奉納の青銅唐獅子がある。境内は廣くて、東に東郷元帥の書の彰忠碑あり、本殿の向つて右に社務所、左前に神樂殿左横に大鳥社がある。又一隅に岩石を富士の形に積み重ねた富士淺間大神遙拜所がある。

當社は慶安元年(1648)尾張侯の勸請創建にかゝり、内藤新宿町の鎮守の社であるが、度々火災の厄にあつて居て、現在の社殿は明治時代のものである。

祭日は毎年六月七日から十一日迄五日間である。(岩見)

八 牛 込 區

若宮八幡神社 龜岡八幡神社 名古屋藩徳川邸址 筑土八幡神社

築土神社 赤城神社 儒役林氏墓地 關孝和の墓 宗參寺 月桂寺

名古屋徳川家戸山莊址 穴八幡神社

若宮八幡神社 村社 若宮町一八番地

市電逢坂下車。東へ(牛込見附の方へ)六七十里行き左へ土塀に添つた細い曲つた坂を上れば百三四十米右側にある。

祭神 仁徳天皇 相殿 應神天皇 東照宮(徳川家康)

境内は狭いが老樹が生ひ茂つてゐて如何にも清々してゐる。拜殿は瓦葺權現造、本殿は土藏造で廻廊により社務所と連る。

度々火災に罹り記録が残つてゐないので、由緒が正確に分らないが、江戸の地誌は何れも殆ど一致した説を擧げてゐる。代表として江戸名所圖會の載せる所を抄出すると、「相傳ふ文治五年(1188)の秋右大將頼朝卿奥州の泰衡を征伐せんが爲に發向す其時宿願ありて奥州平治の後當社を營み鎌倉鶴が岡の若宮八幡宮を移し奉らるるといへり。文明年間(1868)太田道灌江戸城鎮護の爲當社を再興し社壇を江戸城に相對せしむるとなり、」



といふのである。大正十四年八月村社に列せられた際の記念碑が社務所の前に建つてゐるが、それにも同様の由緒が刻してある。大祭は八月十五日。

若宮八幡を出て、元來た道を更に真直ぐ行き突當る一つ手前の道を左へ二三百米行けば袋町で牛込城址である。この附近での高所で成程城址と思へば思へるが、今は一面に家が建こんでゐて、どこがどうなつてゐたか見當も付かない。

新編江戸志には次の様に出てゐる。「牛込氏の家説に今の墓店（現在の肴町に在つた）の上は不殘牛込城にして追手の門は神樂坂の方にありとなり今もこの地のありさまに城地とおぼしき所多々残り天文の頃牛込宮内少輔勝行居城なり牛込氏は藤原秀郷末足利太夫成行子大胡太郎重俊の後胤也宗參寺に勝行の墓あり。」他にもこれ以上詳細に書いてある本は一寸見當らないが、御府内備考(三)をも一應參照されたい。參考の爲次に牛込氏の系圖を掲げる。尙宗參寺の項參照。  
寛政重修諸家譜 卷第八五五

藤原氏 秀郷流

牛込

傳左衛門勝正がとき家たゆ。太郎重俊上野國大胡を領せしより、足利を改て大胡を稱す。これより代々彼地に住し、宮内少輔重行がとき、武藏國牛込にうつり住し、其男宮内少輔勝行地名によりて家號を牛込にあらたむ。

重俊 太郎 足利大夫成行が男

成家

(七代略)

重國

重行

彦太郎 宮内少輔 入道號宗參

上杉修理大夫朝興に屬し、のち北條氏康が招に應じ、大胡を去て牛込にうつり住し、天文十二年九月十七日死す。年七十八。法名宗參。牛込に葬る。十三年男勝行此地に一字を建立し、宗參寺と號し、後代々葬地とす。

勝行

助五郎 宮内少輔 入道號清雲

北條氏康につかへ、弘治元年正月六日大胡をあらためて牛込と稱す。このときにあたりて勝行牛込今井、櫻田、日尾屋、下總國堀切、千葉等の地を領し、牛込に居住す。天正十五年七月二十九日死す。年八十五。法名清雲。

勝重

彦次郎 三右衛門 號道哲

北條氏直につかへ、北條家没落の後、天正十九年めされて東照宮にまみえたてまつり、御家人に列し、のち肥前國名護屋及び關原等の役に従ひたてまつる。元和元年今の早七月二十一日死す。年六十。法名宗隆。妻は遠山丹波守某が女。



尙袋町には天明の頃迄天文屋敷のあつたことが府内備考等に見えてゐるが、矢張り場所は分らない。府内備考によれば「天文屋敷蹟は地藏坂の上牛町ほど西の方なり云々」とあつて、享保十年(1735)以後の何時からか佐々木文二郎といふ人が幕府に乞ふて司天臺を建てたが「西南の遠望さはり多ければとてその子靱負の時に至り天明二年壬寅七月今の淺草鳥越の地へうつされたり云々」とある。

袋町は二百米四方に満たない小さな町で、一廻りして北へ坂を下れば神樂坂の通りへ出る。神樂坂は市電牛込見附から肴町の停留場の方へ上る坂で、今は坦々たる大道路で区内目貫きの通りであるが、江戸名所圖會の繪で見ると緩い階段になつてゐたものと見える。神樂坂の名の起源については大體四つ説がある。

- (一)坂上の高田八幡旅所へ神輿渡御の時ここで神樂を奏したからであるとする説。
- (二)市谷八幡の祭禮に神輿が暫く市谷門橋上に留り神樂を奏したからとする説。
- (三)津久土神社が現在の地へ遷座の際此處で神樂を奏したからとする説。
- (四)若宮八幡の社が近く神樂の音が此坂迄聞えたからとする説。

龜岡八幡神社

市ヶ谷八幡 郷社 市谷八幡町一五番地

市電 市谷見附、(省線市ヶ谷驛)下車。西六十米で電車通りに外濠に臨んで白木の鳥居が立つてゐる。

祭神 應神天皇

合祀 神功皇后 與登比賣命

鳥居の正面は男坂、その左が茶木稻荷、更にその左が女坂である。境内は大して廣くはないが、牛込

の丘陵の南端に位し、目の下に外濠から丸の内方面を望み、眺望がよい。左の玉垣の中、崖に臨んだ所が鐘樓址。鐘は山の手時の鐘の一つで、明治維新神佛分離後、鐘樓とともに築地本願寺別院へ移された。拜殿は南面總檜皮葺八幡造。本殿は銅板葺で周圍に瑞籬を廻らしてある。

社記によれば文明十一年(1479)太田道灌江戸築城の時、城内鎮護の神として、往古多田滿仲の崇敬してゐた靈軀を攝津多田の郷から移し、更に鎌倉八幡宮を分靈して鎮座したのが初である。江戸名所圖會・江戸砂子等によれば神體は應仁天皇御馬上甲冑の御姿であるといひ、當時此地には以前から稻荷(茶木稻荷)の祠があつたので別當寺を稻嶺山東圓寺(古義眞言、今廢寺)と號したといふ。新編江戸志(卷八)には求涼雜記を引き「右大臣賴朝の時武州淺草の大工を以て鎌倉八幡宮營作の時當所に於て材木を寄せ置し所故其頃八幡山といふ。鶴ヶ岡遷宮の後、彼淺草大工鶴岡の殘木にて當社を造立し奉るといへり。年久しく神體なし。其後太田道灌の神體を以て當社の神體とす。後星霜を経て北氏何某多田滿仲守本尊の八幡を代々持傳へし享保の頃當社相殿に奉納せしより混じて當社を多田滿仲守護神といふとなり」とある。神體については何れを信すべきかを知らないが鶴岡八幡と深い因縁のあることは確で、一説には鶴ヶ岡に對し龜岡と稱へたと云ふ。大永の頃(天正の頃とも云)兵變に罹り一時衰へてゐたのを慶長年間別當空源昌運(江戸砂子)といふ者が再興したといふ。大祭は八月十五日である。

攝社茶木稻荷は保食神を祀り、社説によれば千有餘年前の創建といふが、年代はよく分らない。八幡宮の創建以前から有り地主の神といはれたのは事實で、江戸砂子に「俗説に曰當山に白狐ありあやまつて茶の木にて目



をつきたりよつて茶をいむとなり此神の氏子正月三ヶ日の内今に茶をのます又目をわづらふもの一七日二七日  
祭をたちて願ひぬればすみやかに驗ありといふ舊俗今にのこれり」とある。

末社に金刀比羅神社（出世稻荷神社・穴稻荷神社等を合祀す）、北野神社、雨降神社がある。

八幡宮の裏は現在陸軍士官學校で元の尾張徳川邸址（次の項参照）である。八幡宮の裏門を出た所の坂は左内  
坂である。（紫の一本参照）

名古屋藩徳川邸址

市谷本村町

市電（四谷）本村町下車。北約百米。今陸軍士官學校のある廣い一劃がその址である。

明暦二年（1656）三月尾張徳川家第二代徳川光友の時上屋敷として賜つたもので、明治四年上地とな  
つた當時總坪數八萬三千八百三十二坪（東京市史稿市街篇）あつたといふ。現在建物は勿論變つてゐ  
るが、泉水樹木等は可成り多く當時のまゝ残つてゐる。外からは外廓に添つてやきもち坂から牛込柳  
町の方へ行く右側に長屋の一部が残つてゐるのが見られるのみである。（以上 秋山）

筑土八幡神社

村社 筑土八幡町七番地

市電 筑土八幡前下車。

祭神 應神天皇 神功皇后 比賣命

創建の年代は弘仁年間（810—）であると云ふ。

江戸名所圖會に「（上略）……相傳ふ嵯峨天皇の御宇、此地に一人の老翁あり、常に八幡社を尊信す。或時當社の  
御神此翁の夢中に託して永く此地に跡を垂たまはんとなり……云々」とある。又一説に此地は上杉時氏の壘の  
舊蹟である爲弓矢を祀ると。而して筑土の名は築立てたる地の義なりとも筑紫宇佐宮の土を取りて礎を作りし  
よりの名なりともいふ。祭日は八月十五日で境内には火防八幡、宮比神社等あり、又寛文四年（1664）に立て  
た庚申塔がある。

築土神社

村社 筑土八幡町六番地

市電 筑土八幡前下車。筑土八幡とならんでゐる。

祭神 天津彦火瓊杵尊 相殿 平將門

神殿は土藏造り白壁、重層入母屋造。

本社は人皇第六十一代、朱雀天皇の天慶三年（940）平將門が殺さるゝや、その族黨が京都より將門の首を持か  
へり平川の地（現今田安門内近衛師團所在地）の觀音堂に祭つたのがはじまりで、下つて文明十年（1478）太田  
道灌が江戸城を修築せらるゝや殊に當社を尊崇し同年六月社殿を造營した。後、天正七年（1579）田安の地に  
遷座し、當時田安明神と稱し、或は江戸明神とも稱し、山王・神田の兩社と共に江戸の三社として四民の尊崇を  
受けてゐた。元和二年（1616）更に現在の地にうつり築土明神と改め更に明治七年築土神社と稱し村社に定め  
られた。

祭禮は九月十五日である。社實には平將門の小首桶を安置したといふ眞鍮六角厨子、將門公木像及平將門縁起



一卷等がある。(將門については神田明神の項参照) 末社(合祀末社)に北野神社、大國主神社、東照宮、稻荷神社がある。

赤城神社 郷社 赤城元町一六番地

市電 牛込肴町下車。西へ坂を登りつめた所、牛込郵便局のすこし先に參道がある。

祭神 磐筒男命 合殿 赤城姫命

拜殿は瓦葺權現造で精巧なる彫刻あり見るべき點が多い。境内には寛文十一年牛込勝登寄附の石水盤、寛文十三年牛込忠左衛門氏寄附の石燈籠、藤原廣前の碑、正安三年五月(1302)の板碑(高さ一米餘、巾零米三餘)等がある。この地は高臺で眺望がよい。

當社の由緒に就ては天保十三年火災に逢つた爲詳細は不明であるが牛込町誌によれば、この社は後伏見天皇の正安二年(1300)九月に上野國赤城山なる赤城神社の分靈を牛込早稻田の田島(今の早稻田鶴巻町百八十五番地の森中に小社を勧請し、其後百六十餘年を経て寛正元年太田道灌が之を牛込臺(後、俗に明神原と稱へられた所)に遷座し、その後現在の地に移つたのであるといふ。天和三年(1683)幕府の命により江戸大社の列に加へ牛込の總鎮守とし明治六年七月郷社に列し、大祭は九月十九日である。本社は牛込氏の尊崇あつく江戸名所圖會にも「牛込の鎮守にして別當は天台宗本覺寺と號す、祭神は上野國赤城山と同神にして本地佛は將軍地藏尊と云。住古大胡氏深く此御神を崇敬し始は領地に勧請して近戸明神と稱す。其子孫重泰當國に移りて牛込に住せり。又大胡を改めて牛込を氏とし、祖先の志を繼いで此御神をここに勧請なし奉るといへり云々」とある。祭は九月十九日で昔程ではないが相當に賑かである。寶物としては獅子頭、狩野信良筆の繪卷物あり、末社に北野神社、出世稻荷神社、葵神社、八耳神社がある。(以上 土方)

儒役林氏墓地 市ヶ谷山伏町一六番地

市電 山伏町下車。市ヶ谷小學校の右横を入つて二三百米。十字路を左へ約百米で左側にある。

元はこゝに林氏の邸があつたが今は墓地丈け残つて居る。普通の墓地と異ひ儒葬の墓地で、大塚先儒墓地等と同じである。大正十五年十月内務大臣指定の史蹟で林羅山の墓はその中の奥まつた一段高い所にあり、墓石には「文敏先生羅山林君之墓」と刻してある。堀に刻んだ銘文を寫して説明に代へる。「徳川幕府の儒役林氏累代の塋域にして開祖羅山以下十二世支族春徳以下八世其他一族を儒葬せし處となす。初め上野忍ヶ岡の別邸内に在りしが元祿十一年三世鳳岡の時替地を此處に賜ひ墓地も亦移轉改葬せり。地は城北の一高丘を占め遠く富士秩父の連山を望み老樹蒼蒼幽邃の勝區たりしも明治維新後漸次縮少して現在の地域となる。(下略)」

關孝和の墓 辨天町九番地 淨輪寺内

市電牛込柳町下車。廣い道を北へ三四百米、右側に「史蹟關孝和之墓」の標柱が建つてゐる所を少し上れば左側に淨輪寺があり墓はその中にある。淨輪寺(常榮山)は日蓮宗本門寺末で立派な寺であるが、建物(本



堂に當るか)が青瓦文化住宅型のすこぶるモダン寺なので一寸面喰ふ。

關孝和の墓はその本堂の前を通つて一番奥の突當りにある。「寶永五年戊子十月廿四日卒、贈從四位、時明治四十年十一月十五日、法行院殿宗達日心大居士、姓藤原諱孝和稱關新助」と刻してある。

孝和は説明する迄もないが關流算術の祖、歸源整法(代數の一種)の發明者として世界に誇るべき和算の大家である。

淨輪寺を出て元來た廣い道を更に二三百米行き、交番の前を左へ曲れば突當りが宗參寺である。

### 宗參寺

雲居山 曹洞宗 牛込辨天町一番地

市電 牛込柳町下車。北約六百米(前項参照)

宗參寺は牛込區の大寺の一つで駒込吉祥寺末、昔から牛込の城主牛込氏の菩提寺である。(牛込城址の項参照)天文十三年(1544)牛込勝行が父重行(法名宗參)の菩提の爲建立し看榮禪師を開山とした。禪寺にしては稍々明るいが落付いた寺である。

本堂の左手に入れば墓地で、牛込氏の墓域(府の指定史蹟)は稍奥の左へ入つた一段高い所であり、小學校の體操場と對ひ合つてゐる。墓地は可成り廣いが荒れてゐる。近くにあるのは牛込氏先祖代々、奥にあるのが重行・勝行父子の墓である。細長い墓石で右側に「參秀院殿前牛込太守從五位下外心清雲庵主(勝行)、トキニ 嘗(時)天正十五丁亥天七月二十九日」、左に「雲居院殿前大胡太守實翁宗參大庵主(重行)、嘗天文十二癸卯年九月十七

日」とあり、左右の面に夫々の略傳を刻してある。牛込氏の墓より右手で墓地の略中央に近く四五本の樫の木に圍まれて山鹿素行の墓がある(府の假指定史蹟)。矢張り一段高く稍大きな墓石で前に石燈籠、石鉢等が置いてあるから直ぐ分る。表には「月海院殿瑚光淨珊居士墓」とあり裏に略傳がある。素行は言ふ迄もない山鹿流軍學の開祖。名は高祐、通稱甚五右衛門。會津の人である。赤穂淺野侯に仕へ、四十七士の引合ひで可成りポピュラーであるが、事實は知られてゐる以上の大人物である。貞享二年(1685)六十三歳で歿し、明治四十年正四位を追贈された。

### 月桂寺

正覺山 臨濟宗圓覺寺派 市谷河田町三番地

市電 牛込柳町下車。南へ三四百米行き、廣い十字路を右折、緩い坂を上つて更に二三百米行けば右側にある黒塗の門が月桂寺である。

寺内には老樹が生繁つてゐて靜寂そのものである。突當りに鐘樓があり、右は本堂である。

創建は寛永九年。開基は澁江徹齋。本尊釋迦如來は僧鑑眞の持歸つたと稱する印度佛で、江戸名所圖會には、「腹中に佛舍利を收むと云」と註してあるがその眞偽は知らない。鐘樓の突當りは墓地で、多くの地誌類に柳澤吉保の墓ありと誌してゐるがその墓まで示したものが見當らない。寺では墓地の略中央に近く、一段高くなつた釋迦の立像、觀世音の座像二基の墓がそれであると云ふが法號、歿年共一致しない。吉保は號を保山と云ひ正徳四年(1711)五十七歳で歿したのであるが、それに符合する墓は墓地内に見當らない。月桂寺は元來柳澤家の菩提寺で現在の伯爵家迄一族の墓が多く、この二基も柳澤家の人の墓であることは間違ひないが吉保夫妻



のものであるか否かは明かでない。尙關八州名墓誌参照。

名古屋徳川家戸山莊址

下戸塚町

市電 余丁町又は東大久保下車。北三四百米。

現在陸軍戸山學校の構内になつてゐて殆ど舊觀を止めないが、往時は後樂園・西園と並び稱せられた名園で將軍家齊も屢々駕を寄せたといふ。本村町の上屋敷と同じく徳川光友により造られたのであるが最も盛であつたのは寛政の頃で總面積約十四萬坪に及んだといふ。現在は戸山學校の外軍醫學校及び第一衛戍病院等が建てられてゐる。

穴八幡神社

村社 八幡神社 高田町一番地

市電 早稻田終點下車。廣い舗装道路を左へ曲り、早稻田大學野球場の前を通つて約五百米で廣い改正道路に出る。更にその通りを左へ約百米で右側の丘の上に見える社がそれ。樓門の青い銅板屋根が遠くからもよく見える。牛込若松町から省線高田馬場への乗合自動車もすぐ前に止るが、歩くには早稻田が最も近い。

祭神 應仁天皇

相殿 神功皇后

仲哀天皇

道路の擴張で大分前の方を削られたが、正面の石段が男坂、左の坂の正面は昔の別當光松山放生寺(古義眞言)で、その坂の途中から右へ女坂がある。この寺の山號の由来をなす光り松(後記)は女坂への被れ目の所と、放生寺の門内にある二本の大きな松の木がそれで、前者は二代目だから大分若い。奴男坂を昇りつめると朱塗りの樓門(元文頃「1736」建立)があつて、神佛混淆時代の佛を残してゐる。昔の建物は今之丈けが残つて居り、他は總て大正年間の造營である。境内は可成り廣く、社殿も立派である。昔から穴八幡、高田八幡、戸塚八幡等呼ばれて、子供の虫封じで有名であるが、今公式には單に村社八幡神社で、境内や建物にしては少し氣の毒な位、目下昇格運動中とのことである。拜殿は瓦葺權現造、本殿は銅板葺神明造で、全然建方が異ひ、棟が石の間で切れてゐることも一寸注意すべきである。

當社の由緒については大體三つの階梯がある。

(一)社傳によれば「永承年中(1046)源義家東征凱旋の際此地に兜を埋めて當宮を勸請し、當時稱して兜塚と云ひしが後訛傳じて戸塚となす云々」とある。傳説に現はれた當社草創の第一段であるが、之は社傳にのみ見えて他の地誌類には書いてない。

(二)以下は殆どどんな地誌にも書いてある由緒で、比較的簡單明瞭な江府名勝志の所説を擧ると「寛永十三年(1636)に御弓所松平新五右衛門直次の與力の士此地にて弓を練習せし比八幡(石清水八幡)を勸請せんと欲す此山に二株の古松有山鳩日々に來て彼松に遊げれば則此樹を神木と崇めて鳥居を立云々」とあり、南向茶話によれば此松は多くの松の中で時々暗夜に瑞光を放ち、俗に光松と呼ばれたといふ。

(三)更に寛永十八年別當良昌僧都が草庵を營む爲、社側の崖を切り崩した所洞窟が現れ、その中から三寸程の金銅の阿彌陀佛(江戸名所圖會)が出現しましたし、然も丁度此日將軍家には令嗣家綱が生れたので、人々はそ



の奇瑞に感じて八幡宮の本地佛として崇めたといふ。穴八幡の名の起源である。(新編江戸志卷九、江戸名所記卷六、江戸砂子卷四等)。この阿彌陀佛は今も放生寺に安置されてゐる。(本尊は觀世音菩薩)

誕生の際の奇縁により殊に家綱の尊崇厚く、社殿の造營を行ひ、諸大名も色々の寄進をしたが、その中大森信濃守の寄進した延寶七年五月吉日と刻する手洗石が今も水屋の中にある。社寶として家綱の甲冑、家光の扇面流鏑馬繪卷、流鏑馬日記等を藏してゐる。末社には若宮八幡神社、東照宮、氷室神社、稻荷神社がある。當社の裏手は有名な高田馬場で將軍歴代の流鏑馬場であつたので、當社は常にその本陣となり、將軍以下境内に集合して參拜の後馬場に向ふ慣であつた。(澁橋區高田馬場の項參照)(以上 秋山)

### 九小石川區

後樂園 傳通院 牛天神 大洗堰 護國寺 豊島ヶ岡御陵  
 大塚先儒墓所 切支丹屋敷址 白山御殿址 小石川御藥園址 簸川神社  
 白山神社

#### 後樂園 砲兵工廠内

市電 小石川橋下車。

舊水戸藩邸の庭園で、寛永六年(1629)藩主徳川頼房が幕府に請ふて、此地に中屋敷を營むに當り、徳大寺左兵衛の設計によつて始めて築いたもので、唐風のすきなその子光圀の時になつて、朱舜水に命じて、支那風の様式を加へて大成した。後樂園の名は彼の命名である。神田上水を引いて泉水とし、山有り、林有り、奇岩あり、當時既に名園と稱せられた。震災の時大部傷められたといふ。

#### 傳通院 無量山 壽經寺 淨土宗鎮西派 表町八八番地

市電 傳通院前下車。

十八檀林の一に位し、僧聖岡(了譽上人)の開基、應永廿二年(1415)の創建である。本尊、阿彌陀如來、慶長七年(1602)徳川家康の母水野氏伏見城にて歿するや、知恩院にて葬式、直ちに江戸に送



棺してこの寺に葬つた。よつてその法號傳通院殿容譽光岳智光に採つて傳通院を寺號とし、大に寺刹を建立し、廓山を中興第一祖とした。今の表門は昔の中門で、總門は電車通に面してゐた。中門即ち今の表門は破風造り、菊瓣に、葵の紋章をつけてある。中に輪藏鐘樓がある。

昔は支院學寮數字を有し、寺領三百石で堂々たるものであつたが享保六年(1731)全部焼失、同年に再建、同十年本堂並に靈殿を残したのみで餘は焼失、再建された。今の本堂は明治四十三年の建造である。

寺内に傳通院の外本理院(家光室)、天樹院(豊臣秀頼妻)等の墓もある。中門脇に末寺福聚院があり、三國傳來で孝徳天皇の世高麗人が持つて來たといふ大黒、毘沙門、辨才の三天が祭つてある。(傳通院誌参照)

### 牛天神 村社 北野神社 大和町一番地

市電 大曲又は傳通院前下車。略々その中間電車の曲り目を東へ入れば突當りである。

祭神 菅原道眞

この邊長祿頃は金曾木村と云ひ、後金杉と云つた。本社は高丘によつて巍立し、眺望がよい。

當社縁起によれば、源頼朝東國經營の際、船を灣に駛し、漕上の松樹に纜を繋ぎ、風波の定るを待つたが、或夜夢に菅公が牛に乗つて現はれて、卿正に二の幸福あるべしと言つた。翌朝附近を見れば牛に似た石あり、同年秋に頼家誕生、翌年平家都落ちしたので頼朝大に感じ、元暦元年(1185)、この地に當社を建立した。戰國

に及んで北條氏康大に修築したと。祭日は五月廿五日、なほ末社太田神社がある。

拜殿左手にある木の根は船繋松の根で、又裏口に圍んである石あり、此が牛石であると。小石川植物園にも船繋松あり、この邊は一帶に海であつた事がうかがはれる。

### 大洗堰

市電 江戸川橋下車。

江戸川橋の方から江戸川公園にはいつて公園のつきる所、堰が設けてある。神田上水の江戸川から分れる所で、つまり公園は上水と江戸川とはさまれてゐる。

井ノ頭池より出る水は善福寺池と妙正寺池との流末を合せ、殆ど約二十軒、徳川時代には市内に給水するために水位を高める必要で此處に堰を設けて大洗堰と言つた。

神田上水は天正十八年(1590)大久保忠行の設計で出來たが、果してその時水道を設けたかは判らぬ。即ち大洗堰の出來た年代は不明であるが、恐らく簡単な用水堰か何かであつて、其が利用され段々改修されたものであらう。元和寛永頃には關口村の名あり、正保武藏國圖に今の水道町小石川町經由の水道をかつてあるのは、略々後世に等しく、吉祥寺橋を水道橋と記してあるから、この頃已に大洗堰のあつた事は明白である。

上水は關口臺町、關口駒井町、櫻木町、小日向水道町、水道端町を経て水戸藩邸(今砲兵工廠)にはいり、江戸時代には此處から水道橋の東に出て、萬治年間神田川浚渫の時(一説寛永中)にかけた萬年樋といふ木樋を



通つて神田、京橋、日本橋等に普及してゐたが、樋は明治三十三年廢せられた。新編武藏風土記稿に、今の如く直流と爲りしは承應二年よりの事也とあつて、上水は後屢く改修されたのである。堰は天明六年(1786)洪水にくづれ、再び堅固に造られ、明治四十三年屢く洪水の災を蒙るので、市は新に門扉によつて水位を調節出来る様な構造にした。上水は明治の初年に底樋の埋堀となり、舊水戸邸への給水は今猶續けられてゐる。(井ノ頭と深大寺の條参照)

江戸川公園の上の方に目白不動堂がある。五色不動の一で東豊山新長谷寺と號し眞言新義派である。本尊不動明王の像は弘法大師の作と言ふ。元和四年(1618)中興された。

關口臺町二九番地伊藤松字氏内には關口芭蕉庵がある。江戸名所圖會に、昔上水開發の頃、芭蕉翁此地に遊ばれしより、後世其舊跡を失はん事を歎き、白兔園宗瑞及馬光等いへる俳諧師此地の光景江州瀨田の義仲寺に髣髴たるを以て、五月雨に隠れぬものよ瀨田の橋といへる翁の短冊を塚に築き五月雨塚と號すと。今も五月雨の松塚、其の他夜寒の松等がある。

芭蕉は通稱松尾甚七郎と云ひ、藤堂家の士であつたが後辭して江戸に出て、上水堀割の時監督等してゐた。そして此處に遊んだのである。初は龍隱庵と云つた。彼の江戸に出たのは寛文十二年(1672)の事であるから、既に上水は出來て居た。上水開發とあるのは大洗堰その他の修理である。(東京市史稿水道篇)

護國寺

神戶山悉地院 新義眞言宗豊山派 大塚坂下町一六番地

市電 護國寺前下車。

本尊は如意輪觀音。天然より渡來、天然の瑪瑙石像、桂昌院の持佛であつた。帝都七觀音の一である。表門は南面して二つ、共に瓦屋赤色である。西側の仁王門(元祿年間の物)をはいり石段を上げれば右手に大師堂、府内八十八ヶ所の八十七番である。正面は觀音堂即ち本堂である。元祿十年(1697)建、銅葺、その結構雄大、手法の堅實なる、元祿時代の特長を示してゐる。國寶である。内部の上方に狩野重信筆涅槃像の畫幅(堅約二十四米、横約十米)が巻いてつるしてある。之を床に掛けんとするに足代を組み、綱で引上るも容易に軸木迄開き盡し得ないと云ふ。本堂左側、右から數へて四本目の柱の上の方に注意すれば、猿柱と言つて木理が猿の面に似たのがある。

本堂左手の月光殿は江州園城寺の塔頭、日光院の書院が移されたもので、やはり國寶である。その左は藥師堂、右は忠靈堂、日清戰爭戦死者を祀つてある。

護國寺境内から豊島岡御墓地にかけて元、幕府の高田藥園があつた。寛永十五年(1638)設置され、綱吉の時この地に伽藍を構造するため、天和元年(1681)廢され一部が他に移された。(小石川御藥園の條参照)、護國寺の開山は亮賢で、上野國碓氷八幡宮の別當大聖護國寺に住し、驗者として世に聞え、綱吉の母桂昌院の爲に祈禱し、綱吉が誕生しては常に護持の事に任じてゐた。綱吉が將軍となるに及び天和元年二月七日立亮賢に高田藥園の地に伽藍建立の事を命じ、元祿中桂昌院大に修繕を加へて寺領を増し、總計四萬七千坪餘であつたが、享保



年間神田の護持院が炎上して同三年(1718)三月この境内に移され、約半減した。そして護國寺の住職であつた隆慶を改めて護持院住職とし、觀音堂を特に護國寺と稱し、之が住職をも兼帶せしめ、かくて寺領は兩寺を併せて二千七百石に達した。寶曆八年(1788)後は兩寺の寺務を護持院住持に任じ、別に護國寺住職なく、全く護持院の附庸となり、明治維新に及んだが、神佛混淆判別の令の出た日役僧官に請ふて還俗し、護持院の名是に廢れ、護國寺が復興された。兩寺並立の時の境内は東半が護持院、西半が護國寺、今の御墓地は護持院境内にあつた。

寺寶には國寶となつてゐる尊勝曼荼羅圖(鎌倉時代の物)金銅獨鈷鈴(藤原時代の物)、その他隆光日記等がある。

觀音堂右手の墓地に大隈重信、裏手に三條實美、山田顯義、奥に山縣有朋、又開山亮賢の墓がある。

因みにこの護國寺とか、神田の護持院、湯島の靈雲寺、淺草の大護院等の建立はすべて綱吉の時代に出來た。

これは彼の母桂昌院の信仰深い性質から來た口入が大に働いてゐるのである。神佛信仰は當時の女に有り勝ちの事で、特に桂昌院の如き地位にあるものにはそれがいと華々しく振舞はれ易く、社寺の寄進や再建などは表向き威權を揮ふ手頃な事項であつたらうが、この爲に財政の紊亂を來した事はその一つの原因として見逃せぬ事である。

尙七觀音をあげれば次の如くである。

淺草公園

淺草寺

正觀音

上野公園裏

大黒天堂(舊駒形堂護國院)

馬頭觀音

上野公園

清水堂

千手觀音

同 不忍池

辨天堂

千手觀音

日暮里諏訪社前

養福寺

如意輪觀音

駒込蓬萊町

大觀音光源寺

十一面觀音

音羽町

護國寺

如意輪觀音

豊島ヶ岡御陵

市電 護國寺前下車。護國寺の東、電車通に面して御門がある。

もと護國寺の境内であつたが、明治六年九月十八日明治天皇第一皇子稚瑞照彦命が薨ぜらるゝや、即日護國寺邊を検して、寺の後の山八千坪餘の地を擇び、御墓所とし、東京府をして其地を宮内省に引渡さした。廿二日太政官達して同地の舊名權現山を改め之を豊島岡と稱した。之が豊島ヶ岡の御墓地となるの初めである。

域内有栖川宮熾仁親王、小松宮彰仁親王、北白川宮能久親王等幾多皇族の御墓がある。(東京市史稿御墓地篇)

大塚先儒墓所 大塚坂下町二七番地



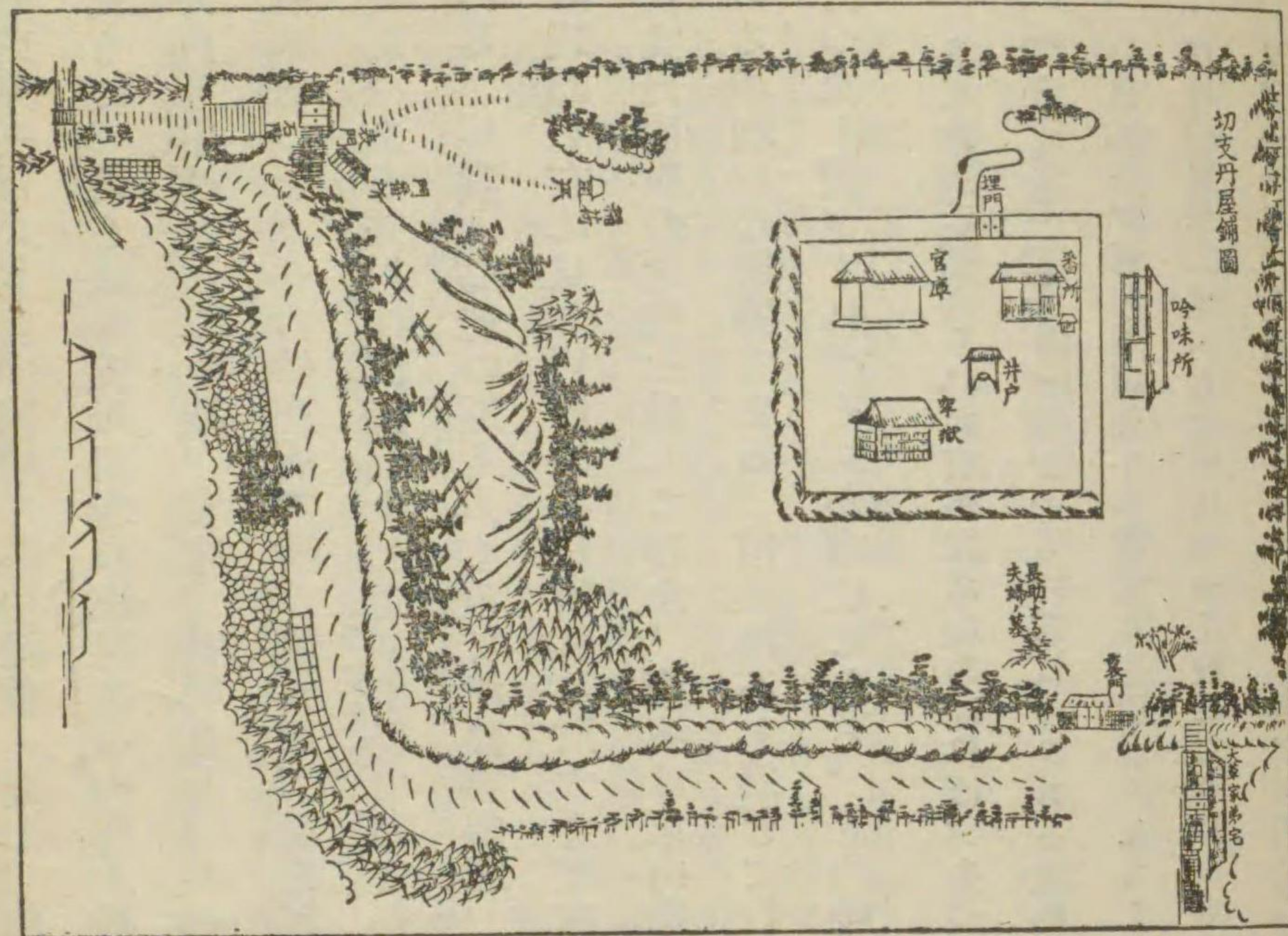
市電 護國寺前下車。護國寺の方から大塚仲町の方に坂を登り、途中で左に折れ、吹上稻荷の鳥居の一つ先を曲る。

皇族御墓地に接續し、護國寺の裏にある。初め幕府の馬を棄てた場所であるので御厩島または馬棄場と言つた。八代將軍吉宗に用ゐられた學者として有名な室鳩巢が、江戸に來た初め一時大塚に居たが、その後駿河臺に屋敷を賜はりその歿するや、生前の志に従つて之をこの地に葬つた。之が大塚先儒墓所の起源である。

墓所には室鳩巢の墓のほか、寛政三博士たる柴野栗山、尾藤二州、岡田寒泉、及び古賀精里（以上本郷區聖堂参照）又その子古賀洞菴、子古賀茶溪（幕府の儒官と爲り、後我が國に於ける洋學校の始たる洋學所の頭取と爲り、明治十七年歿）等葬られてある。然るに其後名も面白からの儒者捨場として殆ど世に見棄られ、名高い學者の墓とは思はれない程に荒果ててゐた。そこで有志の人が大塚先儒墓所保存會を起し大正二年發會式をあげ、寄附金を募つて之に修理を加へ、名を大塚先儒墓所と改めて大正五年此の墓地と維持費とを東京市に寄附して會は解散した。後池上から木下順庵の墓を此處に移した。

切支丹屋敷址 若荷谷町

市電 竹早町下車。交番の脇を西に向つて庚申坂（之が一般に切支丹坂と呼ばれてゐる）を下りて進む。庚申橋から緩やかな坂、これが中途迄切支丹坂である。左手の垣根の始る直ぐに一米足らずの石があ



切支丹山屋舗圖

る。それは八兵衛石（今は夜泣石）といつて由來は不明であるが色々の傳説を生んでゐる。もと此の左右に道が通じてゐ、正面の坂が明治になつて開かれるや、左右の道は自然に消滅し、宅地等に取込まれてしまつた。切支丹坂は右にのびてゐたのである。八兵衛石はこの右手の道に沿つてゐたのを後移轉されたのである。昔は此邊を表門として大體西の方に屋敷が廣がつて、その中央の一廓は現に檀野禮助氏宅地を中心とした邊にあつた。坂を登り切つた左手に切支丹屋敷址とある東京府の標石があり、右手檀野氏邸内に今組井筒の相當に深い井戸が残つてゐる。（上圖は小日向志所載）切支丹屋敷は宗門改役として全國の禁教政策を統轄した宗門奉行井上筑後守政重の下屋敷で、初め便宜上切支丹を收容して糺明したのを段々擴張し



て正保三年(1646)幕府の御用屋敷となし、牢屋を建て、切支丹宣教使の國禁を犯して日本に渡來したものの、若くは切支丹信者の嫌疑ある内外人等を捕へて審問し、又は檻禁する所にしたのである。井戸を中心として牢獄、官庫、番所あり、その周圍を二十間四方の石壁が取り圍み、その西方に吟味所があつた。その外死體埋所、梟首所、斬罪所、火刑場もあつたと傳へてゐるがこれは疑問である。また今ある井戸は位置が少しよりすぎてゐるから、檀野氏臺所の井戸がそれではないかとも言はれてゐる。屋敷は邸前の道もふくめて津輕男爵邸、シ・エツチ・エバンス氏邸迄も及んでゐたのである。檀野氏邸を右に見て行けば塀の折れる所大きな露路がある。これはもとは迂回して八兵衛石の所迄出て切支丹屋敷の北境を爲してゐた。南境は東山農事株式會社所有地の鬱蒼たる中に辛くも跡をとどめてゐる淺利坂の遺跡である。府の標石を過ぎて行けば道が左に曲りまた右に曲る。右に曲らず、眞直ぐ行つたと假定すればそれが南境になる。府内備考に切支丹屋敷蹟は淺利坂の北の方なりとある。

さて此處に捕へられた有名な者をあげれば、先づ寛永廿年(1653)シシリヤ島、パレルモの人ヂョセフ・キヤラ(Giuseppe Chiara)等がある。彼はキリスト教を棄て、耶穌教徒の傳道規則を白狀したので大に賞せられ、その後幕府が切支丹宗徒を穿鑿する手引者としてこの屋敷に居り、姓名を賜ふて岡本三右衛門と云ひ妻さへも賜はり、貞享二年(1685)に至つて歿した。

又寛永五年(1708)シシリヤ生れのヨアン・パツチスター・シドチ(Thaddeus Siodoch)が捕へられた。彼は

宣教使の最後の潜入で、此を訊いたのが新井白石である。その詳細なる顛末は彼の著西洋紀聞にあらはれてゐる。シドチは熱心にキリスト教の冤を雪ぐ事に努め、幼時よりの官双で伴天連の召仕であつた。長助はるといふ夫婦を教化した程である。西洋紀聞は明治になつて公刊せられたが、西洋諸國の事や天文地理の事も合せて載せてあるは、鎖國時代に於ける日本の世界的智識の第一聲とも云ふべきであらう。尙白石は彼の説によつて布教傳導が必ずしも侵略にあらずと認めたまうである。シドチは此處で病死した。(正徳四年1714)牢舎は享保二年(1717)の火災で焼失した後は再建せられず、次第に邪教徒に對する警戒は不必要になつて行つたのであらう。獄舎の廢せられたのは寛政四年(1792)でその後は土邸となり、小屋敷と稱した。文化中毛利讀岐守の別邸となると間宮士信をして山莊之碑を建てさせた事がある。(中野區山莊の碑の條參照)猶、崖の下第六天町四一寺田香苗氏の地内に十字碑がある。高さ一米程の天然の儘の石に稚拙な手で十字一箇を刻んである。池中より發掘せられたもので、切支丹屋敷に關する物であらうが由來がよくわからぬ。恐らく切支丹屋敷時代の誰か、先没者の誰かの爲に極秘に手細工し、製作し直ちに土中に埋めた物と思はれる。(詳細は川村恒喜氏著史蹟切支丹屋敷研究參照)切支丹坂を下り左に進むと、道の二俣に分れる角に清水山深光寺(淨土宗鎮西派小日向若荷谷町二八)がある。瀧澤馬琴の墓所である。寺内に馬琴書の芳流と書いた扁額がある。八犬傳の芳流閣は本寺の裏手の屋根を擬したと言はれてゐる。

## 白山御殿址 白山御殿町

小石川區



市電 指ヶ谷町又は八千代町下車。西へ約三百米入る。

白山御殿町の丘陵の殆ど全部その地で、承應元年（1652）上州館林城主松平徳松（後の五代綱吉）の下屋敷となり、寛文二年（1662）及同九年に大に擴張、宏大なる御殿、御矢倉、大手御門を構へ、白壁を繞らし周圍の總堀へは千川の水を引いて立派な物であつた。この地は元白山神社の鎮座あつた地であるので白山御殿とも稱せられた（簸川神社の條参照）。將軍となつてから小石川御殿奉行を置いて守らせ、正徳三年（1713）この館を廢し、御藥園及旗下士の宅地とした。御藥園は今、帝國大學附屬植物園となつた。

### 小石川御藥園址 白山御殿町

交通は前項参照。

大體今の小石川植物園の地である。正門は昔の御成門で、這入つて坂を登り左する。坂の中途に東都最古の染井櫻がある。温室の脇に立札あり、「舊幕府時代の將軍家乾藥場遺跡面積四十坪」とある。石が三つ、此處から左の方に立札が見える。「甘諸先生甘諸試作場の遺跡百八十三坪云々」、試作したのは享保二十年（1735）。此處から斜右に角桁の井戸がある。此附近が養生所の跡である。又施藥所とも云ひ、享保七年醫師小川笙船の目安箱に入れた投書の意見を用ゐて之を起し、同十二月より貧困の病者を收容し藥餌を與へ出したと云ふ。今の東京養育院の前身とも云ふべきで維新になつて東京府に引繼がれた。

元の道に戻れば大公孫樹あり、藥園預り岡田氏の宅址で、慶應四年危く伐木の難を免れた。此木の右手前方より嘗て貝塚が發掘された。なほ進み青い立札に氣をつければ、肉桂（享保七年輸入元文三年移植）山櫨（享保十一年移植）酸棗（享保七年輸入）山茱萸（享保七年輸入）等の老木ある邊は昔の藥園を思はせる。進んで左に曲り林泉地に東屋の邊から降りれば途中に船繫松の遺跡がある。林泉地は諸侯の下屋敷地の址である、山側を行けば白瀧の址もある。泉地には蓮や菖蒲あり、巨大な鯉が泳いでゐる。なほ行けば甘諸先生甘諸試作場がある。

藥園を置く目的は容易に藥品を得る事、藥種の眞偽を判別して藥効を攻究する事で、學問の復興に伴ひ、古來の制度である大寶令も研究せられ、藥園の復舊計畫も起る。一面偽藥の流行を抑制する必要で、寛永十五年遂に江戸城の南北に藥園が開かれる事に爲つた（日本藥園史の研究）。南藥園は麻布御藥園と稱せられて今の麻布富士見町に在り、北は大塚（高田）御藥園と稱し、今の護國寺境内の地にあつた。北御藥園は天和元年（1681）に廢止され、一部が南御藥園に移つたが、この藥園も貞享元年（1684）小石川御殿地の北部に移され、爾來小石川御藥園として受繼がれ、當時一萬四千餘坪を有してゐたが、元祿十一年（1698）四月御殿普請の節、御家下並びに烏籠御用地として六千坪程上り、残り八千坪の藥園と爲つた。正徳三年（1713）小石川御殿引拂の時跡地は諸侯の下屋敷となつた爲、藥園地も亦減少し二千八百坪になつた。此時は藥園の最も縮小された時で、享保六年（1731）の八月將軍吉宗産業振興の主旨を以て御殿地残らず藥園の地としたので、藥園の總坪數は四萬四



千八百坪になつた。後屢々諸士の下屋敷となし寶曆頃坪數は約半減した。

明治二年大學の所轄になり醫學校御藥園と稱し、四年文部省の直轄、八年小石川植物園と改稱、明治十年東京大學の附屬となり今日に至つた。(前項と共に詳しくは上田三平氏著日本藥園史の研究を参照)

正門前の大通を塀について行けば籾川神社に達する。

籾川神社

村社 林町五二番地

市電 氷川下町下車。東南へ約三百米入る。

祭神 素戔鳴尊

高臺で、本社は近年修築されたものである。創建年月よくわからず、新編江戸誌、江戸名所圖會等によれば、當社は人皇五代孝昭天皇御宇鎮座で、八幡太郎義家奥州下向の時、參詣の由。其後了譽上人當社再興あつて社地に聖問庵を結んで卜居したと。

末社に稻荷神社、富士神社、八幡神社、琴平神社、忠魂社、五柱神社、常盤稻荷神社がある。

此社は元白山御殿の地にあり、御殿營築の時此所に移されたのである。その舊地は原町百三十、岡田醫院(藥園預り岡田氏の後)玄關の傍の小祠がさうで、白山神社も並んで居たさうだが、家人に聞いたらはずきり判らぬと言つて居られた。

市電指ヶ谷町下車。西北へ約二百米入る所に日蓮宗信弘山本念寺(原町四十番地)がある。その舊地には、

田・蜀山人の墓がある。

白山上で下車指ヶ谷町の方に下る坂の右の方に、曹洞宗醫王山妙清寺(白山前町五六)がある。墓地に文政天保年間の國學者屋代弘賢の墓がある。

白山神社

郷社 白山前町七七番地

市電 白山上下車。指ヶ谷町の方に坂を下つて右へ入る。

祭神 菊理姫命 相殿 伊弉諾尊 伊弉冉尊 合祀 譽田別命

鳥居を潜れば右手に富士山と稱する小山あり、淺間神社が奉祀してある。本殿は近年大に修築された。天曆年間加賀國石川郡白山神を今の本郷湯島の地に勸請し、元和三年(1617)小石川御殿の置かれた地に移し、明曆元年(1655)白山御殿營築の時之を今の地に移すと。(籾川神社の條参照)

江戸御府内十社の一に數へられ、明治元年准勅祭となる。この地の地主神は八幡宮で、本社に合祀してある。口碑に源義家が後三年役に遠征して來た時、この地で敵に會つたので、石清水八幡に祈願をこめ、旗を櫻の梢にかけて敵を破り、遠征の歸途八幡宮を勸請したと。今境内に白旗櫻と稱するのがあつて下に碑が立つてゐる。

祭日は九月廿一日、なほ末社に淺間神社・殿島神社・松尾神社・三峰神社・稻荷神社の數社がある。(久野)